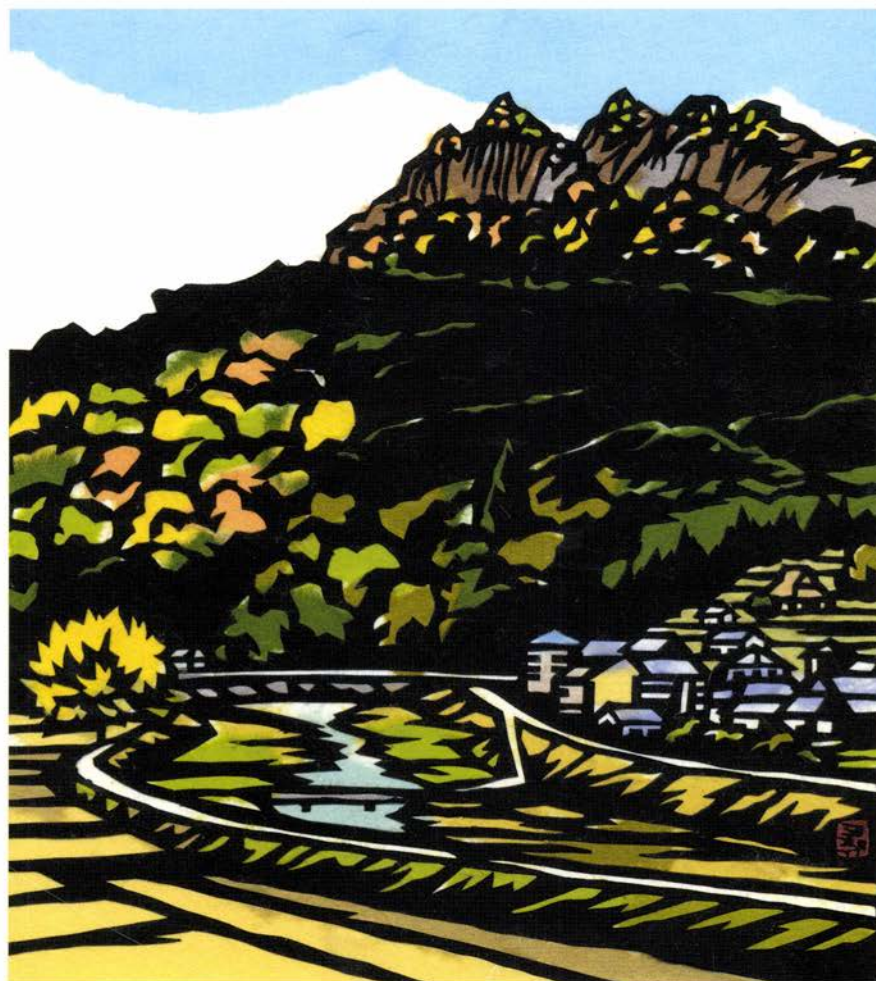


川柳塔

昭和四十一年一月九日発行
平成二十年十一月一日発行
創刊大正十三年 通卷九七八号



日川協加盟

No. 978

第14回川柳塔まつり特集

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口1/6頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③2/3頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月23日

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル 201号室

TEL 06-6777-9134 90

川柳塔社

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限りです。
■締切 11月23日（本社事務所宛）

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切りは二時。

平成二十年（二〇〇八年）

十一月七日（金）アウイーナ大阪

十二月八日（月）アウイーナ大阪

平成二十一年（二〇〇九年）

一月七日（水）アウイーナ大阪

二月九日（月）アウイーナ大阪

三月九日（月）アウイーナ大阪

番傘百年

河内 天笑

抜けるような青い空、10月12日の番傘川柳本社創立百年記念全国川柳大会はこれ以上ない晴天に恵まれる。午前10時開場のなら百年会館へ大阪駅一番ホームより8時43分発の大和路快速へ集まり同車に天王寺組も合流。完司・公弘の鳥取勢、竹原から蘭幸副主幹ら合計44名の川柳塔同人誌友諸氏大挙での参加となる。

明治42（一九〇九）年9月12日当時大阪毎日新聞の川柳の選者西田當百氏が「番傘」の母体である「関西川柳社」を起こし、久良伎門下の主力に五葉、路郎、水府、半文銭らも加わり大きな組織とした。こののちいろいろ経緯のあと大正2年1月15日付で「番傘」創刊号が発行される（発行兼編輯人岸本龍郎、発行所関西川柳社）

大正3年、路郎（27才）は當百の媒酌で河盛霞乃と結婚、大正4年路郎は番傘を脱退。

大正5年當百引退、大正6年に関西川柳社は水府宅へ移り同7年「関西川柳社」から「番傘川柳会」へ変わる。尚、この年の7月28日に現主幹磯野いさむ氏がこの世に生を受けているのも不思議なご縁である。主幹をつとめ

て26年目となるいさむ氏は挨拶で「番傘」という命名の由来、一号の発刊、昭和18年戦時下の短詩文芸への厳しい風当たりで改名を余儀なくされ「川柳往来」として二冊だけ刊行したこと、また「番傘」に戻ったこと、水府のお供であちこち出向いた事、そして、水府、路郎、雀郎、三太郎、紋太、周魚の川柳六大家の大きな遺産を引き継いで百年を迎えるに至った感慨を述べられた。

日川協会長今川乱魚氏は今年から「川柳文学賞」を新設したこと、7月には小、中、高の教科書に川柳を載せてほしいと要望したこと、そして大正2年番傘第一号の復刻版をつくった事を祝辞の中で述べられた。また奈良には番傘川柳の碑がたくさんあり、その地で百年の大会を迎えられた事を大きな喜びとしますなど述べられた。

『川柳塔』誌は二千年秋に千号を迎えます。はばたけ川柳塔をモットーにすばらしい千号の大会へ今すぐ準備のスタートをしても早くありません。

十月十二日きれいな十三夜

天笑

蟋蟀のフルトウまいもんだなあ

寝違えた首ハンドルもままならず

下駄で踏み外した弾み舌を噛み

はよとって柘榴ぽっかり口をあけ

ク ク ク ク



座右の句

行末はどうあろうとも火の如し

(路郎)

私の句

難病を持つている子の涼しい目

森元 ふみよ

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「曾爾屏風岩」

■巻頭言 番傘百年	河内天笑	(1)
川柳にもダイエツトを	川上大輪	(2)
川柳塔(同人吟)	河内天笑選	(4)
川柳塔の川柳讃歌 (47)	木津川 計	(45)
自選集		(46)
水煙抄	小島蘭幸選	(50)
麻生路郎句抄		(69)
温故知新		(70)
川柳雑誌より 一句を遺せ	麻生路郎	(71)
愛染帖	新家完司選	(72)
第14回 川柳塔まつり		(76)

同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親宴

川柳にもダイエツトを

川上大輪

「意志の伝達を言語に頼らない最たる国が日本である」とよくいわれる。言語にあまり頼らず以心伝心を重んずる日本の文化は、一を聞いて十を知る感性と知性の両方が求められる。余計なものを省いて、削って最小に純化されたものから無限を見るのである。」これは立野恵美子さんの『日本初、風立ちぬ』の一文であるが、川柳もまた、たった十七音の詩の中に人間の様々なドラマが繰り広げられている。川柳だけでなく俳句や短歌、絵画や生け花・茶道等においても無駄と思われるものが省かれ、壮大な空間や奥行きをもたせ「美」を構成している。

川柳を始めた頃は、言葉を省略してしまふと句意が相手に伝わらないような気がして、あれもこれもと、やたら言葉を詰め込んでしまふ傾向がある。すべてを説明してしまつたり、報告だけの句になってしまふと、句に余韻がなくなり、共感する楽しみがなくなつてしまふ面白味がなくなる。

誹風柳多留——一篇研究 40

檸檬抄「許す」……………高瀬霜石・木本朱夏共選……………(90)

「舌」……………岩本笑子選……………(92)

一路集「ざわざわ」……………野口節子選……………(94)

「クイズ」……………坂本峰朗選……………(95)

初歩教室「黒」……………三宅保州……………(96)

秀句鑑賞「黒」……………西出楓楽……………(98)

水煙抄……………宮尾みのり……………(100)

青空へ鶴彬銘石の除幕……………岩佐ダン吉……………(101)

川柳とギターのコラボレーション……………加川靖鬼……………(102)

各地柳壇（佳句地十選／白根ふみ）……………(104)

柳界展望……………(109)

十一月各地句会案内……………(120)

■編集後記（ひとこと／井丸昌紀）……………希久子・恵子……………(122)

座右の句

振り向けばみな透明になる月日

私の句

一本のばらになりたい赤を着る

（みつ子）

米田水昇

よく言われることであるが、「ああそうですか」と言われる句ではなく「なるほど」と膝をポンと叩くような句でないといふのである。

「句に余韻を残す」ということは、読者がその句に対していろいろと思いを馳せ巡らせることの出来る句、それが余韻なのである。

余韻は省略によって生まれる。省略のない句からは何も生まれない。

私も私の川柳も最近余分三兄弟と仲良しになってきている。せめて川柳だけでもしつかりダイエットをさせなければいけないと思っている。

川柳にもダイエットが必要だ。余分な言葉は削ぎ落とし、その削ぎ落とした部分を存分に楽しめる句を詠みたいと思っているがそう簡単にはいかない。しかし過剰なダイエットは独りよがりや言葉遊びに陥つたリする。どこまでダイエットをするのか、というのは作者の感性によるところであるが、「省略」をする勇気をもって、推敲していかねばならないと思っている。川柳は難しい。



河内天笑選

松山市 古手川 光

降る所は降るこれでもかこれでもか
命とは儚いものよ蟬しぐれ

難解句前にロダンの像になる

政治とは無力と思う拉致家族

自販機が普及ポイ捨ても普及

でかい広告保険会社は儲けてる

和歌山市 木本朱夏

ひっそりと秋の歩幅の美術館

山頭火にあこがれているスニーカー

あこがれのひととおんなじ空気吸う

しんねりと芋のかたちで耐えている

ビンの蓋ひとりは限りなく不便

半世紀無事故無違反ベダル踏む

大阪市 升成 好

この人のあつからかに人が寄り
ひらめきが浮かんで散歩引き返す
減塩食舌に文句は言わせない

人間に生まれ上手な嘘が言え

花束のように赤ちゃん抱き受ける

青空を領空と呼ぶ世知辛さ

尼崎市 春城年代

酸素吸入へだてている沈黙(武庫坊身まかる)

やぎ座のひとりさつと消え去る夏の果て

母さんが迎えに来たか両手挙げて

夫婦茶碗ずつとこのまま並べとこ

ひとりの道を辿るよすがに句と遊ぶ

白線の制帽あざやか眼裏に

八尾市 宮崎 シマ子

凜とすれば影堂々と従いてくる

火の玉のポーズで母を呼ぶ赤児

天使にも鬼にもなつてする介護

バラ一枝病室の風和ませる

カラスの知恵人の油断をよく捉え

稲匂う酷暑も無事に越せたよう

和歌山市 古久保 和子

眠らない街に昇った赤い月
マンションの最上階に宇宙人
誰ももう窓から顔を出さぬ街
高層のビルからだつてゴミが出る
インターホン越しの暮らしに顔がない
他人と他人エレベーターという個室

弘前市 高瀬 霜石

本当は注いでもらいたくつて注ぐ
五体満足で情緒は不安定
株食つて生きる新種の吸血鬼
父さんがこっそり入るおしるこ屋
冗談を言いそうになる葬の列
身の丈がずんずんと低くなる

奈良県 渡辺 富子

日本を変える英雄待つている
やっかいな男隣で詩を語る
いやらしい男ばんばん早送り
バックカスと肩組みうつを消している
しつとりのローションに変え萩の寺
ストレスをはらりと捨ててひとり旅

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

アーケード突然にまた店じまい
腕を組むロマンティシズム失せてきた
半信半疑少しさみしい思いする

甘くない世間に鮎が多過ぎる
果物の脇に隠れているナイフ
充電をしておりますと動かない

堺市 和田 つづや

宅地化にしのぶ野あざみ赤とんぼ
くつろぎは半身浴の鼻歌に
胸襟を開いて友が遠くなり
窓ごしの庭にも愁ある九月
苦しみのたび年輪に色かさね
幾百の石で一鳥取れぬまま

堺市 志田 千代

私のことを相談してるらし
思いつきり笑つて涙ためている
実らないかも知れないが種を蒔く
新人の素直さにたじろいでいる
包丁も米も研いでるお父ちゃん
民主主義のほころびが見えだしたよう

黒石市 相馬 一花

演技には見えぬ瞳で語りかけ
ぶかぶかと吸う紫煙にもある誇り
三昧の音に一糸乱れぬよされ節
びつたりの水着お肉を持て余す
お色気をまぶして渡す花名刺
堅物をその気にさせる声美人

松山市 高橋宏臣

前略ですぐ核心をついて来る
皿一枚割ってネジ花我を通す
朝吐いた言葉が落ちてゐる家路
新しい朝が来るから生きられる
あの辻を曲がればきつと夏の天
使い捨てカメラヘチーズしてしまふ

大阪狭山市 矢野梓

鈴虫のコーラス寝息ととのわせ
連敗のチームぎくしゃくしは始める
そのままの歳が出てゐる大写真
ふらふらと人の言葉にすぐ揺れる
お互いに譲れぬ予定入れてあり
噛み合わせぬ会話喜劇がまだ続く

川西市 西内朋月

人間の都合で増える外来魚
首たれた稲穂を野分なぎ倒し
豊作のキャベツをつぶす耕運機
相談に乗ったことからけちがつき
飲みに行く話にいつも入れられる
思い出を深いところに埋めておく

弘前市 高橋岳水

安心がほしくてサブリメント飲む
嘘一つついて白紙に戻れない
人間の習性知っているカラス

生き方の違いがもろに出る財布
人は皆旅人孤独道連れに
人間の形で風に撓う葦

堺市 西村りつえ

早とちり照れ笑いにも馴れている
瑞瑞しい個性をころす厚化粧
悔いもなくコロリと逝つた蟬時雨
ゴージャスにパツと散りたい赤い薔薇
放したら待つてましたと買う他人
アバウトの嫌いな人で味気ない

大阪市 板東倫子

ここだけの話は聞かぬことにする
みずみずし今朝到来の旬の桃
ふるりのグルメ豊かな山の幸
老人の日にだけ嫁がやつて来る
超格差世界はまるで蟻地獄
総理にも賞味期限があるらしい

砂川市 大橋政良

アルバイトです美しい汗を出す
耳底にこびりついてる嘘の数
馬鹿まじめ過ぎて動きがとれません
仏心を出したばかりに裏かかれ
物差しではかつてみたい長い舌
心配を山積してる高齢者

黒石市 佐藤 古拙

一泊に妻大袈裟な旅支度

生きることに旅になぞらい茶を啜る

もう無垢に戻れぬまでも遍路杖

寝袋も足して気楽なひとり旅

愚かさをたしなめているいわし雲

弘前市 福士 慕情

ちちははの御蔭この世に生を得る

厳しいが祖父が私を手放さぬ

お話をせがめば祖父の恵比須願

棟梁の祖父だが家は火の車

仏壇で祖父の写真が縮こまる

弘前市 櫻庭 順風

登頂に憧れ治療繰り返す

骨密度認知機能も落ちるうつ

ハードルの加齢に加え不整脈

涙出るほど辛く苦しくてうれしい

全身に喜びが満ちあふれてる

弘前市 今 愁女

美術の秋県展喜寿の初入選

余生まだ趣味に打ち込む仕合せよ

健やかで天下晴れてのこの自由

午後二時のベルはセールと勤が決め

個人情報ことば巧みに訊いてくる

弘前市 須郷 井蛙

ポイントも一緒に消して閉店し

サンシャイン長生き薬にしてくれる

やっとローン終えると修理攻めてくる

一輛に一人ですまぬ過疎の村

忍耐力おんなにとっても叶わない

弘前市 岡本 花匠

赤い月愚かなわれに活をいれ

鬼構え神威の鳥居ひと招く

北限のお茶にとりこの転任地

降り積るススにあぜんの岩木山

問診で方言の受け良い患者

平川市 小寺 花峯

棒ダラの笑いが続く冬の朝

胃袋に愚痴が溜まって怒る臍

一病を抱えて笑う処方箋

節約の炭火を秋刀魚睨みつけ

団塊の僕に年金吹き荒ぶ

さいたま市 星野 育子

夕日より昇る朝日が好きになる

大切だったのは小さな歯車

最初から無駄は嫌いな茄子の花

車道も歩道も嫌われる自転車

ああ言えばこう言う自称評論家

さいたま市 八田 敏

老いの坂越える区切りの誕生日

不況下の選挙日米違い過ぎ

温暖化異常気象の罰続く

異常気象合間懐かし日本晴れ

マンションの修理御近所知らぬ顔

東京都 岸野 あやめ

舞台では見せぬ楽屋の泣き笑い

まあいいか年齢を忘れてするお洒落

朝顔のおかげ早起きしています

生姜湯を飲んでやれやれ着るパジャマ

金儲けさせてあげると鳴る電話

東京都 清原 悦子

鳳仙花手の平に乗せ子がはしゃぐ

裏技を経験で知る割烹着

本棚のはこりをそつと拭く日課

あとはもう気力流れに添ってみる

平和とは言えない後期高齢者

武蔵野市 亀井 円女

もうええかあ こおこやでエーと初曽孫

不用意な口に待ったをくれた亡夫

次生まれたらギターを弾こう作曲も

頑固一途な亡夫も優しさだけは倍

孫は十人唯まつすぐに平凡に

横浜市 小野 句多留

今着いたコールに夏の虚脱感

きっかけでコンビニ酒の補給基地

髪束ね力仕事に女偏

初対面ひかえ目という好感度

チヨコマカと動く議員の夏休み

横浜市 菊地 政勝

道草を楽しむような話し好き

百面相ひろって通る乳母車

欲望が失せて痴呆の顔になる

夏バテにけだるく開く自動ドア

教育の行きつく先も金まみれ

川崎市 三浦 きぬ

老姉妹同居と決めてケセラセラ

年金で生きる計画あれやこれ

マンションは騒音もなく活気なく

マンションの自然雑草ビンに差し

狭いのも便利四方に手がとどく

静岡県 薊 田 獏 柧

七人の敵も同じく高齢者

ふる里に義理を果して戻る橋

本を読む姿勢でいびきかいている

草に臥た僕の昭和史一ページ

寄せ書の国旗と朽ちてゆく昭和

可児市 板山 まみ子

月よりも団子が好きな子とまるめ
被災地も分けへだてなく月明かり
満天の星に名月競いあい
天才を育てた親もすごい人
北斎の八頭身も日本人

大山市 関本 かつ子

人間が好きで汗かくボランテИА
正直な顔と言葉で総スカン
コスモスの群れは浄土の青写真
原点は数人だった大企業
しわの手もネイルサロンで活性化

犬山市 吉田 幸子

高いから止めた財布を握り締め
遣らされてやつとりハビリ効果見え
余韻残し花火水面へ降り注ぐ
お守りであったと保険満期終え
おしゃべりの相棒欲しや喫茶店

愛知県 早川 遯行

ガソリンの値上げへ酒を減らされる
兄弟がただ多かっただけの幸
効いたような効かないようなマムシ酒
髭を剃れ剃れと煩い妻なりし
言いたさを言わず別れた苦い酒

京都市 高島 啓子

すぐ乗ってみる敬老乗車証
二つ山越えて郵便局へ行く
新生児すぐに秤に乗せられる
掴もうとするとき風になるあなた
土日には行方不明になっておく

京都市 榊本 宏子

恋忘れ中間色で生きてます
チャイム押すまずはカメラで面通し
新築の実家に座る椅子がない
湿っぽくならぬ程度に引き締める
茂った木が隠す隣のプライバシー

京都市 三宅 満子

ケータイの充電切れが一大事
ハンディ越え泳いで取った金メダル
誕生日古稀へ階段また一つ
まわりからケータイ持てと姦しい
虫食いの菜っ葉取り合う朝の市

京都市 坪井 孝一

同窓会顔色を見て名を探す
乙女座がぴったりしないボクである
ブランコで二人の会話揺れている
街のティッシュ要りもせんのに手が出てる
飲み会で仲を取り持つ柿の種

長岡京市 山田葉子

大阪市 中村れんげ

ウインドウショッピングだけかかさない

遅れてもベース守ってゆく強さ

言い訳を考え出すと遅れそう

ストリートで胸元えぐる良い度胸

貰うことに慣れさせてから牙をむく

亀岡市 井上森生

虫取りもボニョも孫より熱くなる

屋久杉のいのちは人の百倍も

昨日より開き直って今日は笑む

十年^{ハスホート}旅券こんなものかな我がいのち

年極めで好きな作家を順に読む(司馬、宮部、五木、村上)

八幡市 結城君子

早よ癒そ中之島線が待っている

足止めて蟬のなきながら草むらへ

ああ美味し汗ふきながら鴨なんば

国産のさくらんぼよと念を押し

外出禁止ゲリラ豪雨はまだ続く

大阪市 原田すみ子

飛行機に乗る時少し祈ります

久し振リスカート穿いて風に乗る

各停に乗って人生急がない

マイホーム敷居が時に高くなり

骨密度低いわりには頑固者

生まれ月葉月の庭に夾竹桃

血圧計わたしの今日を支配する

少しでもわたしにおくれそのメタボ(やせ女)

牛歩でもいつかの運にかけている

暮れなずむ夕陽ヶ丘に舞う落ち葉

大阪市 坂裕之

小心で粹から出ると歩けない

色メガネ世間見えずに一人ぼち

よっこらしよ掛け声かけて起き上がる

身を捨てて尽すことから動き出す

和と徳の色紙父から子へと継ぐ

大阪市 渡部さと美

可愛い欲もつと楽しく生きられる

何でだす男に限りドーピング

高野杉太古の苔に溶けてゆく

旅仲間つられ買いてまたふやし

つま先を意識してもけつまずく

大阪市 熊代菜月

落ちこめば励まし合える友がいる

傘寿すぎ一人遊びの出来ぬ母

夢ばかり追って娘は三十路こえ

はんなりときつい事言う京言葉

加齢です医者は無情につきはなす

大阪市 小糸昭子

はて家に日の丸の旗あったかな
横に寝る猫にふとんを追い出され
中間層失くなつてますこの国で
惜しかった惜しかったなと酒量ふえ
商人まあまあだすは儲けてる

大阪市 小泉ひさ乃

呑み込んだ言葉が消化しきれない
シヨッピングすれば消えてる妻の鬱
喫煙の夫と暮す四畳半
ペダル踏まぬ友とバスでの遠回り
涼風に開けた窓から月そそぐ

大阪市 津村志華子

十五夜を絵にする母の芋団子
老母と見る月は格別美しい
満月にわたしの夢はかくや姫
雑念を捨てにきました萩の寺
庵の庭桔梗も品を備えてる

大阪市 福岡末吉

主夫仕事ひと息入れて句をメモる
グランドに度胸を撒いて勝ちを呼ぶ
自分史を彩るドラマ胸に秘め
愛すればこそ的小言と思ひ込む
予算枠手厳しうちの財務相

大阪市 川端一步

好きなことしている顔にある魅力
シャンソンが聞こえてきます秋ですね
百歳以上三万六千とは慶賀
源氏千年京都の秋は美しい
両親の愛情想う敬老日

大阪市 谷口義

おばあさんの予防注射は受けてない
メガネ屋の前を通つて駅に行く
オリンピックの好きなおばあさんになる
とつてつけたようなことは言えません
長い暑と短い秋が定番だ

大阪市 大川桃花

度胸ない男の口が小うるさい
歯痒いけど私に似てる子の動作
調子良い時は見向きもしない杖
減らず口母に浴びせた悔いがある
言訳を聞くたび募る不信感

大阪市 平嶋美智子

おだやかな天に感謝の布団干し
森林浴紅葉ちらほら見えてます
夏の陽と遊びほうけた黒い腕
目鼻くつきり男爵芋の自己主張
金バッジ小物ばかりが目だつて

大阪市 古今堂 蕉子

悪い人じゃない良い人でないだけ
ヒールの靴駄目と言われた腰と膝
もう長く良い事聞かぬ耳かゆい
説得の上手い男に拉致される
憂愁の秋だどつぷり浸りたい

大阪市 津守 なぎさ

ニガウリを探しあぐねるつるの伸び
裏技を教え手抜きをさすテレビ
好き嫌いいえぬベッドの回復期
孫の手を嬉しく使う旅土産
父親と一緒に泳ぐ浮輪の子

大阪市 池上 清治

骨身惜しまぬタイプの人妻によい
悪ふざけ型の漫才好きじゃない
おっかなびつくり魚捌きの習い初め
スピードの水着つけたら泳げそう
七光りの総理辞任も稲光り

大阪市 伏見 雅明

玉の汗ながしエアコン取り付け
血の滲む過去をソフトな語り口
かみなりを今では妻に落とされる
ベテランの場数を踏んだ作業服
上方の伝統残す繁昌亭

大阪市 西川 更紗

逆風は吹いても夢はあたためる
冷酒と鰻と花火の水都祭
懸念した聖火も無事に燃え上り
汗拭いてビールとおでん鍋つつく
夏祭りカサブランカの香る壺

大阪市 岩崎 公誠

百歳が喝采浴びて夢語る
誘われて月下美人を愛でる酒
順番が来てもマイクが届かない
悪人も金が出来ると毒が抜け
骨密度あちこち文句言い軋む

大阪市 森田 明子

ボケットのない服なんか着たくない
本音言う時は大阪弁になる
振り出しにもう戻れない螺旋形
緩やかなカーブは知らぬ間に過ぎる
病室へ化粧直してから入る

大阪市 鶴田 遠野

恋の川女は深さ知れたがり
無視された意見に自分見失なう
にこやかな顔を選んでいる遺影
どの子でも伸びると熱い塾講師
ひと言が生んだ誤解に揺らされる

大阪市 小谷 集 一

母さんの内緒を孫が来て喋る
賛成も反対もせず生き残る

ユニークな人アドリブが冴えている

年金は金の成る木だなどと思う

ほろくそに言う友達と飲み明かす

大阪市 榎 本 日の出

だんだんと弾まなくなる胸と足

子の注意素直に聞ける齢がきた

捨てられてゐるのに笑顔見せる花

男ひとりコンビニあれば生きられる

怒ってる証拠に今日は丁寧語

大阪市 榎 本 舞 夢

うちの猫向かいの家で飼われてる

山里のバス遅れても待つてくれ

裏切りの笑い声きく更衣室

カブト虫飛んで来ました絵手紙と

水しぶき浴びて輝く金メダル

大阪市 近 藤 正

呱呱の声大阪城に彬の碑

月と草虫の音を聞く彬の碑

多喜二とも背比べする彬の碑

生涯をかけた年金天引かれ

老いの坂険しくなつた七十五

大阪市 奥村 五月

少額の年金なのに削られる

氣い付けや冷めた家族におこる事故

はめられて結婚したと妻は言う

臍かじり父の嘆きも氣にかけず

元氣ない俺を頼りの影法師

大阪市 川 原 章 久

寿の文字に硯の海笑う

地球儀のまわり何処かが傷だらけ

飲む日課抗癌剤がうらめしい

夕立を喜ぶように鳴く蛙

日々届くメール嬉しい孫娘から

大阪市 井 丸 昌 紀

回つてるのは天井だ僕じゃない

土暴れ風怒る夏水狂う

励まされ余計みじめになつた僕

化けるのに見とれ一駅乗り過ぐす

飲む話微力ながらと嗜んでおく

大阪市 松 尾 柳 右 子

一人でもキャッチボールの隣の子

久し振り掛け算の九九書いて見る

孫からの手紙大事にしまつてる

夏の雨少し涼しくなっている

早朝のウォーキングに日が昇る

大阪市 岩崎玲子

カエルから虫にコース引き継がれ
オセンチな雲の配置が気にかかる

結婚をしたのも秋の風の中

大好きな秋の七草みな言える

無人駅遊んでくれる秋茜

池田市 栗田久子

狙われるほど財産は持っていない

年だから年のせいにはせぬことに

食欲の秋を引きずりかけうどん

試食した手前素通りなどしない

残月の白さで秋の深さ知る

和泉市 西岡洛醉

晩学の文机にある演歌節

冷や奴妻が手抜きの一品よ

タイガース老いの一步へ勝名乗り

善人の歩幅は今日も正確さ

朝寝坊百歳までの回り道

和泉市 横山捷也

はつらつとジーパン似合う薄化粧

阿波踊り老人ホームの笑い声

迎え火や母は方向音痴です

夏帽子女性がみんな美女に見え

風鈴も僕も耐えてる炎天下

泉佐野市 山本蛙城

物価高戦後思えば何のその

米中へバブル先進国の顔

水膨れした顔並べ儲け主義

騙す気を見せず咲き出す百日紅

禁煙の駅にぼつりと喫煙所

茨木市 藤井正雄

談合を聞き飽きている床柱

誘惑に勝って孤独な夜を過ごす

おいしいお茶均等法を知らぬ声

偏差値を刻み込まれる塾かばん

毒舌を吐いているのは負け惜しみ

交野市 山川日出子

ああ五輪喜怒哀楽のゆめ舞台

孫がポニョ教えてくれて家族の輪

小宇宙か孫が見つめるお仏壇

深夜便昭和の曲がなつかしい

箕面市長最年少の三十四(八月)

交野市 森本弘風

焼け跡にバラックだけがあつたのに

建ち並ぶ家に昔が還らない

旅をした後に苛酷なダイエツト

食べ盛り孫と行くのはバイキング

じいちゃんと一緒したげる足湯なら

河内長野市 井上喜醉

年金が汗かいている長寿国

金婚の思い出静か旅の宿

みそ汁は日本の美学四季が浮く

知っていて上手な嘘で知らん振り

天国は片道きつぷ使い捨て

河内長野市 村上直樹

長生きをしすぎたときの先案じ

ブランドのネクタイ今は紐がわり

年金をスライスしたり刻んだり

盛り場の渦でいのちのリフレッシュ

老人力燃えていずれば山動く

河内長野市 植村喜代

オリンピック結果どうあれご苦労様

しげしげと見る八十路目前の足

戦争がなければ昭和良い時代

もう一度あつたらいいいね若い頃(戦中派)

電池切れ手動出来ない物ばかり

河内長野市 水谷正子

あつい日もゆっくりあついお茶を飲む

親方の手綱ゆるくて尿検査

がぶり寄り見せるか小沢民主党

金メダル三百万はどう思う

減反や祭提灯だけが増え

河内長野市 山岡富美子

読むたびに大きくなってゆく芭蕉

値上げラッシュ耐えねばならぬ秋の陣

駄菓子屋でわくわくしてるるぶらり旅

消費税首を出したり縮めたり

せめぎ合い伸びる寿命と預金帳

河内長野市 坂上淳司

柔道も相撲も国技だったのか

星野ジャパン金しかいらん言うてたな

知らぬ間に選挙後援会会員

ブービー賞たんと持つてるお人好し

笑われてなんぼと笑う漫才師

岸和田市 井伊東吉

世は挙げて善悪規範麻痺してる

あちこちで貰って溜まるエコバッグ

政界も台風シーズン迎えてる

近代化道の険しい大相撲

ハラハラはお家芸ですタイガース

岸和田市 雪本珠子

旅先の風の匂いを持ち帰る

みな巣立ち猫が二人の間を保つ

ボサノバのリズムが耳に心地好い

秋風が持ち去ってゆく夏の恋

悩み事文字に吐き出し作句する

岸和田市 土橋 房枝

岸和田市 林 力子

逆切れしあとで虚しい自己嫌悪
テル坊主首をつられて罰ゲーム
ハンディを負う孫が家族強くする
何時キレル十七歳と擦れ違う
気になるなあジーパンの穴潔癖症

岸和田市 森 元ふみよ

バーゲンでそろり手にする値引札
今日もまた爽やかな方会釈くれ
ふる里の山も老いたよはげている
患者より医者顔色気にかかる
爽やかな秋を待ち侘び窓を拭き

岸和田市 原 さよ子

信仰は尊い石段苦にならず
心から感謝瞳に光るもの
美しく老いて和服の似合う人
意地つ張り人の意地つ張り見てる
老妻は一人で小言言うてすみ

岸和田市 岩佐 ダン吉

大勢を眺めて男煮えきらぬ
体当り他の策など持っていない
九条にびったりだらう平和二字
したたかな女が今日も少数派
思い切り泳いだ母の手の中で

感情を抑えゆつくり書く返事
押えんと私翔ぶわよ浮気虫
雛育つまでは固守する母の羽
グッバイと素直に逝けぬ向う岸
炎天の町で肋に溜る汗

岸和田市 米富 淳風

エアコンを愛しすぎたか喉痛め
行く夏を惜しんで月とランデブー
足早も痛し痒しの老いの秋
好季節去らないうちに旅をする
肩幅のいかつさ増して孫帰省

岸和田市 堤 檜代

日本丸船長さんを早よきめて
なにくわぬ顔で視察のお坊ちゃま
双六の休みにも似てベッド入り
葉刈りして祭囃がよく聞え
なによりも好きな手あみの季節来た

堺市 矢倉 五月

登りより下り助つ人ありがたし
すっぱんの日はだらだと暮れて行く
爪も髪もよく伸び背丈だけ縮み
マスターは寡黙コーヒー豆香る
お誘いを受けてしまった休肝日

堺市村上玄也

白熊のようにのそのそ暑さバテ
夏バテの胃に冷や麦が心地よい
傷口に塩塗りつけるインタビュ
飼い主の責任だらうメタボ犬
気は小さい癖に大言壮語する

堺市近藤豊子

スクラムを組んで柿の実たわわなり
ラーメンにようこそとの厚いハム
海あをあをクラゲはポニヨをのせてきた(映画、崖の上のポニヨ)
船のりの父の帽子にはげまされ
海あをあを竜宮城かも崖の上

堺市加島由一

言葉では女心は読み切れぬ
釣書に恋をしているお母さん
旗色が悪く減つてく飲み仲間
ふる里に台風が来たテレビ見る
寝込んだらそれきりになるウオーキング

堺市奥時雄

大国の戦車隣へ行きたがり
里のこと全部聞かされ受話器おく
年下の先生増えた定年後
先生のお見立て違いとは言えず
入院中ナースのランク付けをする

堺市山本半銭

さわがしい高齢医療どこへ行く
磨硝子シャワー浴びてる水しぶき
赤い金魚坊やはポニヨの夢を見る
真っ白いちりめんじゃこは器量好し
スーパの特売生きのいい鰯

堺市柿花和夫

裾捌きも鮮やかにして黒揚羽
山彦がもう止さぬかと返事する
肩書きの取れた名詞は迷子札
息拔きのパチンコ台で息をつめ
お開きを告げる幹事の声の張り

堺市源田八千代

会館に缶詰となるゲリラ雨
ニューキッチン天ぶら料理せんとこう
さわやかさ身に沁む秋の月と風
萩すすきだんご供えて月見酒
中学生たらふく食ったバイキング

堺市齋藤さくら

愛される人になろうと通夜帰り
同じミス三回したら笑えない
汚染米知らずに食べて情けない
気の毒な人の話に引き込まれ
ケータイが命の次になつてます

四條駿市 吉岡 修

無難ではあるが度胸が今ひとつ
テロ達に金子みすゞを読ませたい
食べるだけ食べて薬を思い出す
古日記の赤鉛筆が笑いかけ
気がねなく朝酒飲める旅はいい

吹田市 山本 希久子

規則正しくやってきた霜の月
不条理の世に生かされている命
勘に頼る他なし迷路抜け出そう
白いごはんはまだ懂れが捨て切れぬ
てのひらの運命線も年をとる

吹田市 穴吹 尚士

日に三度つい習慣で飯を食う
座ったらずぐうたた寝の癖がある
木石の顔して古希の熱い胸
乗るとすぐメール始める日本人
お見合いに付き添う妻が嬉しそう

吹田市 太田 昭

花を盗る男に犬を嚇ける
歳に適うライバルの線引き直す
百均を出て百均の顔になる
補聴器を付けて本音を聞き直す
くすぐったい足で砂丘を掴まえる

吹田市 瀬戸 まさよ

大正は希少価値です誇りもつ
今はもう鶴の一声通らぬ世
嘘言わぬから煙たがられます
誠実な医者をも名医と申します
敬老は歳の自覚をさせるため

吹田市 大谷 篤子

たつぷりのポテトサラダに笑顔盛る
やみくもに歩き心配ふりほどく
よく騒ぐから標的にされている
残り物文句も言わず食べている
森林浴しばらく虫になつてみる

吹田市 野下 之男

友愛に銃で御返し怖い国
政権をいとも簡単背負い投げ
篤姫に少しは似たら家の入
飯粒の残り気になる戦中派
有難み忘れた頃のダムの水

吹田市 須磨 活恵

天秤座何度読んでも素晴らし
秋彼岸参る夫婦に萩こぼれ
露草の優しさ芯のしたたかさ
飽きるほど使つて丈夫バスタオル
テレビ付けると保険屋のコマーシャル

吹田市 木下 敏子

髪を切り先ずはとび出し深呼吸
一日を楽しく過ごし二重丸

体操のできる手足にありがとう
好奇心あれこれ万障繰り合わせ
万歩計おしろい花に立ち止り

高石市 浅野 房子

ああ暑いああしんどいと過ぎた夏
売り言葉にのってどちらも傷が付き
オリンピック悲喜こもごもの幕を引く
自慢だと分からぬようにする自慢
空しさがつのと眠ることにする

高槻市 執行 稲子

はにわ出て田舎市になり活気付く
ストップがかからぬあかん血糖値
守護神がSOSと叫んでる
自慢ではないが外国行く気無い
下駄履いて外人さんの得意顔

高槻市 井上 照子

同居してハイハイハイと下に出る
許してはいるがこの顔ほころばぬ
内緒だともらす情報渦になる
肩書きがとれて身軽といかぬもの
尾ひれつき点が大きい円になる

高槻市 左右田 泰雄

生垣に寄り添うように咲いた薔薇
欲張りには要らぬものまで唾を付け
追い越した若葉マークが気にかかる
目を閉じてスピードくじをつまみ上げ
こだわりがずしりと胸にのしかかる

高槻市 峯村 勲弘

気持まで若返らせるクールビズ
ちゃっかりと天下り先決めてあり
ママ全て決めて我が家に波立たず
飲み薬数量競う同級会
古希迎えエンディングノート買い求め

高槻市 生田 義一

国中がソフトの快拳に酔いしびれ
北島君永遠に輝く金メダル
負けたらあかん鬼の星野の影もなし
お坊ちゃま二代統いて雲がくれ
新茶の香部屋に漂う昼餉時

高槻市 乙倉 武史

百歳が三万なでしこ乱れ咲き
ぼん育ち総理ぶち投げ得意技
汚染米に群れてる欲の亡者たち
やるだけはやった喉越しビール味
こころ意気だけは元氣な高齢者

高槻市 指宿 千枝子

豊中市 江見清

偽装偽装やがてばれるを知りながら
物価高売り手買手は悲鳴あげ

節約の優先順位きめて買い

胃のつばへつるりつるりと心太

あかね雲名残惜しんで空に浴け

高槻市 傍島 克治

金婚もすんなりときた訳でなし

思いきり泣いて心を洗いたい

京菓子より駄菓子が好きな育ちです

余裕ある笑いだ敢えて挑まない

旧友との格差恥じらうクラス会

高槻市 富田 美義

いい人生だった自分史いまのうち

献立の悩み亭主が居ればこそ

辛口の式辞の後は酒になり

嫁姑みんなルーズで旨くゆき

生き下手で他人より多い汗を掻く

高槻市 佐甲 昭二

他人事と思いろくろく聞きもせず

泳がせて噂の種を突き止める

穏やかに折合いつける形見分け

目印を曲りそこねてから孤独

何やかや理屈をつけて会いにくい

娘等が来てよく似た顔の台所

月光の下で己の非を悟る

先ず褒めてあとであれこれ意見する

飲む薬電子辞書みてチェックする

正直に話す男のしりぬぐい

豊中市 山門 タミ

忍耐と笑顔大事と悟りたり

十五夜だ心ときめき語りかけ

八十五これから先はおまけです

チギレ雲つかずはなれず大移動

一言で人の善悪左右され

豊中市 安藤 寿美子

一ぺんは夫をたたいてみたかった

もう長くない人生だ昼寝する

次の日曜まで羊羹はとっておく

毎日がまあ土曜日という暮し

御用聞き来る水曜日こころ待ち

豊中市 水野 黒兎

引出しの奥に昭和の青インキ

痒いのは指の届かぬ場所ばかり

狒犬がそつと聞いている願い事

あめ玉をどうぞローカル線の旅

隣国へ意外に深い海がある

豊中市 藤井 則彦

百歳になつたらちゃんと呆けてやる

取れ立てと殊更言われ二度お辞儀

相談をしたいと妻の低い声

むしゃくしゃをほぐしてくれるホルンの音

収穫は負けて分かつた自己過信

富田林市 中井 アキ

コロコロと少女が笑う始発駅

ふるさとの雨の匂いに癒される

本棚に飾つたままの志

距離おいた時から恋が良く見える

雑巾が乾く逢いたくなつてくる

富田林市 片岡 智恵子

天災が突如くる忘れぬうちに

言い訳のさ中の口がよくすべる

楽しみを少うし増やす無駄遣い

有るものを数え無いもの数えない

薬漬けこんなに飲んでいいだらうか

富田林市 大橋 鐘造

招待のお客で埋める猿芝居

プライドを捨てて治つた肩の凝り

錯覚の風が私に炎をつける

皆んな去り私一人の鬼ごっこ

シナリオになかつたギャグが受けている

寝屋川市 森田 麗

着流しがやつと似合うて大銀杏

減量中鬼の妻だと聞かされる

大吟醸ほどよく酔えば出る十八番

新築の家に掛けてる風水画

夏バテの犬の看護師しています

寝屋川市 籠島 恵子

手の平に乗っているふりする夫

アンポンタンやなアと言われたころの風

消しゴムを使つたあとに私の名

有料にするといひネエ救急車

転勤で行つてしまふか親ばなれ

寝屋川市 富山 ルイ子

来るはずのないメール待つ胸の奥

喜寿すぎて生きる指針を見つけねば

きつときつといい事あると信じてる

介護の友仏のような心して

息子から受ける介護のあたたかさ

寝屋川市 森 茜

にんにくを噛んだ女とすれ違ふ

涙腺がゆるんで秋の女となり

どこまでが威しかかの国の事情

二度まではのつてみようかお節介

生かされてうす紅色の陽に溶ける

寝屋川市 平松 かすみ

羽曳野市 徳山 みつこ

古文書の好きな兄居て我がルートツ
亡き父の一字一字に温もりが

慈しみ病抜けして古希の坂

不思議です記憶の父母は若いまま

無職にも遊びがあつて忙しい

寝屋川市 太田 とし子

神にない罪が我が身にのしかかる

慇懃なお辞儀は嫌な人だろう

笑いたくて友を誘つた縄のれん

無理矢理に笑つてきました里帰り

大物の髭には負けぬ不精髭

羽曳野市 永田 章司

ベテランの口癖今の若い者

踊り場の床の柔さが気にかかる

日本株昨日のダウが決めてくれ

願ひ事聞かずに消える流れ星

絵手紙に一句をいれて隠し味

羽曳野市 三好 専平

ひとまわり小さくなつた握り飯

豪雪と豪雨に悩む関ヶ原

投げ出した政権拾う浅ましさを

裏口を教えてくれる良い教師

雷に打たれて死なばよしとせん

鈴虫のすだきの内に夏が消え
夢を追う道に花あり蛇もあり

ある日ふとひとりを思うマゲカップ

ふたりでひとりよつこらしよどっこいしょ

高齢の壁を笑いでのり越える

羽曳野市 安芸田 泰子

物忘れ夫婦で演じてるコント

コスモスを微かに揺らし蝶の恋

健診の事無きを得て旅仕度

軽い嘘やがて私を攻めに来る

労りの言葉はないが目が優し

羽曳野市 酒井 一壺

あこがれて就いた仕事で意地があり

労わりの心の消える世の乱れ

切符などいらぬ世界で暮らしたい

幸せはこんなものかと酔っている

歳忘れ溺れる恋もまたよからう

羽曳野市 吉川 寿美

騙すよりましと自分に言いよかす

真つ直ぐに生きて時どきつんのめる

男勝りと言われ泣き言いえません

笑う日も泣く日も米を磨いでいる

党利党略国民不在茶番劇

羽曳野市 吉村 久仁雄

一票の微力に込める非戦論

盗塁も振り逃げもして六十路越え

妻に似た嫁だ息子が買う苦勞

世渡りへみんな羽持つ風見鶏

いつ死んでもいいが晩メシ待ち切れず

東大阪市 米田 水昇

がやがやと騒ぐ国会何決まる

オリンピックファイナー夏の空に消え

力出すパラリンピック心打つ

立ち話なくて疎遠の団地族

加工されかびも食べてる輸入米

東大阪市 北村 賢子

願わくば何時もさらさらしていたい

コーナーで息整えている別れ

ネットカフェ難民情けなくないか

食べて寝て鳴かず飛ばずに生きた悔い

病んで知る上辺の友と真の友

東大阪市 笠井 欣子

迷わずにきっちり来ます誕生日

元氣よく生かされ母の齢を越え

何なくも平穩無事が老いの幸

八十二今日から鈍行で発車

横見れば仏のようない寝顔

東大阪市 佐々木 満作

本心が偽装の見分けつかぬ弁

バーゲンのコーナー正に修羅と化す

不夜城の都会に潜む伏魔殿

都会とはえも恐ろしき戦場だ

行政の手抜き調査が後手を踏む

東大阪市 久米 奈良子

回復の兆しへする夢があり

喜べばよろこび上手ほめられる

母となる縁に遠く病む月日

赤ちゃんになった幸せお湯加減

イライラのあせもなだめる団扇風

枚方市 寺川 弘一

活断層と知らずに建てたマイホーム

引越しをするたび道具増えている

石鹸で流すに惜しい今日の汗

有名になるためギャグを練っている

月給だから有給休暇全部取る

枚方市 安達 忠央

不意の客よう知ってるが名を忘れ

気前よく財布があいた恋さなか

仕事する態度さわやか好かれる娘

許しあう心明日をみのらせる

図星言いびつくりしてる指した方

枚方市 森 本 節 子

枚方市 丹後屋

肇

大阪で生まれ育つて故郷がない
無欲無心おだやかな顔になつてきた

しつぺ返し豪雨竜巻温暖化

一度でも旅した土地はなつかしい

非食品米被害をうけるのは庶民

枚方市 小 林 わ こ

どうしよう坂の途中で気付いたの

字余りの中で私が揺れている

泣き虫がじつと抱いてた螢の火

ふるさとの井戸の西瓜が待っている

家中の空気を変へる咳払い

枚方市 伊 達 郁 夫

自画像が貧乏神になつて冬

雑草を抜かねば蒔けぬ花の種

お早ようにバラ一本を折つてくれ

風船が着地したから現住所

封を切るわつとあなたの声がする

枚方市 二 宮 山 久

リハビリのおかげ右の手ペン走る

パラリンピック始まり生きる力わいてくる

お掃除が好きで畳を丸く掃く

ほら秋がきてますます波を打つ

病んでみて夫婦の絆深まりぬ

手術後のむくみを撫でてやるばかり
病妻の指示に戸惑うぶきつちよう

外反母趾が振り向いてみるハイヒール

取り立ての免許で走る七曲り

猛暑日に誇らしく咲く百日紅

枚方市 海老池

洋

忙しいことは幸せだと思ふ

挑戦を重ねる男は磨かれる

補助輪を外したような親離れ

この演歌きくと別れた人のこと

帰る船帰つてほつとする漁港

藤井寺市 太 田 扶美代

思い出しても恥かしい懐かしい

塩からトンボ今年の少し早い秋

マンギョンボン号舌を嚙まずにまだ言える

辿りつくまでの苦勞は語らない

定年へ味見の役を押しつける

藤井寺市 鈴 木 いさお

露天風呂仕切りの向こう妻の声

背に罵声浴びてマウンド去るエース

ケータイの機能はひとつしか知らぬ

コップ酒表面張力までを注ぐ

ネイルアートした指先でご焼香

藤井寺市 高田 美代子

えじゃないか食べたい物をたべている

寛美の味出せる役者はもういない

食欲がでてくる頃に秋茄子

夏が逝くすこし淋しくなってきた

居眠りが出来る死角をキープする

藤井寺市 若松 雅枝

爽やかにドレスアップの秋来たる

恙無く朝のパン焼く老いの幸

雷の音に思わずテレビ消す

初恋も同じリハビリ励んでる

夜具一枚慌てて出さす秋の冷え

箕面市 広島 巴子

優雅だな丹頂鶴の愛の舞い

野兎と御在所岳でかくれんぼ

六甲で子も瓜坊も鍛えられ

去るものは追わず箕面の猿が消え

我家ではイタチどたばた運動会

守口市 井上 桂作

発想を替えて老後は元氣よく

多喜二論昔の話はとけば

国難を救える首相いつになる

お仕事に頭を下げてすみません

悠々自適年金給付命綱

八尾市 生嶋 ますみ

夏と秋綱引き合っている残暑

憂さ晴らす女の遊び高が知れ

ひとりでも重さ比べて買うキャベツ

高齢にも恥じらいがありお洒落する

寝たきりが恐くて散歩怠らぬ

八尾市 吉村 一風

悪口はどこかでやはり漏れている

口ばかり達者で老いもガタがくる

飲めるから幸せねえと妻が言う

旅楽し土産あさりで汗をかき

年寄って席ゆずるのが楽しなり

八尾市 高杉 千歩

プラス志向で耐えているポリープ切除

介護予防頑張ってますストレッツチ

指きりをしたこと彼も思い出し

葬式の写真笑っているのは誰だ

盆すぎの涼しさ喜ぶより不安

八尾市 村上 ミツ子

息子待つ浄土へ花に抱かれて(姑逝去)

姑の慈愛へ今は唯感謝です

ありがとうの気持ち棺に忍ばせる

スーパ―改装わが家へねずみ大移動

気力さえあれば体力ついてくる

大阪府 桑田 ゆきの

手の平に好きと書かれて許している

澄んだ眼に出逢い心を許し合う

稲雀追えば音符のように翔つ

暮れなずむ老農一人案山子めく

仕舞い風呂しじみ虫を聞いている

大阪府 野田 栄呼

山間地有名歌手のショーに沸く

近況の便りに見舞来て慌て

使い捨てもつたいなくて増やすゴミ

古希過ぎてUターンする誕生日

達筆へ返事ためらい絵手紙で

大阪府 澤田 和重

気後れして美人誘うたことがない

旨いもの求めたあげく妻の味

一笑に付されて本音宙に浮く

大笑いすると命が熱くなる

受け入れる器でつかい方がいい

大阪府 初山 隆盛

セブテンパーソングに秋が詰まってる

遠火花あの一瞬に燃えた恋

花火果ついのちの散華舞い終える

縁結び打診に耳を貸さない娘

スポーツに家事一切をこなす夫

大阪府 米澤 椒子

舞いおりる気分で麻醉から醒める

みんなの顔解るわかるよありがとう

休み過ぎ脳のエンジンかららない

キレたのは子供ではない総理殿

よいとこで出会って頼む郵便車

神戸市 両川 無限

履歴書の中にわたしの溺死体

次の世も僕でありたい骨の芯

風雪に耐えて根つ子を太らせる

お陽様に手を合わすとき真人間

言葉尻妻が掴んで離さない

神戸市 田中 章子

黄信号もう渡らないことにする

知らないで損することが多すぎる

仏壇のない家で掌は宙に浮く

無駄金も誰かの役に立っている

プライドの高いお人で首相辞め

神戸市 伊勢田 毅

一病で話が弾むクラス会

票田の荒れに気づかぬ二世議員

四十年夫婦の歩幅狂わな

二代目で見得することは知っている

挨拶もなしにボス猿そつと消え

神戸市 山口 美穂

夏風邪が延々癒えぬ秋日和

夏バテの主人に合わす万歩計

犬が待つてゐただそれだけで帰路急ぐ

日本のモラルそこまで落ちた汚染米

日本の今を築いた高齢者

神戸市 木村 貴代子

笑うこと探し数えて一人生き

待つものではなくも我が家が一番で

大花火消えた煙にうかぶ君

なりたくてなつた首相がつとまらず

耐えた事自慢話に変えて老い

神戸市 山口 光久

食糧難へ備蓄してます皮下脂肪

豊かさが逃げないように窓閉める

これが愛か心配事が付き纏う

嫁いだ子心配事は口にせぬ

誉め殺しとも気づかずに照れている

神戸市 山田 婦美子

大家族トイレのノブも忙しない

均等に七つに分ける難しさ

目鼻だち同じDNAで眠る顔

大家族十人十色でおもしろい

泣き笑いにぎやかな日がもう暮れる

相生市 中塚 礎石

言い負けた続き枕が聞いてくれ

捨てられてからを自由な石の音

父の章めくれば野心枯れていた

良く撮れるたびに遺影と決めておく

果たせない指からませた嘘いくつ

芦屋市 黒田 能子

一粒種たつぷり水をやりすぎる

お祝いの万歳ならば何度でも

素人とベテランの弾く同じ曲

大きな地声内緒話にむいてない

キッチン之母は背中で返事する

尼崎市 軸丸 勝巳

敬老の美德忘れた税保険

見捨ててはいない敬老記念品

毎日が敬老の日と孫に言う

老いて子に孫に従うそれもよし

カミナリに怖け台風寄りつかず

尼崎市 加川 靖鬼

松園の絵から歩いて来た舞妓

カスミ草皆んな目立てばじまになる

いつの間に毒気抜かれた泡立草

鳳仙花バネの原理は知り尽す

遺伝子は種属の鍵を放さない

尼崎市 長浜美籠

三田市 北野哲男

しなやかに朝をむかえる吾亦紅
つまらないことで眠れぬ夜を明かす

娘の夢を眩しく見てゐるのも齡か

骨粗症人を疑い深くなる

片思い星に泣いたり笑つたり

尼崎市 山田耕治

許された一合の酒舐めてます

うっかりに非難あつまる改札機

ストレスをリユックサックに詰めていく

ぴちぴちとした老人が会議中

家計簿をしめて旅行の話する

伊丹市 山崎君子

夫婦愛九十歳を全うし（武庫坊さん逝く）

懐い出は金毘羅詣り船の旅

終戦の思い出悲し十字星

臨時看護婦命を守る白い服

軍尉殿酒保のおはぎ嬉しくて

川西市 米原雪子

水やりのホースくねくね地面這う

気配りを熱いおしほり伝えてる

人脈も計算されて天下り

衝動買い後で自分が見えてくる

次々と変る世の中只眺め

しわくちやに地方紙つめて荷が届く

極楽に酒もタバコもないらしい

ご機嫌に上中下ありコップ酒

鳴く虫も鳴かない虫も冬支度

孫七つ口幅つたい受け答え

三田市 上垣キヨミ

出来過ぎたトマトを貰う子沢山

灯を消してあなたと同じ月を見る

良い話聞きたい耳を掃除する

家族留守今日ぞとばかり蟬が啼く

懐かしい人の墓石が増える盆

三田市 白井二英

腕時計日付なんかは見えていない

アクションの映画見た顔勝ち誇り

マニユアルの文は殆ど読んでない

今年古希あたりが境戦中派

宝くじ他力本願そのまんま

三田市 石原歳子

コーヒーの苦味を甘く感じる日

花生けて帰省する子 wait っている

浮き沈みあるからこの世面白い

秋深しメタボ検査が気にかかる

帰り道急ぐ私へ立ち話

三田市 久保田 千代

西宮市 藤木 直

相手にも一利もたせる思いやり

波風にもまれて赤い赤い糸

本心がバックミラーをふとよぎり

丸い背に習うこの世の歩き方

全身に陽を浴び表裏ない男

三田市 堀 正和

そう言えばしばらく会わぬ雨おんな

百選の水に飲めないものもあり

紙一重だったと負けた方は言い

ゴミの日の男はみんな無愛想

カラオケの採点法に異議がある

西宮市 亀岡 哲子

急カーブまだ踏んばれる足がある

子はみんなとしフリーに一人住む

過去帳に読めない文字と解けぬ謎

クラス会ばちばち曾孫出来はじめ

どなたでもどうぞと門が開けてある

西宮市 牧 潤 富喜子

バラバラと寄り盆三日過ぎてゆく

意気込みも少し萎んで行く暑さ

水吸った煉瓦とすこし生き返る

風穴をあけたつもりで辞任劇

水道の温度はすでに秋のもの

風動く秋の気配が肌を撫で

あちこちがきしんで老いを予告する

争いは望まぬ旗を顔に立て

はつきりと自分を語るメダリスト

いい人と言われて裏を見せにくい

西宮市 緒方 美津子

百歳の笑いじわには力あり

躲し方とても上手なにくい人

コンサートの余韻高ぶる星月夜

球児達に柔な名前はつけてない

へそくりで想定外のバリへ飛ぶ

西宮市 片山 忠

僕だつてここに居るぞといけずする

何を着て行こうが僕は僕である

婆さんに気晴らしにさす畑仕事

忙しなくしないと軽く見られそう

たこ焼を晩のおかずにするひとり

西宮市 菊池 トミエ

蛭来て一期一会の灯をともす

機嫌よく老いているのに後期とは

言い訳をすればその場が白け出す

コンサート若い息吹につり込まれ

コーヒーがホットになつて秋が来た

西宮市 秋 元 てる

姫路市 古川 奮 水

白米を研ぎしみじみと終戦日
恐山風もないのに風車

三つ目は自分のための石を積み

昨日の今日なのに卒寿と人は言う

敬老日苦り切ってた父の顔

西宮市 山 本 義 子

秋の月ずっと決断つきました

丸い月欲張ることも無くなった

眉の月お手の届かぬひとありて

いたずらな月雲のまにかくれたり

終電の月を見た頃若かった

西宮市 井 上 松 煙

作品展見知らぬ人に見入られる

散歩連れ同じ持病に馬が合い

生り年でなくても柿に肥をやり

子の相談親が段だん折れてゆく

足腰と相談してのお付合い

西脇市 七反田 順 子

生きるっていいなと思う秋の空

生命線それぞれ違う面白さ

豊作の稲穂深深お辞儀する

暗証を忘れ携帯買う羽目に

秋風にゴーヤも終り告げにくる

向日葵もやつと西日に水もらう

茄子貰い一品増えた膳の上

亡骸の蟬が歩道に目立つ午後

自動車の保険契約続けます

映像がチラチラ邪魔な積乱雲

和歌山市 福 本 英 子

赤とんぼ群れても秋はまだ遠い

盆から彼岸暑い暑いと亡夫に逢う

旧姓で呼んで何でも言える仲

あんたまだ生きていたのと減らず口

大正昭和平成ごった煮の家族

和歌山市 松 原 寿 子

どっと湧く涙を抱いて切る電話

ひと言に深みを増していく小指

抱いた愛凍土のままにしておこう

鏡かけめくって魔女と対話する

文束を開いて思慕をくり返す

和歌山市 上 地 登美代

幸せは笑って負けるにらめっこ

灘の水飲めば何でも喋る夫

リング剥く危なげそうな赤い爪

人間を七変化さすあぶく銭

金メダルゆつくり日の丸が上がる

和歌山市 田 中 み ね

ハッピーデー今夜弾むよ上にぎり
愚痴ひとつ零さぬ友は偉いよな
生きがいのように揚げ足とるあなた
大物も小物も無いよ旅仲間
相変らず嘘が下手だと思ふひと

和歌山市 武 本 碧

生き恥をさらしわたくしなりの地図
着飾った言葉に透けている本音
慌てるとびつくり箱がしまらない
ウエストの油断を許すゴムベルト
満身創痍上手の手から洩れた嘘

和歌山市 喜 田 准 一

嘘に毒足してきれいに见せる花
いい案が出て腹案は温める
欠点も長所も見せる実力者
成るように成るさと決めてから気楽
起きて来ぬ妻は起さずパンを焼く

和歌山市 玉 置 当 代

八月の空へ懺悔を忘れない
人気なくゴーヤがぶらり炎天下
クーラーの中でのぼせる更年期
目力に相談してる悩みごと
本当の夫婦になった定年後

和歌山市 松 尾 和 香

秋風に歩く朝夕さわやかに
期待した野球まさかのメダル外
足達者おかげで行ける峠歩き
ローカルの暮し何も彼も透き通る
乾く脳癒やすいっぱいかさ水

和歌山市 堀 畑 靖 子

動物の楽園にさえある死闘
運のない毛虫わたしの目にとまる
わくら葉が目立つ私も医者通い
恋もしたまあ上出来の走馬灯
ファッションもアナログ昭和抜けだせず

和歌山市 宮 本 三喜夫

様替わり店番婆さん見かけない
孫達も宿題せずに飛び歩く
ガソリン高遠出をしない家族です
水の事故多発傾向憂います
散歩する名前も知らぬ顔見知り

海南市 堂 上 泰 女

ツクツクボウシ早く宿題せよと鳴く
掃除された学舎待つてる新学期
窓開けて笑い声から目を覚ます
日本人コーチでメダル取るチャイナ
蟋蟀の音色残暑を追い払う

奈良市 米田恭昌

目先の利ばかりを追って老舗消え
リタイアしババの定位置ゆるぎ出す
リハビリのメニユーが軽い恢復期
女子ソフト涙涙の金字塔
星野ジャパン闘志空回りして終る

奈良市 天正千梢

辻褄を合わせるために払う金
チャンネルをひねるだけでもあるえにし
二次会はだんちょね節でしくくり
本心を言うには酒がまだ足らず
オカリナのやさしき調べ深夜便

生駒市 飛永ふりこ

和やかに秋の七草サロンめく
失敗を逆手にとって自信つき
寸志ですとはいえ見栄もたんと盛り
ダイエットまだ序の口という鏡
躍り口居住まい正し無のかまえ

橿原市 安土理恵

文字のない絵本に子らの小宇宙
シャルウィダンスお腹がへこむまで待つて
恋してる届かなくても届いても
スーパ―に寄って遊びを切り離す
ひきこもりルーツはきつと深海魚

橿原市 居谷真理子

風さんのお通り僕は葦になる
裏切られた娘が座る母のそば
決断の前にゆつくり手を洗う
ちちろ鳴く仏壇のこと墓のこと
ワンテンポ遅れ浮世の顔になる

香芝市 大内朝子

世話好きのおばちゃんの居るぬくい町
見えみえのお世辞に酔って女なり
生きるとはこういうことか手術台
ちまちまと買うたつもりを貯めている
ありがとう世の中捨てたものじゃない

大和郡山市 坊農柳弘

ぶきつちよな手で中年の設計図
サブライズ裁判員の阿弥陀くじ
絵画展ちよいとお洒落に秋ふたり
まぼろしを一つ削って月に酔う
アングルを変えて自分史をほぐす

鳥取市 倉益一瑤

破れてる手帖にあつた火の匂い
公園の隅に青春置いてある
スカートの裾を踏まれているいじめ
ときどきは道草をして生き返る
感性がキラリ銀髪から匂う

鳥取市 池原 天馬

塔がきた一喜一憂本開く
心配だケイタイくれるいじれない
夏野菜自給終れば高いこと
原爆館米下院議長十字切る
葬式はかんたんにせよ子ら守る

鳥取市 植田 一京

甘い物今更駄目と言うなかれ
褒め上手つい乗せられて舞っちゃまい
文明の機器がわたしを笑ってる
眼鏡変え少しイメージ変えてみる
痛い目に会って方角変えました

鳥取市 田村 邦昭

いい出会い別れがすでに待っている
下手な字が真心だけは伝えている
大器には隠れた時が詰まってる
結婚式仲人の嘘ほほえまし
一枚のチラシがみせる春と冬

鳥取市 西川 和子

滝巡りホケキヨホケキヨと迎えられ
ボランティア患者の笑みにすくわれる
天高く窓全開に紅葉風
患者から力を貰うボランティア
檜山へ辿る修行をふらふらと

鳥取市 春木 圭一郎

自らを変えれば周囲変わりだす
悩むよりまず立ち上がり行動す
相手への期待大きく持たぬこと
幸せのハードル低くすればいい
生きていて悩まない人などいない

鳥取市 中村 金祥

涼しさが立って人間取り戻す
OB会自慢話が背伸びする
猪へ美田も哀れぐちゃぐちゃだ
副作用恐れ出来ないダイエット
偽ものの健康器具で腰痛め

鳥取市 武田 帆雀

おとなしい人だが盤上は辛い
私も菊もドリンク飲んでる
忙しい行けば行く場に用がある
蟻塚のような髪型してはしゃぐ
酒愛し人を愛した葬の列

鳥取市 中宇地 秀四

真剣にヒョットコ顔で飛ばす種
取りすぎて溜息をつくバイキング
親方がこれじゃ力士も良くならぬ
喉元を過ぎた後悔二ど三ど
世のための戦争なんかあるものか

鳥取市 夏目一粹

深夜になつてからペンをとる流儀
おだてられると劣等感が騒ぐ
アメとムチ夢があるから鞭をとる
人の心を殺しても罪ならず
アナログの人間になり爪弾き

鳥取市 有沢せつ子

雨上がり草がわいわい伸びてくる
自販機の飲物ももう秋の色
ニアミスし緊張させた赤とんぼ
少しずつ老けるも神の思いやり
マネキンのように合わぬ服でした

鳥取市 近藤佳子

母の背なあの天国がしのぶぐさ
神さまの主治医にこの手包まれる
海の青空のおおさよとこしえに
オリンピック終わり血圧落ちついた
恋知つた頃の蓮華の押し花よ

鳥取市 山宮愛恵

ふる里の乳房に触れる手漉き和紙
二三品あると馳走になるひとり
気にするときりがいいから切り捨て
冷水で洗った顔へ紅を引く
許す気になると冷飯までうまい

鳥取市 福西茶子

好奇心満たすに足りぬ金と暇
すぎ去つてみれば些細な悩みごと
一日一笑ネタは身近にたんとある
盂蘭盆に昇天なんと幸せな
安物の帯かお太鼓むすべない

鳥取市 平尾菜美

いく日が続くのどかな父の顔
梅雨時の空太陽と耐え忍ぶ
降りかかる火の粉丸めてたたんでる
ものさしを正すと明日が見えてくる
拭えない涙宿して明日を待つ

鳥取市 岩崎みさ江

雑踏の中にいる間の自然体
メダカとも励ましあつて夏を越え
水甕のメダカにさえもあるいじめ
ケータイを持たされてから縛られる
後ろから刺客狙っている予感

鳥取市 横田春名

八十歳命の光る誕生日
日々つものるむなしさ払いふとん乾す
あたたかい一言生命湧き上る
時刻表見ては楽しむ老い二人
亡母のことよく知る翁墓参道

鳥取市 加藤 茶人

強がりの仕草とわかる母の勘
俺の嘘見抜いたような苦笑い
口数を減らせば敵も出来ずすみ
色気より食い気ポリポリ尻も搔く
追伸がまだまだ続く子へ小言

鳥取市 土橋 はるお

自民民主味を比べる時が来る
大胡坐かいてどぶろく賞味する
お隣と何んにも拒み合いはない
リモコンで動く男じゃござんせん
渦巻いたように実った稲を刈る

鳥取市 土橋 睦子

ファミリィで素麺流して遊ぶ
先祖の汗見るのがつらい休耕田
秋の絵にひとつ描きたす葉鶏頭
馬鹿らしい話に時代重ね見る
曲り角で待っているのは影法師

鳥取市 吉田 弘子

老顔へたしなみと言う紅を引く
着飾っても暮しの彩が隠せない
逝く順番ないので明日を生きられる
苦しみを沢山たべたメダリスト
飲み込んだ苦い言葉の副作用

鳥取市 太田 幸枝

一人の灯消してかすかに虫の声
薬より歩け歩けの万歩計
いい風が来るから窓を開けておく
認知症今が一番幸せと
思い切り老いらくの花咲かそうか

鳥取市 奥谷 彩子

チャンスを掴む片手はいつも空けてある
人生の余波立泳ぎ上手くなる
活断層列島ゆする地底の乱
今日より明日若返りたいストレッチ
子が巣立ち風鈴も秋夜のしじま

鳥取市 宮脇 道子

猛暑には駄駄っ児になる我が体
朝顔がテレビの色に勝っている
朝顔が生垣潰し咲き誇る
食われない動物に生き八十だ
メタボリでやっぱりだねと腹撫でる

鳥取市 岸本 孝子

ゆっくりと進めば見えるいい景色
今日だけの無事を頼んだ仏の灯
生きている証泣いたり笑ったり
咲けばすぐ仏にあげる庭の花
孫よりも下手な字だけど味がある

鳥取市 岸 本 宏 章

倉吉市 山 中 康 子

ありがたい言葉口下手でも言える
老い盛ん三食昼寝欠かさない
落葉だけ隣の庭と行き来する
聞く耳を持たねばトツプにはなれぬ
大物だざりざりに来てすぐ帰る

鳥取市 永 原 昌 鼓

勝つことにやつぱり意義がある五輪
情報 の 渦に河童も流される
物価高もろに突かれる台所
脳ミソのリハビリ今日も指を折る
長男の嫁に家系図のし掛かる

鳥取市 福 田 登 美

夏去れば冷やし中華が懐かしい
影法師わたしの全部知っている
余生には孤独もついてくる怖さ
身の丈の知恵で余生を温める
後期高齢わびしい覚悟せまられる

倉吉市 野 口 節 子

有難うの一言心踊らせる
思慮分別詰めたかばんを持ち歩く
魂をほぐしてくれる深緑
若者の仲間入りして疲れ果て
対岸が食生活をおびやかす

それからが見所だのに眠りこけ
介護する身にもしわよせ振りかかる
三角の目線に鮎をほおばらせ
普断から積み上げられた低姿勢
深ぶかと頭を下げる演歌歌手

倉吉市 最 上 和 枝

貧富の差河童村にも有りそうだ
青林檎ぼろりと落ちて歴史閉ざす
歴史刻んだ仏の前へ般若経
戦争体験話せる後期高齢者
油揚げ三角形を自慢する

倉吉市 松 本 よしえ

食べ物が無いほどつらい事はない
暮しにも無理が重なる高齢者
五千円の眼鏡だけれど良く見える
栗の実が弾けても孫まだ来ない
色艶もいい秋茄子を挽いている

倉吉市 牧 野 芳 光

出し惜しみしている内に歳をくう
ギシギシと蕾を開く時計草
大吉が出て変わらぬ日を送る
もがいている内犬かきが身についた
女房が居るから何もはかどらぬ

倉吉市 猪川 由美子

永田町キツネとタヌキ暗躍す
失言撤回されても気分晴れませぬ
農水相の席にお祓い必要だ
賞もらえばずっといい人続けなきゃ
タレントの口パクゴースト辟易だ

米子市 政岡 日枝子

公園に座るやさしい眉になる
夏のグラスを仕舞い物悲しい三時
秋の台詞で紅く賑わう里の山
蟬もなき止み補聴器も秋を聞く
トランポリン鳥の高さに視野がある

米子市 野坂 なみ

秋立つてよろずの神も里ごころ
時刻表神の基準は何だろう
太陽が回り生き物時を知る
漢方薬がそろそろ効いてくる時だ
こっそりで面白かったなプラトニックラブ

米子市 中井 ゆき

七転び母と言う字でおき上る
ごくごくと乾いた土が水を吸う
こっそりと桃の食べ頃なでてる
乾き切る心うるおす花畑
盆も逝き夕陽も沈み一人きり

米子市 門脇 晶子

内緒事かわかぬうちにきかされる
正装をすると背骨もしゃんとのび
腰痛が歩けば影も腰を曲げ
日本海の青さが平和よぶ
何処へでも助けに走るにぎりめし(日赤参加)

米子市 白根 ふみ

粗大ゴミ捨てて空しい風になる
愚痴っぽい酒ならさけも辛からう
独り居のわたくしだけを待つ夕餉
百日紅晩夏をまつて盛んなり
遠花火あの日頃に戻れない

米子市 青戸 田鶴

秋なのに秋にならない温暖化
曼珠沙華道しるべにと炎えている
髪染めて行こう最後の同窓会
天上から励ます声が聞こえるよ
無人駅時間ゆっくり流れている

鳥取県 盛田 夢路

ああ言えばこう言う人と五十年
時々八方美人して生きる
脳味噌が片寄ったのか物忘れ
太鼓腹してはいるけど気は細い
上向いた鼻に人寄る友が寄る

鳥取県 山下 節子

一点を睨み悔やしき耐えている
産声に天下とられたうれしい日
ぐちゃぐちゃの年金記録証せない
過去帳をたどり納得する顔だ
ライバルと並んで座り疲れます

鳥取県 石谷 美恵子

燃えている若さを世界地図が呼ぶ
雲行きを読んでペットも膝を下り
雲行きが悪いってん転ぼうか
一番に新聞を読む妻の贅

子孫頼むと過去帳からのメッセージ

鳥取県 佐伯 やえ

ケロイドよそなたもついに六十三
逢いにきた月と一会の風に逢う
無にかえるころに月が満ちてくる
アングルをすこうし変えて虹を見る
ふる里にまた秋の種まいておく

鳥取県 北村 稔

この世には誠意わからぬ人もいる
いもつくりおしえて死んだ人かなし
ボランティアのちをかける人かなし
いなかでもメダカがみえぬかなし
カラオケを持って逝くからいいですよ

鳥取県 深田 倶久

パソコンも携帯もない気楽
ほうり出し三度はご免総理の座
食えぬ米今日もニュースにざわしい
五頭だて馬車で走れよ自民党
横着もスローライフの仲間入り

鳥取県 竹信 照彦

ワープロの故障部品が無いという
人間の人工部品増えている
ケータイを持たぬと日陰者になる
ドタバタの庶民不在の総裁選
与党議員怖い解散総選挙

鳥取県 細田 裕花

知事さんが跳ねてふるさと活性化
なんでだろ拗ねて曲がったナスさがる
ピーマンの緑つるつる朝が来た
丈夫でも過信はダメという生身
計算上はバラ色の未来です

鳥取県 下田 茂登子

一呼吸置けぬ短気で怪我也有り
携帯電話一度も持たぬ老婦の座
冷房の付かない部屋は老いがいる
足腰が萎えてきたのが目にみえる
肩の荷が降りることない子の離婚

松江市 三島 湫 丘

醉眼にみな幸せな窓明かり
柔肌も棘も女の武器と言う

辛い夜は月の死角で独り飲む
残り火へ燃えろと煽る向い風
慌てるな敵も泥縄綯っている

松江市 松本 知恵子

尊徳の石像熱い夏も去り

涼やかな秋風という待ち時間
こぼれ種大地でじっと時を待つ

マンネリの暮らしを破るゲリラ雨

ドライフラワー来夏も咲かず赤い花

松江市 川本 畔

炊き上がる白い御飯の匂いかな

思い切り笑える泣ける秋の空

古希過ぎて三時に憩うティータイム

寝る時間月と相談して決める

月と目が合う窓際へ横たわる

松江市 安食 友子

摩訶不思議祭典とどんばちの地球

脳髓に私の滓が蹲る

フレー蟬今を限りに謳歌せよ

日暮れ時朱墨絵になる宍道湖よ

狸寝入りで窺っている気配りよ

松江市 小川 注 湖

国会はふらふら揺れて道探す
番傘の百年裾野広びろと

さわやかな風はいたずら裾めくる
フリーター座る場所ない世を恨む
目の位置を変えて眺めて知る世間

松江市 津川 紫 晃

携帯をてんでに持って無言劇

土産屋とトイレを結ぶバスツアー

便利さに金かけすぎて温暖化

なま温い風は五官を退化させ

階段が老いの体力値踏みする

出雲市 小白金 房 子

白い歯が笑う元気な通学路

鬼瓦真夏を耐えて月を抱く

メタボリの私を泣かす一面鏡

手術後は眼鏡もかえて辞書を書く (白内障)

意地で立つ案山子いたわる秋の風

出雲市 森 茂 美

室蘭の艦砲射撃偲ぶ夜

思い出の残る傘ですさようなら

山盛りに積んだ蟹売のお姉さん

川向こうの声が伝わる子の遊び

陽が沈む砂丘に長し俺の影

出雲市 竹 治 ちかし

母さんの時間で自転する我が家
不揃いの粒それなりに実を結ぶ
木陰には木陰に合った花が咲く
こっそりと進む良い事悪い事
それぞれに家のかたちのにぎり飯

出雲市 小豆澤 歌 子

神様の好きな太鼓が鳴りだした
吾亦紅やとと安らぐ初秋の風
鏡の前めっぽう増えてきたシミ
曖昧な返事に雨が降ってくる
風に逢い雨に打たれて丸くなる

出雲市 持 田 多輝子

一粒の種に生命の温み抱く
宍道湖で生活支えたしじみとり
山菜は自然の恵み食文化
逆境で結ぶ友情うら切らぬ
温もりの心伝える手話の指

出雲市 伊 藤 玲 子

病室を見舞って覗く鳩ポツポ
十三夜君の帰りを待っている
松虫になつて呼んでる窓の下
みみずくに姿を変えた芒の穂
悪党の歩いた跡が焦っている

出雲市 多久和 敬子

試着室鏡がいやと首を振る
水痘の孫預つて悲鳴上げ
漬物もぼりぼり嚙んで姑達者
満月が私の愚痴を聞いてくれ
物価高畑の野菜自己主張

出雲市 園 山 多賀子

過信せぬ 自信飽くまで失わぬ
可も不可もなく日記は白いまま
プライドを捨てて眠りが深くなり
未だ恋は半ばと思う酔芙蓉
卒寿まだ続けるつもり夢芝居

出雲市 石 倉 美佐子

いつそこのまま帰したくない夕月よ
遙々と来た人生のちぎれ雲
肩につと触れそうになる友ひとり
赤を着て雨の行方を見えています
秋雨前線もうこんなに近い

出雲市 富 田 蘭 水

秋祭り子供神輿のリーダーに
コスモスがしきりに私呼んでる
余生まだ日本の酒を守りぬく
サンダルが埋まった砂浜我一人
足湯して時計の動きばかり見る

出雲市 岸 桂子

愛嬌で済まなくなった物忘れ
残り火にまだまだいらぬ火消し壺
旬もまた外国産でなじめない
政治不信の予感に山が動き出す
カマキリの鎌いく度か空を切る

雲南市 毛利 幸

寝ころんで大空見上げ息を吐く
どんどんと事が進んで華燭の典
人の裏嗅いであちこち触れ回る
古里の山に向かつて愚痴を言う
嬉しくて笑顔浮き浮き座が笑う

島根県 伊藤 寿美

此処にきて多喜二彬をもて囃す
戦争は無益イラクもベトナムも
浮き雲よお前も空のホームレス
手話で売る鳩のパン屋へ回り道
かくれんぼとうとう帰って来ない亡夫

倉敷市 撰 喜子

どこにでも煙たたせる火付け役
でかい夢花火に重ね描いている
豊かな胸前にわくわく通勤車
向上心ゼロ気ままに生きている老後
ゴキブリを見れば人格変る妻

美作市 福原悦子

農政の淋しさ知らず実る稲
淡い恋秘密のバラはまだ蕾
我慢する美德とされた遠い日よ
言い負けて腹心まだ納まらぬ
シンデレラわたしひとりの台所

美作市 大石 あすなろ

この夏を手押し車で渡り切る
廃品にならないように気をつける
精いっぱい今日を生きぬく捻子を巻く
急ぎ立てるだけで終わった傍観者
臆病な足がたたらを踏んでいる

真庭市 福岡 智恵子

携帯の使用講座があるそうだ
高齢を熟年と気取る夫元氣
それぞれの生き様彫む顔の皺
騒がれてメダル取る人取れぬ人
西洋の剣日本が銀もらう

真庭市 国米 きくゑ

満天に煌めく星のファンタジー
迷いつつ入れた一票無駄になり
逃げ道をくれたやさしいギヤグ一つ
迷いからさめると人は強くなる
過疎の村絆深まるまつり寿し

竹原市 岩 本 笑 子

花いくさ蝶々も蜂も隔てなく
ゆつくりと石段亡父に逢いに行く
走り続けて還暦を目の前に
一つ減り二つ減り庭のトマト達
露止めてうすむらさきの露草よ

竹原市 時 広 一 路

地球自転逆回りなど考えぬ
味付けは私で不満言われない
何とかなるで今日一日済みました
晩酌よ決してノルマでは無いが
公平さしかと守ってジャンケンポン

竹原市 石 原 淑 子

真ん丸に心膨らむ秋日和
ニヤニヤと孫の写真を持ち歩く
同じ轍狼が反省してみせる
押し寄せる波のひくのを待つとする
少年の心の闇に立ち竦む

宇部市 平 田 実 男

御位牌は譲り合つて遺産分け
黒枠へ入れる写真は決めてある
ベットにはこんなに笑顔見せる妻
バツ一になって世間が見え始め
まず値札見ながら入る試着室

美祿市 安 平 次 弘 道

灰色の町に虚飾の灯がともり
散骨の話他人になつていた
三つ名を持つて大物にはなれぬ
段ボールの箱に芝居が詰めてある
手の内にいるのは神か悪魔かな

東かがわ市 原 賢

なにかも捨てると楽になる余生
目線下げ見れば許せることばかり
悪気などないのに悪い人にされ
お人好し安請け合いの貧乏くじ
最後まで言うてしまった孤独感

東かがわ市 清 川 玲 子

雨の午後昭和の歌に浸り切り
カラオケの調子はずれがうけて居る
古希にも夢少し濃い目に紅をぬる
公園の泉は鳥の休憩場
いまになり亡母に聞きたいことばかり

東かがわ市 伊 勢 八 重 子

玉碎の鳥語りつぐ生き字引
物価高それより恐い認知症
人生の敵は心の中に棲む
都会より余生預ける片田舎
この残暑下がる心の貯水率

東かがわ市 川崎 ひかり

子育て期ただがむしゃらに日を送る
無縁だがイチローだけは応援す

年毎に純な気持が風化する

強烈なパンチだった娘の話

そうだねと言えなかった口ゲンカ

松山市 宮尾 みのり

生涯現役身過ぎの垢も身にまとい
手におえぬものに男の嫉妬心

うぬぼれ鏡時どき元氣つけてくれ

独り相撲だったと氣付く祭りあと

癌告知医師は宗教論も副え

大洲市 中居 善信

一度くらいは逢いたい人へ氣を許す
達筆は芯の強さかやさしさか

こころ晒して全部さらして許しあう

アカイアカイアサヒガアカイから学ぶ

アカンベーしてる大きな舌だして

西予市 黒田 茂代

日ぐらしの声の余情へ昏れてゆく
汗かかぬ鉢着物に感謝され

ひまわりの迷路に潜むテロリスト

マスカットふふむと命透き通る

十時消灯わが家はいつも省エネで

高知市 小川 てるみ

いつだって明治の母は強かった

この母の氣力にいつも負けている

秋の空掴んで見たいシャボン玉

沈黙を守り通しているマゲマ

自信ない証拠にいつも神頼み

高知県 小澤 幸泉

自分史に終戦の章書けぬまま
今日もまた腕の痛みを友とする

あくびして祝いの品を売る娘

味方にはなれぬ息子と酒を飲み

病院へ行った帰りに飲んでくる

唐津市 坂本 蜂朗

居酒屋で下積みらしい長い舌
君と僕などと言われてすべる舌

酒くさい過去の栄光顔を出す

惜しみなく笑みを振り撒く恋心

ケイタイのヤング渴きを募らせる

唐津市 山口 高明

昭和史の闇に漂う負の遺産
古美術と寺の仏像さえ盗む

院長の奥方さまも痔に悩み

二つ目のコールで切れる電話ベル

観月の茶会へ妻の勇みよう

唐津市 丸 晴 翠

どんぶらこ桃の流れた川は消え

自販機の籠に溢れる家庭ごみ

愛されて月に華やぐ美人草

自給率百と菜園猪が通う

種蒔いて育てた野菜使い切る

唐津市 井 上 勝 規

夜が明けてやつと眠れた入院日（ガン手術）

病状と手順厳しさを告げられる

手術前動揺見せぬ見栄がある

妄想は更に眠れぬ恐さ生む

四人部屋互いに術後癒やし合う

唐津市 樋 口 輝 夫

蟬かつぎワツシヨイ蟻の夏祭り

君が代の二番歌ったことがない

達筆で綺麗な嘘が書いてある

頂いた方は忘れる袖の下

アマチュアに敗けた日本のプロ野球（キューバに敗、北京五輪）

熊本県 高 野 宵 草

不要品捨てたら倉庫空になる

欠点を美点に見せた赤い糸

用は何忘れ階段上り下り

青い空平和な散歩出来る贅

米までも輸入農薬 カビ付けて

熊本県 岩 切 康 子

油蟬ついに庭には現れず

雷鳴に遠い昔の姉弟蚊帳

19回一人で投げた若かった（ソフトボール）

糸蜻蛉目高に会いに来たのだから

ゴキブリに噴霧したのに警報鳴る

熊本市 永 田 俊 子

診察券いくつも持って忙がしい

次の次へ顔見せておく立候補

思いつく出を小さくたたんでいる扇子

割箸を割れば悲鳴をあげる森

同窓の親しさ命ぬくめ合い

シドニー 坂 上 の り 子

親の威光だけで日本もてあそぶ

青い水ワインのように高くなり

近未来金持ちだけが水を飲む

庭のある家はイヤだといぬる膝

家移るうわさ不安か食べぬ猫

（前月分） 米子市 門 脇 晶 子

年金額は誰にも言っていないらしい

梅雨明けて大地の音が弾み出す

太鼓には日本魂わいている

突然に大地震わす鬼神出る

桃が今含み笑いをしている

川柳塔の

川柳讃歌

(47)

木津川 計

旅愁とは赤字路線で見る夕陽

谷 口 義

旅愁の類語は旅情、と国語辞典にあります
が、それは違います。不貞と不倫が同義であ
ってまるで違うのは、「不貞はブス、不倫は
美人」と言った美輪明宏のように、旅情は恋
のときめき、旅愁は恋の傷心なのです。飛行
機や新幹線に乗るのはときめき故ですが、赤
字路線の各停列車には癒すための長時間があ
ります。南国の赤字路線ではなく、北へ向か
う最果て行の一向に乗客まばらの列車です。
義さんは可哀相にそんな旅をされたのです。

頑張っているのに会えば頑張れと

星 野 育 子

頑張っている人に頑張れと言うのは、死に
かかっている人に「早く死ね」と言うのと同
じです。死に近き人には「わたしがつうと
傍にいるからね」と安心させるように、頑張
っている人には「一息入れたら」と薦めるの

が人間らしさというものです。

まことに日本人のガンバリズムはすさまじ
く「改札を出るも先駆者たらんとす」(路郎)
の近代史以降を突っ走ってきたのです。育子
さん、あなたと僕はのんびりいきましよう。

襖絵の中でしばらく眠ります

高 島 啓 子

米朝さんの落語に「抜け雀」があります。
屏風絵に描かれた五羽の雀が朝になると抜け
出し、一日が終ると戻ってき、また元の位置
に納まります。そんな襖絵の不思議咄です。

啓子さんが目にする襖絵には多分街道筋の
宿場町が描かれているのです。その中の氣に
入った旅籠で眠るべく、啓子さんは襖絵の中
に姿を消したのです。この句を読んで、屏風
絵の中にやはり消えていった小泉八雲の「果
心居士」を僕は思い出したのです。

究極のお洒落は笑顔だと思ふ

村 上 玄 也

明治のおしゃれはハイカラでした。洋行帰
りのハイカラーなワイシャツから生まれまし
た。大正になってモダンがもてはやされます。
昭和初期のモガ・モボはモダンガール、モダ
ンボーイの短縮語です。昭和に入ると「おし
やれ」が全盛になります。ところが「カッコ
イイ」が侵蝕してきて「おしゃれ」の使用頻

度が減っていくのです。その移り変わりです
が、時代を超えて笑顔は最高の社交術でした。
ですから玄也さんはいつもニコニコです。

ていねいに西瓜の種を取るオトコ

古久保 和 子

食べたとして別に害にもなるまいに、腸の中
で西瓜の芽が出たら、と件のオトコは用心深
いのです。思いも寄らず雨が降るや、靴から
さっと出した折り畳傘を差すようなオトコは
嫌いと言ったのは、確か曾野綾子さんでした。
なににせよ慎重で、石橋を叩いて渡るほど
な恐がりと用心深さは同根です。

和子さん、そのとき少しも騒がぬ、泰然と
して自若、西瓜の種はむろん、蟹の甲羅も噛
み砕くほどな、そんな男を探しましょう。

大阪城凛として立つ彬の碑

近 藤 正

当初は彬の銘版を記念の植樹の前に置く、
という話から出発したらしいのです。除幕す
ると、凛として立つ彬の碑。亡くなった田中
正坊さんをはじめ、関係者ご一同の頭腦的プ
レイなご努力でした。

節を曲げず、苛酷な弾圧に抗して反戦反権
力を十七文字で告発し続けた鶴彬の批判精神
は語り継がれ、生かされねばなりません。

『上方芸能』誌発行人

自選集

土橋 螢

熱いあついと秋へ流れる白い雲
生き地獄から極楽の絵を描いている
天地人澄まして明日を考えろ
卵を食って人間らしくなり
人間魚雷に神風は吹かなんだ

中原 諷人

慌てても損だ主治医と握手する
うっすらと仄めく仏さんの駅
来し方の駅から奥に一樹あり
煮詰めても果実の嘶にぎやかく
多事多難ほのぼの暮らし生さんかな

西出 楓楽

五欲まだ元気で自分持て余す
思い出すのは忘れたことばかり
弱虫が束になった怖ろしい
もうあと是一直線の道だろう
傷疼く今日とはことん飲むつもり

仁部 四郎

九分九厘クイズファンは無駄が好き
スーパールの辻で無駄口アンテナに
包装紙無駄とばかりは言えぬから
及ばぬが無駄を省くとゴロ寝する
ざわざわと無駄なおしゃべり男もす

波多野 五楽庵

雨しとど朽木は雨月物語
計を畳みこころの失語症になる
詮索の行きつく先の彼岸花
のしかかる中傷卑語の網の中
腐葉土の中から育つ縄梯子

林 瑞枝

乾杯の声賑やかな海の潮騒
美人画展の肌から香る江戸絵巻
大志抱いて捨てた故郷の山を恋う
コスモスの強さにやさし野辺の風
風はピンク多感な耳を持っている

早川 清生

アニメ天国で政治もアニメめく
どっち向きに入れても諭吉すぐに逃げ
医者をつつビニール袋葱が見え
鬼気迫る電話病室から株屋
生き死にの話大阪弁になり

前 たもつ

百歳に元気を貰う敬老日

ウオーキングシューズ選つてゐる古希と喜寿

三十年生きたら夫婦二百越す

二十三回忌親父あの世で百五歳

後期高齢大きな声でもの言おう

宮口笛生

いつ逝けどいい歳なりき八十路坂

久し振りの東京三日共雨で

何もせず毎日座つてゐる病氣

神頼み続く病に負けてゐる

百円もしないサンマが山積み

三宅保州

人という文字が傾き出している

吹き流し器用貧乏すぎないか

この俺に免じてなどと言われても

自分から言おう男は顔じゃない

それにしても直ぐにはだけの柔道着

宮西弥生

料亭は飛石からのおもてなし

とんがりも愚痴も清める高瀬川

溝一つ跨いで秋が顔を出す

四季のある国を探して住み替える

いのち紅秋は女の挑戦状

森下愛輪

ほん少しゆとりの笑いに巾が出来

眉つばの話もあいづち聞いてやり

腹にない言葉で喋り持ち上げる

敗けぬ氣の負けぬ所が氣に食わず

挨拶をされて振り向き誰だっけ

八十田洞庵

太陽が二つ出たほど汗をかき

汚職とは回転椅子も泣いてゐる

政治斬る下のくらしを知らないか

議員秘書今日の葬儀三軒目

上役の冗談ちよつと氣にかかり

両川洋々

九条が眠るといくさ始まるぞ

人嫌いだから人の字など書かぬ

自爆テロ月は無口のまま欠ける

延命は要らぬ安楽死が夢だ

ボケぬのが老いの勲章かも知れぬ

阿萬萬的

單調な日日幸せに氣付かない

反省もしてます回り道の過去

につちもさつちも立ち枯れに似た日が続く

好奇心も手伝い野次の輪にはいる

馴れと言う狡さが変な道辿る

板尾 岳人

雪月花笑ろて笑わす旅かばん（大宮エリー様）

アルバムに母を背負つてもみじ狩り（神護寺）

テーブルに梨とりんごが鎮座する

さようならみんなと逢える千の風（哀悼 春城武庫坊様）

もつと早よ来いよと拗ねている笑顔（哀悼 栗夫人美与子様）

奥田 みつ子

騒音とがまん比べもオツなもの（マンション工事）

歳重ね楽しむゆとり巡り合い

木洩れ陽に戦を知らぬハンモック

五人にぎやか国を思っているのやら

秋の天こんな日本に誰がした

河井 庸佑

謎掛けて解ける人ではないと知る

降りたいが止まってくれぬ縄電車

挨拶をされたが名前出てこない

耳痛い話をそれとなく聞かす

曖昧な話に裏を覗かせる

川上 大輪

処方箋に薬一本と書いてある

満ち潮も引き潮もある鉤括弧

時どきはジャンプしているカタツムリ

昨日より少し大きくなった窓

古傷の中で拗ねてるのは誰だ

木村 あきら

断崖の雨は下から降ってくる

青年の肩に喰い込む長寿国

世渡りの地図にレールを敷いて置く

無駄のない処で打ってる老父の杭

逆転もあつて人生捨て切れず

小島 蘭幸

ポストマン素通り暑い午後になる

著名人の個性よ美術館は秋

なんとなく求人ガイド読んでいた

神が舞い降りる天使が舞い降りる

遠き人から初冠雪の便り来る

小西 雄々

四人兄弟みな戦争へ征った過去

一人だけ還らぬ兄へ鎮魂歌

背な流すように次兄の墓洗う

遺影まだ二十四歳大尉殿

還らない遺骨を待った父母は黄泉

斉藤 嘉

逆転の一打演じてきた代打

役目みな分担し合いいい家族

迷うたら陽の射す方に行くことだ

電害に耐えたりんごだから美味い

ふるさとの水に値段がついている

塩満敏

飛びたつた燕元氣にいるだろうか
鶴彬大阪城に落ち着いた

秋が来てメダカの学校お休みに

妻の庭来年に向け肥料やり

九日は九条守れと駅に立ち

新家完司

都落ち以来くしゃみもしていない

神棚の蜘蛛の巣は吉兆である

サザエ焼くサザエの悲鳴聞きながら

下着と思えば下着 ゴミと思えばゴミ

逮捕されるほどの悪事はしていない

恒松町紅

嬉しくて突然電話かけてくる

山陰の風雨この頃おとなしい

変なこと言ってしまった脂汗

ずけずけと酒が言わせた出雲弁

薪割って昔に戻る原油高

津守柳伸

雑草とイタチごっここのネギ坊主

孤独にも馴れて孤高に甘んじる

しまい風呂ほっこりさせる虫の声

コスモスに今年も逢える文珠さま

さんまずし太平洋は我が掌中

第28回 川柳塔鹿野みか月川柳大会

日時 11月30日(午前9時開場)

締切 11時30分

場所 国民宿舎「山紫苑」

電話 0857-84-2211

課題と選者(敬称略) 各題2句席題なし

「気分」	河内天笑(堺市)
「おも」	森中恵美子(摂津市)
「池」	岡信太郎(岡山県)
「紋」	嶋澤喜八郎(交野市)
「糸」	金雨学(出雲市)
「窓」	大小塚恵子(米子市)
	林由多香(鳥取市)

当日会費 2000円(昼食・発表誌・記念品呈)

欠席投句 1000円(発表誌呈・小為替希望・切手不可)

投句法 各題2句、B5大用紙、住所・氏名・雅号明記

応募締切 11月15日厳守

応募先 〒689-0405 鳥取市鹿野町鹿野1279

中原諷人 方

川柳塔鹿野みか月事務局宛

前夜祭 11月29日(土) 18時30分より

宿泊費 15000円(懇親会費込)予約11月10日迄

もったいないものがたまつたゴミ袋
夕立ちへ水無川に水の音
山城に果てぬ男の血が眠る
来年は逢えぬかつばめさようなら
友が逝く老いた笑顔が戻らない
相談にのってくれそないわし雲
寝て起きてまさかを疑がわぬ夫婦
そのころの名残りアルバム問うてくる
襖絵の説明目は咲き乱れてるお庭
彼岸花夏の名残りの朱に燃える

都倉求芽

遠山可住



小島蘭幸選

横浜市 川島良子

瘦せろ瘦せろ検査結果の答です
毒舌が飛んで安心しています

スーパールの米スーパールの味がする

時効とはいかぬ男女の難しさ

初対面写真と同じ人ですか

頑固さは明治の父に負けてない

青森県 松山芳生

はたる一匹^いちつちやな亡骸だとしても

ダイヤより^い螢石の軟度が好きである

命日に亡妻のほたるが舞う遺影

まぼろしの延長戦におく未来

静けさを破るグラスの赤いこと

地吹雪のまん中に棲む津軽衆

和歌山県 根田よしこ

機嫌良く起きた自分を誉めてやる

予告してくる雷は恐くない

親孝行むずかしいくないわたし流

耐震のマイホームとてわからない
老母の髪洗ってあげるいい気持ち
オリンピック終って何かホッとする

横浜市 長島亜希子

何の歌なのと聞かれた童歌

ネズミだと孫が言わない私の絵

女だつてここぞの時は立ち上がる

甘いもの食べても脳は働かぬ

センチと懇意にしている訳がある

減量が必要な訳分かつてる

福岡県 林

さだき

汚れ役私もこなしてみたいもの

古稀過ぎた父に負われる不随の身

ダイケアの食事が旨い友もいる

古書店もIT化して活気づき

ふたりとも正直すぎて喧嘩する

四人席男ひとり小さく掛け

紀の川市 辻内 次根

仕合わせになる公式がきつとある

忍耐を試しにピンチやつてくる

解らない言葉辞典が忙しい

まだ恩を返していい秋の空

酸欠にならないように欠伸する

気がついた時には影が伸びている

唐津市 吉 富 節 子

のんびりの老後が消えた息子の離婚

顔頭性格も良い友が居る

働きが趣味の夫でああしんど

定退日ご苦労さまと磨く靴

挨拶はしたが記憶の蓋あかぬ

米子市 吉 田 陽 子

ステテコをホームウエアと言う夫

噛み合わせ話に食事早終い

大掃除しながら過去にのめり込む

退き際を決める職場の空気読む

連続でびっくり芸を出す総理

美作市 小 林 妻 子

猪は徹夜で荒してる田圃

台風が来なけりや米もあるだろう

栗も柿もびくびくしてる台風禍

曾孫が四人年金足りません

稲刈りの済んだ田圃と秋祭り

吹田市 二 宮 栄 子

秋なすに義母の笑顔を重ね見る

百均が見事家中整理する

笑う種持ち寄る里のクラス会

厄年の息子へ神のはしごする

独り居の鍋がわびしい事を言う

宝塚市 丸 山 孔 一

心静か比叡と語る圓通寺

野花咲く父母の道我の道

何も無い何にも無くて悩み無し

今の俺何物なりや壁に問う

酒飲んで治まる傷はまだ浅い

奈良市 辻内 げんえい

アメリカの凋落わかる五輪でも

オリンピック偽装民主化見えかくれ

朝顔で日陰をつくるエコロジ

帰省時の渋滞減らす原油高

夢の中まだ見ぬ孫とボール蹴る

紀の川市 吉 村 幸

先ず空と向き合う農に生きる自負

追憶の底に稲子の跳ねる音

待ち侘びた夕立土の匂いする

まだ苦にはならぬ段差の家に住む

ありがとう今日も貴方を書く日記

紀の川市 宇野 幹子

日立市 加藤 権悟

切り捨てた古巢へ疼きだす尻尾

花道を抜けると転げ出す孤独

終電に乗れずに風はひょうひょうと

許さねば波のうねりが高くなる

言い勝った果ての無口な影法師

唐津市 岩崎 實

おいしいね秋刀魚片方尾でいいよ

受けつける妻ニコニコとビール酒

若い時みんな苦勞をしたんだよ

反動をつけねば立たぬ足となり

生かされて親鸞連載はじまりぬ

高知市 松尾 憲子

ゼロ点も見方代えれば無限大

偏差値を嫌って歩くひとり旅

興奮をそのまま君にハイタッチ

まんざらでもない中年を浮遊中

彼というナイスバディは誰だろう

岐阜市 平野 あずま

伴奏の妻と息合う数え唄

粒選りの選手個性がせめぎ合う

生き字引だんだん語彙が欠けてきた

本心は見せぬ多彩な万華鏡

難関はオブティミズムで乗り超える

ふるさとの視野に優しいそばの花

宅配が母の笑顔でおすチャイム

鎌を振る大地に叙勲など無縁

宅配の新米故郷の風がおす

田の神に減反をわび鎌に詫び

ゲームだけ若いと言ってくれる友

お若いと言われ微笑みしわ一本

心配で針を止めたい受験生

仕送りとなにより母の津軽弁

選挙前みんな知ってる次期首相

政治から一括消去七光

血統の良さが出るのは馬のこと

首相辞任つまらぬ話題横を向く

唐津市 北村 松風

百日紅裸で四季に耐えて咲く

退院を咲いて迎える百日紅

将棋プロ無理で兄貴は東大に

メダルある顔だけを追うカメラマン

宇部市 高山 清子

イエスノーはつきりさせて自己嫌悪

気楽さと淋しさ縋えて老い独り

老醜の鏡にすっと眉を描き

土壇場で腹の大きき見せる彼

池田市 上山堅坊

石ころを遠回りする蟻の列

満載のママチャリが行く狭い道

テレビライト浴びずに終わる良い市民

汗かかぬ人が横から口を出す

大洲市 花岡順子

リセットをする希望が湧いてくる

アピールの下手な男がもどかしい

体験で学んだ強さには勝てぬ

すいすいと過去消していく削除キー

今治市 渡邊伊津志

ゆっくりにすると思わぬものが見え

健康が体の声を聞き分ける

ジョークだと聞いたがじわり効いてくる

ギクシャクを溶かしてくれた有難う

阿波市 三浦千津子

紅の糸褪せて欠伸をうつし合う

労りの言葉かけられ追い越され

生半可な知識でバズル解いている

赤ちゃんの目の先にある好奇心

出雲市 川島和歌子

褒められてやる気満まん顔に出る

紆余曲折歩いて生きた足の裏

叶うなら世界旅行をして見たい

一人住む侘しさつのる虫の声

松江市 松浦登志子

あなたとはちがうですよ氏素性

飽きるまでサンマ食べたい秋日和

梨ぶどうおいしく数値気にかかる

全国に小京都の名山とあり

松江市 相見柳歩

無造作に思い出ばかり敷き詰める

十年も使った眼鏡離せない

挑戦だ風は沖から吹いてくる

一粒の種ゆっくりと伸びをする

松江市 山根邦代

地球儀で見ればきれいな国なのに

ゆつたりと時が流れて日が沈む

秋の風言葉のボール投げて来る

農道が賑やかになる農繁期

境港市 遠藤那珂子

わたくしの泳ぎでたどり着いた夢

突風の吹く場所だけが残ってる

さわやかな季節に私誕生日

二番目が私とっても好きな席

米子市 小塩智恵

孫掃省名刺一枚置いて行く

ボランテニア話相手の三十分

息子からポーナスもらう八十歳

弟に元気の証梨送る

米子市 猪 森 スミエ

何時もの場所で待っているとの走り書き

窓拭いてパノラマを見る峠道

サングラス外して僕ですおばあちゃん

もみじマークが並ぶ温泉宿の庭

米子市 田 村 周 子

わだかまり時間がいつか解きほぐす

一粒の麦もやがては糧となる

だから坂ほのかな夢を一步ずつ

喧嘩して許す心が嬉しくて

倉吉市 酒 井 美美子

旗色が悪くなったかだまりこも

回転ずし皿の色見てやりすごす

絵本読む孫のまなざし澄んでいる

古時計命をきざむ音のする

鳥取市 近 藤 秋 星

式典に我が大役を拝命す(謝辞)

ロンドン五輪までは持つまい我が寿命

介護士に命預けて生きてます

在宅死いいね私もそうしたい

鳥取県 加賀田 志 延

荒れている森に小鳥は住みにくい

川下に修業を積んだ石がある

背に汗かいて地球を撫でている

吸い出しをかけたい膿がひとつある

鳥取県 橋 谷 静 江

日やけした運動会へ歯が光る

蹠くと亡母の口癖思いだす

隣とはいっても笑顔を交す仲

食欲の秋になったら旅に出る

鳥取市 坂 本 智 子

何もかも許して母を介護する

魂を流す灯籠海へ向け

滝音に神の声聞き清められ

母の髪さらさらと梳く我が手ぐし

鳥取市 山 口 千代子

擦り切れた辞書いたわりつ字を探す

走馬燈眠れぬままに夜明け前

外出も少なくなつて普段着に

遠くの娘此の月を見て話せたら

鳥取市 谷 岡 清 子

ジグザグに歩いてやつと傘寿坂

つまづいた石が教えたがまん坂

ぬけるよな青空心無に戻す

草だけではどうどうとしてよくのびる

鳥取県 岡 村 孝 明

主婦参加望み日帰りプラン組む

断酒して祈るは妻の床離れ

香典を開き故人の繋ぎ知る

無農薬稲田にトンボ二つ三つ

鳥取県 斉尾 くにこ

喜びと悲しみ回るルーレット
清貧な判事わたしの内に居る
媚びぬよう見下さぬよう友を褒め
名月にふとケイタイと戯れる

鳥取県 岡 本 幸 枝

单身赴任の子に恋文を書いている
溺れかけ立ち泳ぎしてしのいだ日
さざ波のあたりが丁度よい泳ぎ
あせるなよ大器晩成だと睨む

竹原市 六 田 半 徳

光る汗丹精込めた穂は重い
マヒの手で紙飛行機が出来上がる
同病の友と交わした長電話
列島を偽装だらけの風が吹く

広島県 土 井 輝 恵

夫には笑われそうな悩み事
プランターの私語を聞いている秋の風
風受けて鬼の心と対峙する
古希過ぎてやつと亡母の胸解り

竹原市 国 實 力

遊ぶ日は決って空を見てた父
職ひいてやつと仏に眼を向ける
ピッカピカの宿に運動靴で着く
キヤッチャーの構えでこちら見る蛙

府中市 馬 場 利 子

つやつやの稲穂が揺れる午後の秋
絵本の風と弾み出す毯一つ
約束の答をくれぬ千の風
軍手持つ田畑のいくさリズミカル

府中市 藤 岡 ヒデコ

こんにちの嘆きを予言してた亡父
みたことか亡父が居たなら言うだろう
CO₂理論だけでは減るまいに
なりゆきで日々の暮らしは変わらない

神戸市 早 川 孝 子

落書きを心にしては消している
やり終えた爽やかな風駆けて行く
温暖化まさかの試練連れてきた
通園の手の温もりを忘れない

神戸市 木 村 忠 義

九月でも帽子無しでは歩けない
田んぼ道歩くと童心に返る
一面の田んぼ心を浄化する
木陰から女子高生のファイト観る

神戸市 山 崎 武 彦

試着室妻はモデルの貌になる
冬帽子被れば亡父の貌となる
秋深し子に懇々と諭される
いわし雲子の凡庸を望みおり

西宮市 石野 照代

雨雲を四国の空に送りたい
玄関の落ち葉は秋の宅急便
温暖化ゲリラ豪雨を誘い出す
フリーターくだおれ太郎がうらやまし

三木市 山口 久子

ヤワラちゃんママでも銅で頑張った
防災日非常持出し整理する
ドッコイショ立ち居振舞いドッコイショ
八十路でも自転車こぎが百出来た

三木市 広瀬 房江

村中が総出で遊ぶ地藏盆
観葉と造花で飾っとく洋間
背を向けて勇将星野消えてゆく
お裾分けの楽しみもあるぶどう狩り

加東市 黒崎 美紗子

友情のもらった苗が活気満ち
初生りのブルーン友と味わった
種まきの雨待つ気持みな同じ
娘夫婦フランスの旅うれし旅

加東市 安達 厚

もう止めようもう止めようと菊づくり
法要も出会える従兄弟いなくなり
適期播きした野菜にはかなわない
あせること何もないのにけつまずき

尼崎市 河津 正治

古稀過ぎて火照る心に夢捨てず
一隅を照らす初心を置き忘れ
善戦と癒し言葉で犒らわれ
以下同文と受けた賞あり今は古稀

尼崎市 小池 幸子

ほどほどとまあまあが良い日日平和
出支度に猫が不安な顔をする
心地よい昼寝の癖が直らない
強過ぎたあのタイガースどうしたの

尼崎市 桑原 東園

きつちりとネクタイ締めて汗だくに
登り坂もう一息だ滝の音
師の遺作繰返し詠む身に沁みる
きつちりと正座して孫ご挨拶

大阪市 尾崎 黄紅

留守番に銚子一本許される
孫と食べてる西瓜の種を数えてる
議会にはたぬききつねが座ってる
家を購う三十年を貯めました

大阪市 江島谷 勝弘

会社ではシーラカンスの位置にいた
ドタキャンで隣の席は誰も来ず
冷凍の枝豆湯がき一人飲む
年金で暮せる夢がしばらく

大阪市 澤田 定子

控え目なピアスきびきび熱計る
ほろ酔で人との距離を近くする
雑念を飛ばしてくれた揚花火
戎さん大きなピアス似合いそう

大阪市 萩原 大朔

隣まで一里の宿の星月夜
余生とは眼鏡ケイタイ探す日々
ベテランと煽て修羅場を送り込む
男運悪くて寿司と酒が好き

大阪府 高木 道子

修羅の世を生きた卒寿に敬老日
かなかなや無人教会チャイムなる
絵手紙のさんまが跳ねて美味思う
団栗で憩うほど良いロスタイム

大阪市 田浦 實

七夕に古希のお札を書きました
とほけても僕のしっぱは直ぐに出る
信楽の狸和ますとほけ顔
来る度に孫の言葉が増えている

大阪市 尾崎 ゆめ

見ないふりする労りを忘れない
歯ブラシが二人の絆深くする
傘揚げないとどうにも収まらぬ
咳一つで楽になるかもしれぬのに

大阪市 吉田 富美

秋草にひざついて読む道しるべ
純白の芙蓉はひと日会うがため
つき合いもほどほどにして線を引く
走れたら今出たバスに乗れたのに

大阪府 若月 裕作

政界は上手な嘘で泳がせる
繁昌亭笑いのネタを持ち帰る
夏休み子等の笑いに憩う日日
喜寿傘寿やがて米寿も視野におく

大阪市 安藤 なつこ

いつだってひとりぼっちの影ほうし
お日さまもお月さまかてひとりやで
さみしいと言えばさみしさ減りますか
若者よ本当の孤独を知ってるか

堺市 羽田野 洋介

相手次第寸志にだつてある格差
世間体サングラスでは保てない
血税の意味忘れたかお役人
汗をかき人間らしさ蘇る

堺市 大隅 克博

貨物列車数えていたら擦れ違ふ
命綱外し己の器知る
食物の連鎖と言えば気が楽に
引き際は首相武士より潔い

堺市 大久保 ノン子

豊中市 谷川 勇治
ところでん押されるままの父になる

音たてて返らぬ時が過ぎてゆく
悔いのない一日だった熱いお茶
ダイエット泳いでみたが肥えてきた
遺言を書いて幾年生きたやら

堺市 近藤 治子

家宝など無い家ですが食豊か
ひみつよと言われた話しゃべりたい
許すこと出来るあなたの広い胸
炎天下プール遊びの笑顔たち

藤井寺市 吉田 喜代子

夕立に今宵は温い献立に
譲られた席嬉しいが落ち着かぬ
其処此処の私語が気になる通夜の席
二代目は多難になればもうやめた

藤井寺市 伊藤 アヤ子

汗引いて少し御洒落を試みたい
日焼した子等が揃って二学期へ
ウオーキング足も軽がる秋の風
食卓に酢橘を添えてサンマ焼く

藤井寺市 俣野 登志子

五輪中ずい分家事を溜めたもの
築二十もう気にならぬ床のキズ
孫が来てあーしんといな嬉しいな
鶴千年永久に羽ばたけ彬の句

ケアハウス計画通り老いてます
故郷の柿が食いたい夕日拝む
長い竿シャツ一枚を干して秋

豊中市 源田 啓生

閃光が煌めき街がドラマめく
稲妻が夜空切り裂き猫走る
生かされて今年の梨を丸かじり
渋滞の天安門に戻る秋

豊中市 荒巻 夢

クーラーを使い暑さを作り出す
自販機もぶんぶん唸る炎天下
風鈴の金魚ゆらりと泳ぎ出す
米櫃に米いっぱいのがたさ

八尾市 西川 義明

都市砂漠誰でもよいと刺すサソリ
腹立つよまるで偽装のコンクール
七年目の九・一一が遠くなる
山里へ静かに降りて来る紅葉

八尾市 中島 春江

老いてなお詫びたく母の形見手に
赤とんぼ止まりてなごむ野の仏
カマキリの鎌ふり上げて後退り
姿よき富士の山肌荒あらし

八尾市 松葉君 江

高槻市 笠原 乃りこ

血液を洗ってくれる梅ラッキョ
一錠の薬に命預けてる

炊事洗濯孤独は人を強くする
趣味ふやし乾く頭をしめらせる

八尾市 田邊 浩三

殺人をネットで予告する時代

世話をした牛と別れのビール酌む

古都奈良もセント マントと賑わしい

給食費溜めてベントに乗る親も

八尾市 笹倉 ひろし

偏差値に今度は教師攻められる

権力を握ると語気が荒くなる

若い衆が減ってダンジリ進まない

温もりを求め法話に老夫婦

高槻市 安田 忠子

イヤリング揺れて楽しいバイキング

イケメンのピアス輝く武道館

ペディキュアをすれば足取り軽くなる

バイキング石見神楽と遠花火

高槻市 片山 かずお

お隣もいつも主がお留守番

氏素姓言わぬが気品漂わす

笑っても泣いても飯の世のこと

老斑もシワもある顔愛おしむ

ロボットにならお尻も見せて生き延びる
生ゴミへ三段跳でカラス出る

安い方買ってストレス付いてくる
混浴にタオルをはずすタイミン

河内長野市 木太久 正一

洋上給油苦しめている首相の座

汚染米農水省のやらせかな

囲碁川柳長くつづけた甲斐があり

二十年つづけた吟を披露する

河内長野市 針生 和代

群れに居て群れに馴染んだ生き上手

父さんの首に鵜飼の紐のあと

休耕田に嗤われている自給率

ニュータウン行き交っている福祉バス

吹田市 中村 十八娘

すんなりと居場所見付けるかすみ草

忙しない扇子に話切り出せず

真つ直ぐな道が続いて草臥れる

週一度ハワイの風にフラダンス

羽曳野市 森下 一知

脇役にしたり落ちる汗を見る

裏庭に命を繋ぐ種を蒔く

旧友が自治会長ではずむ寄付

暇を見て行くよとひまを持て余し

花よりも月よりも喉鳴っており
豊作に配給米の頃のこと
お天道さまに頂く田に実り
後継げと言えず瑞穂の国嘆く

泉佐野市 稲葉 洋

雨上がり彼と私を渡す虹
あはやなあ母に言われてホッとする
初任給孫くれた杖抱きしめる
悲しい国投げ出す総理二度続く

泉大津市 助川 和美

手が触れただけで高鳴りした昔
古株が邪魔して新芽伸びられぬ
無事着いただけの電話に母の笑み

茨木市 島田 誠一

一番手でないからいつも頑張れる
てっぺんもどんだ底もいるワインバー
逆らわず暢気にやってゆくつもり
のはほんと浪花育ちは氣立て良し

富田林市 古田 千華

絵てがみを送る相手が病んでいる
腹八分食べて女を意識する
階段を滑り降りてる朝の靴
説得へ母は青筋立てている

紀の川市 北山 絹子

回答を聞くのはちよつと先送り
窓ガラスやる気の出ない時磨く
日暮れがたおしろい花に湧く元氣
正面に平和見据えるちひろの絵

海南市 小谷 小雪

自己暗示かけて後期も軽やかに
吹きだまり闇へ転がる人もいる
秋深むサンマ諸君と酒を酌む
曼珠沙華狂いきれずに赤のまま

田辺市 大峠 可動

ケータイの進歩に耐えているポスト
耐えながらまつ赤な花で咲き通す
髪染めてわくわく医者にゆく私
背負われて戦火を潜り今がある

和歌山市 土屋 起世子

団欒の主軸に父がいる安堵
ありがとう透けゆく老母の背を流す
荒波を越えて見事な絵に出合う
わくわくとこの世の花を見て歩く

和歌山市 福井 菜摘

低姿勢崩さず守る事がある
力試しされていたのか任される
憧れの人憧れのまま老いてゆく
音声多重味方の数が分からない

和歌山市 田中 すすず

和歌山市 坂部 かずみ

予知出きぬ防災リュック重すぎる

猛暑日も一夜の雨で許される

年齢も都合次第で四捨五入

平凡な二人暮しにあるドラマ

和歌山県 森下 よりこ

憎みきれない明るい嘘のつける人

あれがチャンスだったのかなとふり返る

雨は小降りに草を刈るにはいい日和

破れても小さな夢はまた生まれ

奈良市 尾畑 なを江

お隣りの芝生はすでに枯れていた

美しい嘘などまるでないのです

その時は美味しく食べてみな忘れ

忠告がじわり効き出すカスリ傷

京都市 清水 英旺

勝つ心負ける心が同居する

新築の家の明かりがあたたかい

給油所の跡荒涼と草が生す

銅メダルすらない道も悔いはなし

雲南市 菅田 かつ子

黄金の田んぼ雀のはしゃぎすぎ

貧しさの盛ってる愛の限り無く

お洒落した貴女うつかり見間違ひ

時間だけ聞いて本番来てくれず

雲南市 武島 ちよえ

おめでとう素直に受ける敬老日

秋の風やつと地球は平熱に

戸締りをすれば孤独の夜が迫る

すずめ蜂無断で軒に城築く

香南市 桑名 孝雄

水がめは空っぽ神はお忘れか

男一匹歳に甘えるのはよそう

泣き言は言わぬ高齢者でいたい

身辺整理最後になったのはお墓

篠山市 谷田 多美子

庭の花褒めて付き合い半世紀

遠雷に喝入れられて亡夫の忌

涼風にチャリンコ生氣とり戻す

寺詣り若い法主の宇宙談

橋本市 石田 隆彦

ゲリラ雨はヒト科への警メッセー

雷を鳴らして予告しています

大気汚染口約束でもう済まぬ

奥へ奥へと移動しているわがお臍

横浜市 巖田 かず枝

姉さんの前で夫は少年に

入院を前に夫を指導する

事故米で焼酎作りせんべ焼く

嫁さんをほめて息子を喜ばす

栃本市 岡野 すみれ

散る美学校の花にかなうまい
そのけそこのけ平成ギヤルのお通りだ
どうしても黒と認めぬ人とあい
海底に住んでいたよな嘘をつき

昭島市 野口 忠

夫にはプラス一品恙無い
茶殻さえ生き返らせるおばんざい
相棒を立ててお釣りがたんとくる
北の国焦らし戦術だけは長け

三田市 谷 祐 康

やめてんか化粧しながら笑うのは
しあわせになれと笑いをくれた神
もしテレビなければ夫婦会話なし
よいとまけ飯場の母は強かった

三田市 福田 好文

故郷に小さな恋を置いたまま
マニキュアを知らないままの母の爪
巡礼を終えて元気に医者通い
お早ようの返事で分る今日の風

三田市 阪本 藤 朗

カード類出入禁止のサイフです
食べものに溺れてしまう地下売場
計算はまだ大丈夫九九出来る
暗証の四桁のためにボケられず

東京都 高岡 弥生

休肝日でなく私は休甘日
大丈夫これは手作りギョウザです
客人が来ればきれいになる我が家
冷蔵庫壊れて走るコンビにへ

東京都 井上 つよし

万歩計と受話器で防ぐ認知症
何よりも猛暑を癒す金メダル
大鯰寝返りを打つ熱帯夜
何食わぬ顔で事故米潜り込み

藤沢市 加藤 スズコ

支えられ歩くよるこび風香る
髪カット変身します誕生日
誕生日かけて貰ったネックレス
うれしさになみだ涙を叱られる

佐渡市 高野 不二

年金が貰える俺は幸せか
名刺では課長ばかりの営業課
なつて見たい気もする裁判員制度
米なしで生きる人間ふえて来た

札幌市 三浦 強 一

デパートが避暑地炎天下を急ぐ
外の子をケータイが呼ぶごはんだよ
団塊の世代にとつと後期の日
居酒屋にはくの修正液がある

札幌市 小沢 淳

冷害も聞かなくなった季の移り
水いらず一つの屋根で育った子
引き際に男の度量試される
手打ちする心のトゲの抜けぬ間に

池田市 多田 契子

存在感輪ゴムの力学ばねば
つぶやきを集め枯木が燃えだした
許されて心に滋雨を溜めている

山鹿市 阿部 ミツ子

ひっそりと雨にぬれてる祭りの灯
オリンピック見事の芸に神さえ見ゆ
人生は前半は愛後は味

府中市 岩本 雅代

青天の秋に希望が湧いてくる
トンボ釣る子供も居ない塾通い
祭り事一人三役過疎の町

香南市 近森 功

爺ちゃんノルマにされた庭の草
定年のない人生に虹をかけ
指切りの相手になるは孫一人

加西市 金川 宣子

高い金払った旅もすぐ忘れ
イヤホンつけて夫婦の距離保つ
新聞に生きるヒントを見つけ出す

安来市 原 煩惱児

遺句一句酔生夢死と言われよと
エアコンで老父独りの家の中
帰省した孫のお世辞が心地よい

米子市 見山 温子

物価高老いも予算を低く組む
年金も二人居るから暮せてる
食卓に薬も置いた老い二人

境港市 中井 虎尾

議事堂に世間見る窓ないらしい
夏の道もみじと若葉すれちがう
エアポート命あずけた機は離れ

倉吉市 前田 喜美子

早起きのお隣はめるお姑さん
頼もしい会長さんの低い腰
過去帳に載った先祖の年を見る

倉吉市 藤井 美津恵

里山ははやスキの穂出そろいて
かかしの目穩やか過ぎて睨みなし
散歩する野菊の花の咲く小道

鳥取市 津村 律子

木魚打つ孫に合わせて般若経
2センチのゆとりがビール旨くする
参考にならぬ自伝を書いている

鳥取県 飯野 菖子

オリンピックガッツに燃えた暑い夏
かわいいな言われた服をよく着ます
難儀から立ち上がる世を生きてきた

鳥取市 大前 安子

朝顔はためらいなしに垣根越え
すっぱりと包みたい子等外が好き
浴衣着て少女は脱皮下駄の音

鳥取県 岩崎 和子

雷神が夏を押し出すエネルギー
ありがとう食後の薬忘れない
長いこと臓器守って生きている

鳥取県 田口 清帆

蝶は無心にして花を舞い尋ね
走っても貧乏神は付いて来る
あげる物ないが笑顔と愛がある

鳥取県 大塚 美代子

お目当てのナース見たさに医者通い
ラストまで頑張れ青いかたつむり
ぎつしりと詰めて地産の香を送る

雲南市 福岡 博利

寺の坂つばめに会える散歩みち
星たちのささやく声が降りそうだ
ホタル飛ぶ思い出だけの川となり

明石市 糀谷 和郎

いい事があつて歩幅が広くなる
ゆとりある教育弛み出す嫉
気がつけば孫にアルバム占拠され

神戸市 武田 恵美子

母の年生きられるかと孫ながむ
こわがりが明日どうなつてもいいと言う
カタログで服とりよせて老人会

兵庫県 永井 かほる

長寿国認知寝たきり数のうち
振り向かず二階の電気消し忘れ
作りすぎ今日も反省させられる

加東市 岩本 美緒子

新しい画帖秋を出迎える
線香の点り嬉しい孫育ち
未来きびしが姪の懐妊万歳よ

三田市 辻 開子

週末は雑魚寝の孫が部屋灯す
ストレスをうまく発散友を真似
娘に持たす寿司巻くそばで亡母の声

尼崎市 藤岡 りこ

愚痴るほどストレスはなく高いびき
新聞に目もあてられぬ鬼ばかり
薬にも好き嫌いある夫です

大阪市 太田 としお
骨密度落ちたら背中まるくなり

男なら自分の傷はなめてでも

おばちゃんに道を聞いたらしいといで

大阪市 吉川 弘泰

メル友を持てば便利な歩幅有り

肩書きを肴に友と酒を酌み

地車で踊る夫に惚れ直し

大阪市 吉内 タカ子

物価高家庭菜園騒がしい

追い風に試してやろう帆をあけて

ストレスも山に吐きます健康美

大阪府 坂口 公子

背骨にしゃんとせいとはショーウインドー

微に細に知ってる心算家の音

人間をゴリラが付ける通信簿

大阪市 平井 露芳

美味しいとうまいしかないほめ言葉

三度目の正直あかで麻生さん

近海も出られぬ油高過ぎて

大阪府 神野 千恵子

放射能漏れが気になる雑魚の群れ

この暑さ宇治金時がよみがえる

揺れている震源地また永田町

旬のものの宅急便で来てくれる

老夫婦大きな声で内緒ごと

今が旬ストレスなんぞ寄せつけず

大阪市 畑中 節子

お転婆で遊びの上手い我が暮し

こきこきと折れ曲り飛ぶ秋茜

愚痴一つこぼさぬ姉の皺を読む

大阪府 小栢 こずえ

秋夜長虫のコーラス聞いて寝る

一鍬ずつ根気頼りに畑掘る

黄金の打つ波は農婦の金メダル

大阪市 橋村 容子

軽やかなゴミ回収のメロディーだ

無花果も堂々スーパーへ並びはる

広辞苑買ったそのまま安堵する

大阪府 西川 冷子

狙われる地域の怖さギリラ雨

繁華街歩き疲れて飲むソーダ

ウィークデー地下商店もひろびろと

豊中市 松尾 美智代

朱印だけが光る私の色紙です

お盆すぎお墓参りをする我家

風になつてそこらを散歩してる母

豊中市 藤沢 長一

OB会白髪頭が肩を組む

句作りの木陰で旨い缶コーヒ

通勤の朝の目覚まし茶店族

豊中市 神野 宇乃子

猫ちゃんとクーラーきかし昼寝する

敬老の集いは残暑まだ強し

涼風に視線グルメの本にゆく

藤井寺市 津田 シルク

すべすべの実に憧れているゴーヤ

おしゃれして回転寿司を食べに行く

世をすねても所詮一人で取る相撲

藤井寺市 増井 ヨシ枝

気がつけば生命線が伸びている

豪邸に人影もなく虫集く

柿たわわ里は無人の家となり

吹田市 早泉 早人

冗談にすこし本音を埋めている

減らすもの無い小遣いの崖つぶち

内密の話でいつも盛りあげる

吹田市 藏田 光子

車です少しは遠慮欲しいもの

またとない誘いに乗ったバスポート

自分だけいい子になったむずがゆさ

羽曳野市 宇都宮 ちづる

兄弟を亡母が会わす墓参り

貧血と言われて鉄の鍋を買う

困ったら逃げ出す総理皆二世

羽曳野市 松本 静子

羽曳野に背赤毒蜘蛛いるときく

風鈴が涼しさをくれたこの夏も

秋冥菊片隅に咲きありがとう

河内長野市 内海 綾乃

食膳に魚が消える心配ね

すまないね長生きするの母は言う

孫の声聞きたいために電話する

河内長野市 宮守 正博

胸さわぎ今度は本気かもしれぬ

食べるときサイズの話やめとこう

捨て石の行方が今も気にかかる

河内長野市 黒岩 靖博

若作り優先座席気が引ける

会席も食が細って箸を置く

ドライブはオープンカーで千の風

枚方市 小川 良吉

年金にボーナスついた夢を見た

汚染米まで食べさすか食不信

男にもピマスのお洒落やって来た

枚方市 坂本 ミヨノ

樂觀的妻の歌声快晴だ

歌う踊る若者ロック盆踊り

雑念も無く月光に酔うている

枚方市 二宮 紫鳳

メダリスト放つオーラに元氣出る

国境を越えて名技に拍手来る

ストレスを笑い飛ばして生き上手

八尾市 赤木 妙子

B 29 芯の固さじゃないですよ

同胞を返せとや海鳴り止まず

早起きでちよつぱりエコの電気代

八尾市 前田 紀雄

志小さく大局見失う

引き際も歯切れの悪い福田さん

アメリカの目線で終始自覚なし

泉佐野市 備後 三代子

待てど来ぬ呼べど応えぬ夫の影

車椅子のくらし振り向く暇のない

見舞客メデイカルチェック名医並み

寝屋川市 小嶋 みさと

温度差が二人の居場所隔たせる

来し方をしみじみ想う共白髪

或る朝に突然消えた蟬の声

門真市 矢阪 英雄

長老の見上げる空に雲の椅子

神楽舞う童等里の風守れ

新米の知らせ故郷はまだ元氣

岸和田市 中岡 香代

援助して文句言われる反抗期

落書きの相合傘に私の名

若い娘のクールにどこか相違感

箕面市 寺井 柳童

お身ぬぐい輝き戻る盧舎那仏

秋いっぱい腸に詰め秋刀魚来る

内陸地震津波情報まで知らせ

堺市 荻野 像山

あくびでもせんなしようない待ち惚け

さっぱりとがらくた捨ててみる勇氣

温暖化こたえますねと墓に水

岩出市 村中 悦男

声出して二人で笑うけいこする

氣遣いが過ぎて疲れを見せる妻

赤ちゃんもあやす八十路の手も温い

和歌山市 福井 桂香

寝返りが上手になって今日は処暑

食品不信続いて食欲の秋に

萩芒団子供えて月を待つ

和歌山市 堀 富美子

シナリオにない道草も味がある
独り居の城の居心地守り抜く
子の金が手付かずにいるお仏壇

奈良市 岩 本 浩 二

原点に戻るばかりで進めない
お献立通りに行かぬプロポーズ
回る寿司流し素麺ルーツかも

奈良市 乾 春 雄

蝶よ花よの育ちがいばら道辿る
男の胸に女の知らぬ地図がある
風の噂に胸のトレモロ鳴りやまず

奈良市 阿 部 茶 々

焼け跡に庭石だけが残ってた
銅のリレー何回みても見飽きない
あほらしい痛くも痒くもない噂

奈良市 矢 野 良 一

女子ソフト強い気持が金を獲る
露地石が雨に打たれて侘を増す
心底まで裸にさせる露天風呂

奈良市 田 中 賢 治

相撲道国技忘れて鬘が泣く
中堅もベテランになる不況坂
ベテランは初心忘れず苗育て

生駒市 小 西 稔

ベテランの仕事横どりIT化
ベテランもネット商法追いつけず
若者がはじめに読むはまんが本

京都市 藤 井 文 代

ラブレター今は絵文字で射止めてる
何かある安価札には乗りません
死にたくない美人薄命他人事

静岡市 渡 辺 芳 子

金メダル日本に満つる活活活
生き生きて四年後の夢彼にかけ
星影のワルツで終る肩くんで

第109回 大阪川柳の会

日時	12月12日(金) 17時開場 18時締切(席題なし)
会場	梅田駅前第2ビル5階 生涯学習センター
宿題	△忘れる・天根 夢草 △音・森中恵美子
	△でかい・河内 天笑 △テンポ・磯野いさむ
会費	千円 欠席投句12月11日まで 本田智彦 宛
	〒532-0025 大阪府淀川区新北野1-3-4 706

予 告

第15回 川柳塔まつり

日時 平成21年10月12日(祭日)

会場 ホテルアウイーナ 生駒・金剛の間
御参加を心よりお待ちしております。

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

大 空

李白の末裔

酒とろりとろり大空のこころかも

樽据へて誰にも吞ませたがる也

腰が抜けた話を酒の肴にし

酔ふて来ると他人のお前などといふ

酒女酒で不惑に手がとどき

なあちろり これから秋に親しもう

人並みにいけるといふが酒のこと

酒がいつしか水になっている

吞ます気でゐるに資本家ののしられ

それから資本家吞ます事にきめ

さて吞むとなれば資本家先に酔ひ

一合の酒だに女口を出し

夫婦づれチップの要らぬとこで吞み

二合壇きつちり酔ふて先へ去に

だまって吞むは惚れているなり

どつかで飲んで来てのマルクス・エンゲルス

火事か火事かと言うばかり矢張り飲み

その書棚酔に乗じて買うた本

坐食しているとも言へずつけさせる

十二月首だけ入れて吞んで行く

現在に満足をして二三杯

君の酒はいいと云はれて松の内

吞みに来いと云い云い春を留守にする

温故知新

女医さんが雨を出て行くオートバイ
食う話クイズの話秋という

出雲市 尼 緑之助

転勤先へもう武勇伝知れている
髭剃りへヒンヤリ秋を感じたり

府中市 広津 柳慶

深窓に育ったのがまず風邪を引き
録音の僕のところはカットされ

倉敷市 野田素身郎

走らねば廻ってくれぬ風ぐるま
モダン・アート絵が逆さでも売れそうな

大阪市 不二田 一三夫

頼まれてやとりますと定年後
われ五十むしろかたくなさを誇り

大阪府 早川 清生

「川柳雑誌」麻生路郎主宰
三五四号（昭和三十一年十一月号）から

お知らせ

川柳塔まつり参加者に贈呈しました
楽原道夫編『改訂増補橋高薫風川柳句
集』全句索引（B5版163頁）を御入用
の方は、一冊につき80円切手10枚（送
料込み）同封の上事務所までお申込み
下さい。多数冊の場合は料金に変更が
あります。

川 柳 塔 社

随時原稿募集しています

○エッセー

本文たて20字×70行（1400字）

○ひとこと

本文たて15字×20行（300字）

エッセーは同人に限り、ひとこと欄は
同人誌友どなたでも応募できます。ただし、
原稿の採否、掲載号については編集部一任と
させていただきます。

一句を遺せ

麻生路郎

北齋という人が、浮世絵風景画の先駆者であることは私の説明をまつまでもなく、先刻御承知のことと存じます。

この北齋が、何故世界的芸術家であるゴッホと多くの共通点があるときで、激賞されるような偉大な芸術家になったかと申しますと、それは自己の芸術に対して非常に真剣であり、しかも彼自身の修養と努力が尋常の苦心でなかったと云うことが北齋をして今日の名をなしたのだと思ひます。

彼は自分の観方に随つて、あくまでも真を得ようとした、その謹厳な態度はこの画家に著しくあらわれております。

私達川柳家にとつても、彼のこの態度によつて進んだならばたとへ現在におきまして、苦渋な感を伴う句をつくっているといふたしましても何時か識者に認められるような句の完成期に達することが出来るのであります。

明治三十七年以来、作句に苦しんで来た私にも、未だ、真に後世に遺して、恥しな

いやうな句は一句も出来てゐないのであります。

二十年の句の中から自分で捨てかねる句を選び抜けば或は十句位はあるかもしれません。けれども識者に見れば一顧の価値もないかもしれないのであります。しかし私は川柳を捨て得ないのであります。

それは私の生命を永久に伝えるものは川柳の外にないと思うからであります。

私は、北齋が如何に自己の芸術のために全力を注いだかをかつて読んだことがあります。

彼の苦心に対する挿話としては、彼の一門人が、その習技の未熟なのを嘆じて筆を投げんといたしました際に、北齋の娘はその門人に対して笑ひながら「我父（北齋）は幼年より八十有余歳の今日にいたるまで、日夜筆をとらざる事なし、然るになお腕を組み、余は実に猫一匹をも描くこと能はず」とて落涙し、その画の意の如くならざるを嘆息せり」と云つて励ましたそうです。

この言葉によつて見ましても、北齋は老年になつても、なお絶えず芸術的良心の下にこの刻苦を続けていつたのであります。

彼は人物の解剖学的知識を得んがためには接骨医のところにまで通つたそうであります。私達川柳家にも常にこの心がけがあつて欲しいのであります。

嘉永二年四月彼は九十でこの世を去りました。しかし死するときに北齋は「もし天が我に十年の命を長うせしめたら真正の画家になるを得たであらう。否五年長うしたならば」といつたそうであります。

畏友小出権重氏が、まだ有名でなかつた頃に私に対して「僕は死ぬまでたった一枚でいいから立派な画を描いて死にたい」と語つたことがあります。

そして彼は有名になることを非常におそれて居りましたが遂に二科の審査員とまでなつても彼は矢張り昔の彼であるところに、彼の偉いところがあるのだらうと常に敬服して居る次第です。

私も又小さな川柳に甘んじていないで、せめて一句でも後世の識者に示しうるやうな立派な川柳を遺しておきたいと思つております。本誌の読者におかれましても第二の北齋となつて後世に遺し得る一句のために力作せられたいのであります。

（大正13年3月2日夜）

— 川柳雑誌第一巻2号より抜粋 —

愛染帖

新家 完司 選

猫が鳴くわたしも恋を捜そうか
豊中市 荒巻 夢

(評) 周囲に氣遣うこともなく、本能のまま語り合う猫の恋。彼らのすさまじい生命力を思い、我が身の儂い残り火を思う。

芦屋市 黒田 能子

絶滅をすればカラスも保護される

(評) カブトムシは珍重するが、ゴキブリは叩き殺す。コウノトリは保護するがカラスは追っ払う。まことに勝手なわたしたち。

吹田市 穴吹 尚士

酒止めているのに届くビール券

(評) 困ったことである。先方に悪気などではなく、「あの人は飲める口」という意識が込み込んでいるのだらう。さて、どうしたものか。

八尾市 生嶋ますみ

勝手なことしたくてひとり暮らしする

(評) 一緒に暮らそうと言ってくれるのは嬉しいが、好きなときに寝起きし、好きなものを食べる今の暮らしは手放しがたい。

京都市 都倉 求芽

出し投げは相撲投げ出しは政治

(評) 「出し投げ」はれっきとした相撲のきまり手であるが、「投げ出し」は卑怯な逃走術。総理一人も続いて、とはなさない。

海都市 三宅 保州

動物園でいちばん多いのはヒト科
どんな口紅も負けず紅いバラ

未亡人という名がついてまだ三日
うしろ正面だあれもいない夏の果て
縄電車乗り合わせたのは深い緑
針生 和代

二百二十日無事に過ごしている稲穂
七回忌亡母の自慢をする姉妹
子や孫も夏も去ったと法師蟬
河内長野市

針生 和代

超音波胎児の欠伸写し出す

ホコ天に分け入ってくる救急車
小栢こずえ

大阪府

話すことあるが黙って聞いている
眠たいが時間がくると目がさめる

眠たいが時間がくると目がさめる
三田市 北野 哲男

托鉢の僧の衣で鳴る電話
大空にコンパスがあり丸い月

和歌山市 古久保和子

居酒屋に集う大人の反抗期
我がルーツ林檎に芯があるように
寝ているときどき止まるらしい息
貧乏でもいいけど若いうちだらう

弘前市

寝ているときどき止まるらしい息
貧乏でもいいけど若いうちだらう

自転車をころがして行く路地は秋
森は黙って鳥の帰りを待っている
和歌山市 木本 朱夏

和歌山市

痒い背を押し付け合って五十年
吹田市 太田 昭

太田 昭

そうめんを引っ張り合って仲直り
高知市 松尾 憲子

(評) こちそうさま! つまらないことが

原因の仲違いは、つまらないきっかけで修復できる。素麺を同じ鉢に盛つたのは作戦か?

河内長野市 黒岩 靖博

目の前の空気と水に無関心

(評) にんげんのみならず、生物すべてにわたっての生命線である「空気」と「水」。あまりにも身近すぎて無関心。恐ろしいことである。

鳥取市 山宮 愛恵

世話になる隣近所だ窓開ける

(評) 般に閉じこもってはい交流できない。が、大手門を開放して「さあどうぞー!」というわけにも行かぬ。まあ、窓くらいなら……。

札幌市 三浦 強一

人肌の便座でしばし瞑想す

(評) この世でいちばん落ち着く場所は、我が家の「人肌の便座」。誰に邪魔されることもなく、こころおきなく「瞑想」できる。

香芝市 大内 朝子
もう一度恋の魔法にかかりたい

西宮市 片山 忠
死なないでいるのも老いの大仕事

橋原市 安土 理恵
ありがたく頂いておく迷子札

亀岡市 井上 森生
新旅券さて十年の旅を練る

大阪市 谷口 義
秋が来て仏様にもおまんじゅう

神戸市 田中 章子
太い樹に出合うと抱いてみたくなる

島取市 岸本 宏章
虹ですよと見知らぬ人に声かける

西予市 黒田 茂代
秋日和風車も羽根を休ませる

三田市 堀 正和
副作用なければ酒も只の水

退職の理由はみんな自己都合
すみませんよりも嬉しいありがとう

堺市 西村りつえ
夕食のカレーうどんに化けて昼

大黒柱床の間も無くバリアフリ
出口なく溜息ばかり出る晩夏

今治市 渡邊伊津志
竹のよう柳のように生きてゆく

不景気のもととは節約かも知れぬ

八王子市 播本 充子
菜食に代えて孔雀になりました

島取市 中宇地秀四
先に逝く方が何かと楽らしい

寝屋川市 籠島 恵子
本物は灰汁も苦みもたんとある

藤井寺市 若松 雅枝
私にはネイルアートは似合わない

大阪市 小谷 集一
どの家の電子レンジもチンと鳴る

八尾市 高杉 千歩
寝たきりのお方も入れた長寿国

七人でカラオケ私だけ演歌
藤井寺市 鈴木いさお

暇はある体力もある金が無い
次の世もきつと一緒に驚かされ

島取市 福西 恭子
退路断つ覚悟するほど強くない

好奇心すぎて余生も暇がない
浜松市 岡田 史郎

往年の名画役者の若いこと
受付ですぐに始まる同窓会

羽曳野市 吉川 寿美
母には母の哲学がある梅の壺

パソコンにわたしの指が拒まれる
大阪府 板東 倫子

理不尽な国のしぶとさしたたかさ
墓まいりゲリラ豪雨に襲われる

鳥取県 竹信 照彦
ラーメンの汁を平らげ小言聞く

飛び込んで泳いで趣味の深いこと
和歌山市 上地登美代

金食い虫いるから今日も頑張れる
エコ生活洗車は雨に任しとく

渦巻蚊取りから立ちのぼる昭和
過去絡め生家の軒の蜘蛛の糸

弘前市 福士 慕情
洞穴があると冒険したくなる

階段を上った数をまた下りる
倉吉市 野口 節子

投資欄読んで貧乏しています
豊中市 谷川 勇治

金魚鉢一匹残り生きている
米子市 政岡日枝子

公園の鳩が私をじっと観る
紀の川市 宇野 幹子

年金の杖にとまった鬼やんま
泉佐野市 稲葉 洋

皮下脂肪冬眠用に蓄える
鳥取県 加賀田志延

長城も一つの石を置いてから
大阪府 奥村 五月

自転車かと先に尋ねて酒を出す
松江市 川本 畔

言い足りぬ隙間を咳で埋めておく

鳥取市 福田 登美
二期のチャイムやさしく鳴っている

海南市 堂上 泰女
宿題を急ぎ立てている法師蟬

大阪市 岩崎 公誠
百のうち九十ほどはすぐ忘れ

池田市 栗田 久子
百歳の長寿たたる複雑さ

唐津市 井上 勝視
夜が明けてやっと眠れた入院日

藤井寺市 鴨谷瑠美子
ご用心九官鳥がいるのです

鳥取市 夏目 一粋
控えめを卒業します古稀なもの

箕面市 広島 巴子
ミステリー読んで頭を活性化

八尾市 吉村 一風
人間の重さを軽く見てないか

和歌山市 田中 みね
加齢とや五体へお灸湿布薬

大和郡山市 坊農 柳弘
スローライフ幸せごっこして夫婦

米子市 小塩智加恵
同窓会黒髪に染め赤い服

鳥取市 土橋 螢
公園の防犯灯が切れている

堺市 矢倉 五月
右左にじって空けてくれた席

東京都 岸野あやめ
寝仕度がいろいろあつて老い進む

弘前市 高橋 岳水
呼び鈴も疲れ介護の手も疲れ

神戸市 山田婦美子
手も足も元気だ介護してあげる

鳥取県 石谷美恵子
心とは違う挨拶深くする

唐津市 仁部 四郎
いんちきをアハハと買った父でした

加東市 中上千代子
七輪の出番になった新サンマ

紀の川市 辻内 次根
日本を信じ錠剤手のひらに

八尾市 中島 春江
梓川澄み我が若き日のままに

堺市 加島 由一
飲んでますよく生きてます虫の声

鳥取市 岸本 孝子
勝って飲み負けて飲んでる草野球

熊本県 高野 宵草
お知らせの便りは電気また値上げ

大阪府 畑中 節子
傘をさし言葉拾いに雨の道

松江市 三島 淞丘
ケータイを家に忘れた日の自由

高知市 小川てるみ
激辛のカレー残暑をぶつ飛ばす

唐津市 岩崎 實
礼だけはきちんとせよと父の声

交野市 山川日出子
私流ピアノの音色今日は晴れ

高槻市 乙倉 武史
同期会世話役が逝き閉会に

奈良市 尾畑なを江
なんとまあこの国どこへ行くのやら

堺市 村上 玄也
色の順違えば別の国の旗

倉吉市 松本よしえ
病院の待合室で連れになる

唐津市 坂本 蜂朗
昨晚の酔った日記が読みとれず

大阪市 尾崎 ゆめ
一人旅人魚になって露天風呂

茨木市 藤井 正雄
毒舌で激励目では笑つてる

東かがわ市 川崎ひかり
橋が出来島に残るは高齢者

豊中市 水野 黒兎
なるほどと頷いてから考える

岸和田市 森元ふみよ
長風呂でだみ声出して老い元氣

日立市 加藤 権悟
宅配のおとこ結びの荷が温い

鳥取県 佐伯 やえ
歯のいたみわかつてくれる人という

吹田市 早泉 早人
口下手の罪をあける酒をつく

寝屋川市 富山ルイ子
生さる意味問いかけてみる昨日今日

大阪市 川原 章久
乗ってます後期高齢縄電車

和歌山市 福本 英子
明日からは枯葉マークになる車

美作市 小林 妻子
枯葉マーク前も後ろも重傷た

堺市 山本 半銭
焼夷弾浴びた記憶はモノクロで

奈良市 矢野 良一
秋の風川柳塔と昼寝する

和歌山市 武本 碧
エアコンでふたりの空気除湿する

唐津市 山口 高明
綿菓子半分空気いれてあり

堺市 近藤 治子
道草を楽しんでいる老いた今

京都市 坪井 孝一
付き合ひも腹も八分で妥協する

鳥取県 山下 節子
仁王像の睨みに気合もらいます

奈良市 岩本 浩二
朝顔の蔓も私も杖頼り

堺市 志田 千代
単線の駅名はローマ字で知る

寝屋川市 平松かすみ
万歩計付けてお昼寝しています

神戸市 山崎 武彦
車椅子の母が真ん中恙なし

寝屋川市 森 茜
涙腺が緩みわたしも真人間

三田市 阪本 藤朗
拝金の心が罹る偽装病

大阪市 岩崎 玲子
料理本買って作った二つだけ

大阪市 萩原 大朔
四の五のと言つて僻地へ飛ばされる

鳥取県 岡本 幸枝
表面は褒めさせている嫉妬心

神戸市 山口 光久
生返事が誤解を生んだ契約書

三田市 石原 歳子
敬老日の案内状が置いてある

鳥取市 近藤 秋星
敬老の日には来るなよ台風よ

宇部市 平田 実男
敬老会お世話するのもお年寄り

大洲市 花岡 順子
偏見の眼鏡裏面ばかり見る

三田市 福田 好文
黙祷一分雑念ばかり脳よさる

橋本市 石田 隆彦
浮く心亡母が出て来て戒める

富田林市 古田 千華
世の中の憂きことごとくりりー咲く

高槻市 佐甲 昭二
泳ぎ方決めかねている定年後

シドニー 坂上のり子
今日の顔で十年通すバスポート

高槻市 片山かずお
足掻いても妻の手からは逃げられぬ

倉吉市 山中 康子
夫を看るまでは赤子をあやすよう

黒石市 相馬 一花
のほほんと鼻毛伸ばして飲むお酒

吹田市 中村十八娘
羊雲遠い昔を語りだす

鳥取市 田村 邦昭
老いの身に北風ばかり寄ってくる

出雲市 園山多賀子
私にはお世辞は言わぬ聴診器

大阪市 大川 桃花
魚から見れば人間変な顔

大洲市 中居 善信
叩いたら響く太鼓もわたくしも

奈良県 渡辺 富子
リフォームをわくわくと待つ台所

大阪市 伏見 雅明
盛會を折つていつも欠にマル

鳥取県 細田 裕花
燃え尽きるまで頑張った扇風機

第14回 川柳塔まつり

同人総会

平成20(08)年第43期川柳塔社同人総会は、10月5日午前10時からホテルアウィーナ大阪で開催された。村上玄也副理事長の司会で開会し、河内天笑主幹があいさつ、同氏を議長に選任して議案審議に入った。

一号議案の事業活動は井伊東吉常任理事から報告した。

・具体的な事業活動を、後記の「事業活動報告」に沿って説明しながら、次の通り述べた。

・前年同人総会での「路郎師の川柳を勉強する機会が欲しい」との要望に応え、川柳塔誌に麻生路郎句集「旅人」から路郎の句を転載し、路郎川柳を深く理解頂ける一助として、るので、熟読をお願いする。

・新事務所で、部長連絡会を開催している。各部の問題点の協議や擦りあわせを行い、川柳塔の活動に「洩れ」や「連携ミス」の出ないように努めている。

・誌友拡大活動は全同人に浸透してきて、その実効を上げつつある。

続いて、鶴田遠野常任理事が前年度の会計決算報告を行い、川上大輪会計監査が監査承認

の旨を報告し、一号議案は承認された。

二号議案の08年度の事業計画は、井伊東吉常任理事が、前年実績を基盤にして次のような事業拡充計画を提案した。

・部長連絡会を今年度も積極的に実施し仕事の細部確認と責任の明確化、常任理事会への提言諮問事項の準備を行う。

・事務局の充実を図り、効率化に努める。



閉会挨拶 小島 蘭幸

・路郎師の句の紹介を

継続し、川柳塔誌の更新の充実を

図る。第二

回「ごま川

柳」の募集

を行なう。

・同人・誌

友の拡大努

力を地道に

継続する。

・同人名簿

を更新し発

行する。

・本杜句会に参加しやすいように、開催時間の再検討を行う。(アンケート実施)
08年度会計予算案は龍島恵子常任理事が提案した。

一号議案も承認され、会議全般につき質疑応答を行なった。

古川誓水氏より川柳塔誌の「各地柳壇」につき次のように提案があった。

現在は川柳会単位に30句以内の投稿となっているが、多人数の川柳会では掲載できない人が多く出ている。誌友予備軍や柳歴の浅い誌友は何としても掲載して欲しいし、掲載句数の拡大をお願いしたい。

山本希久子編集部長から、

ご提案の内容は、ページ数との関連もあるが、お名前と川柳が載ることを名譽と考えて頂いて有り難い。充分に検討して、ご希望に添えるように努力したい、又水煙抄、初歩教室への投稿をぜひお勧め願いたい、と答えた。新役員案は、西出楓堂理事長から別項の通り提案され、いずれも承認された。

これにて全議案を承認し議長を解任。新役員を代表して川上大輪副主席が「役員だけでなく、同人一人ひとりの支援が必要。主幹・理事長を盛り立てて頑張ろう」と挨拶した。閉会の言葉で小島蘭幸副主席が、「有意義な同人総会であった。川柳塔社の発展を願って止まない」と述べた。

■事業活動報告

【事業】

本社関連

2007 (平成19) 年

10月8日 第13回川柳塔まつり (ホテル・ア

ウィーナ大阪・250名参加)

11月10日 川柳塔碑合祀法要 (高野山大霊園

22名参加)

2008 (平成20) 年

2月16日 第4回各地川柳会代表者会議 (ホ

テル・アウィーナ大阪・31名参加)

7月7日 路郎忘本社句会 (ホテル・アウィ

ーナ大阪・116名参加)

9月から選者交代

【水煙抄】 小島 蘭幸

【檸檬抄】 高瀬 霜石

木本 朱夏

各地関連

6月28日 川柳塔すみよし発足記念句会 (住

吉区民館・80名参加)

【主な受賞・表彰】

柿花 和夫 本社句会 月間賞杯永久保持者

池 森子 富田林市 教育文化功労賞

西出 楓葉 全日本川柳協会 第二回川柳文学賞

【出版・句集の刊行】

はたる川柳同好会合同句集 『はたる』

翠洋会合同句集 『翠 洋6』

城北川柳会合同句集 『わんど8』

岬川柳会合同句集 『みさき』

長柳会合同句集 『創立20周年自選句集』

藤井 則彦 『忘れ得ぬ三行句』

今 愁女 『ゆきほとけ』

新家 完司 『平成20年』

三宅 保州 『たまゆら』

前 たもつ 『山びこの詩』

なわ柳壇入選句集

太田扶美代 『アイスクリーム』

村上 直樹 『川柳一万歩』

柿花 和夫 『七転八起』

穴吹 尚士 『定年からの川柳』

【句碑建立】

中塚 礎石 (笠岡市古城山公園)

八十田洞庵 (自宅・岬川柳会15周年記念)

大橋 政良 (北海道美唄市遊園通り)

【物故者】(5名)

吉田 笑女 平成19年8月16日没 92歳

瀧本きよし 同 9月6日没 75歳

岡井やすお 同 12月4日没 95歳

神原 文 同 12月16日没 86歳

中 宗明 平成20年3月13日没 78歳

■新任役員(留任は含まず)

主 幹 河内 天笑(選挙にて再任)

理事長 西出 楓葉(選挙にて再任)

副主幹 川上 大輪

常任理事 古今堂蕉子 村上 直樹

山口 光久 山岡富美子

会計監査 藤村 亜成

参与 西内 朋月

理事 喜田 准一・佐々木満作・伊達 郁夫

堀 正和・三島 淑丘・山田 耕治

■新同人(15名)

永田章司(羽曳野市)

松村里江(豊中市)

伏見雅明(大阪市)

上垣キヨミ(三田市)

北村 稔(鳥取県)

米富淳風(岸和田市)

加川靖鬼(尼崎市)

森田 麗(寝屋川市)

【同人総会出席者】(順不同・79名)

岩崎公誠 村上玄也 籠島恵子 奥田みつ子

河井庸佑 小島蘭幸 西出楓葉 山岡富美子

穴吹尚士 阿萬萬の 井伊東吉 佐々木満作

水野黒兎 前たもつ 吉村一風 小野句多留

村上直樹 山口光久 坊農柳弘 岩佐ダン吉

板尾岳人 小谷集一 三島淑丘 宮本三喜夫

福土慕情 土橋 螢 川上大輪 鴨谷瑞美子

松尾和香 森 茂美 長浜美龍 古今堂蕉子

山田耕治 黒田能子 木本朱夏 山本希久子

宮西弥生 井九弘紀 新松雅枝 居谷真理子

川端一歩 堀 正和 加島由一 飛永よりこ

吉岡 修 伊達郁夫 北野哲男 榎本ふりの出

榎本舞夢 鈴木公弘 平尾菜美 相馬銀波

中井アキ 櫻庭順風 山本柳昌 河内天笑

三宅保州 喜田准一 米澤飯子 安土理恵

河内月子 米田恭昌 渡辺富子 古川奮水

西内朋月 大内朝子 北村賢子 笠井欣子

中岡 妙 奥村五月 松村里江 藤井正雄

矢倉五月 柿花和夫 長井善純

■おはなし(要旨)

薫風さんさん

楽原 道夫

索引作成の作業を進めていく中で、川柳作家薫風について再確認したことを二点、お話します。

まずは、薫風の句へのこだわり、句に対する執着心の凄さです。

柳詠や句会で発表した句を推敲して形を変えて句集に収めている句が、約九〇句あります。『橋高薫風川柳句集』は一八六二句収録、約二〇句に一句は推敲して収録していること



楽原 道夫さん

になります。中でもうまい推敲だなあと思っただけが、

黄色い屋根の旅館に寝た日 秋の信濃の「川柳塔」昭和42年11月号の「柳界展望」には、黄色い屋根の旅館で寝たる溪谷の秋の形で載っています。句集では、「寝たり」で切れ、まず、黄色い屋根の旅館で寝たことの感動を示しています。そして、「秋」と時間を示し、次に「信濃の」と空間を示す言葉を畳みかけます。黄色い屋根の旅館が、秋という時間に、また信濃という空間に抱かれて、黄落した葉っぱのような可愛さです。

薫風には前書の句が多いが、前書にもこだわったものがあります。へ独楽二つ回りいることは息苦しは、「川柳雑誌」に発表されたときには「或る恋」の前書があり、「有情」では省かれ（路郎の指導によるものか）、『樗楼』では「恋」の前書を付け、『橋高薫風川柳句集』では、もとの句集『有情』に倣って省かれています。「或る恋」の前書からは、生々しい現実の「或る」恋を思い浮かべていることがわかります。『樗楼』では、「或る」をとって普遍的な恋を詠んだ句にしました。さて、もう一点ですが、薫風作品の特長、すばらしさは何かということ。私は、薫風作品の特長は、叙情にあると思っています。

その叙情の質を考えるに当たって、俳人の鷹羽狩行の句を取りあげて比較をしてみたいと思います。狩行の句に、

摩天楼より新緑がバセリほど(昭和44年)があります。エンパイア・ステート・ビルからセントラルパークを眺め、その新緑をバセリに見立てた句です。

対して、薫風の見立ての句を並べると、

恋人の膝は樗楼のまるさかな(昭和39年) 眼鏡屋は鰯雲ほど並べたり(昭和43年) てんとう虫ここにも小さい輪島塗(同右) 早川清生さんによると、薫風は若い頃、「知的叙情こそ、現代川柳の糧である」と言っていたようです。狩行作品も、知的叙情あふれる句ですが、薫風作品の方が、より凝縮力があるというのが、私の考えです。思いを溜めたぎりぎりの所で感性で穿つことによって生じる叙情。溜めた思いをあえて語ろうとしないことによって、時間的、空間的広がりを感じられる叙情。それこそが薫風作品の特長であり、すばらしさであると思います。そして凝縮力という点で、私は(恋人の膝は樗楼のまるさかな)より(恋人がいま肉眼に入り来る)の方をとります。私は、『肉眼』が薫風作品の知的叙情の到達点だと考えています。

各賞表彰・記念句会

受賞者（敬称略）―前列右から、小沢淳、桑名孝雄、小林わこ、河内天笑、西内朋月、升成好

後列右から、太田昭、福元英子、森田明子



晴れの受賞者

10月5日、第14回川柳塔まつりは、あいにくの雨模様であったが、札幌、弘前、横浜、

高知、鳥取、島根、広島、そして地元関西勢の同人三六名が賑やかに参会した。

会場には「いのちある句を創れ」と標榜しつづけ今年、生誕百年になる路郎師の像が私たちを見守って下さっている。

定刻1時、司会の太田昭・松原寿子、開会の辞は西出楓楽理事長。河内天笑主幹の挨拶、祝電披露、そして六賞の表彰が行われた。

主幹からそれぞれに賞状と楯が授与され、所属の吟社から花束が贈呈された。なお愛染帖賞の吉田あずきさん、樺樓賞の高田美代子さんは都合により欠席。

引き続き穴吹尚士同人誌友副部長から本年度の新同人15名のうち、出席の11名が紹介され、記念品が手渡された。

お話は乗原道夫さん。「薫風さんさん」と題して、まつり参加者に配布された改定増補『橋高薫風川柳句集』編纂の裏話や、薫風先生の作品に対する熱意を語った。薫風先生の



景風付受

ご子息、充さんも最前列の席で熱心に耳を傾けられた。（78頁参照）（朱夏記）

月間賞は藤井寺市の若松雅枝さん。

協取り（月子・朱夏・朝子・蕉子）

清記（直樹）・撮影（公誠）

兼題「奏でる」

鴨谷 瑠美子選

コオロギが去年の場所で奏でてる
 ようもまあ失言ばかり奏でてる
 政治家が奏でる名曲に疲れ
 音階のずれたまま来た二重奏
 三日月へ仮設小屋からハーモニカ
 笛太鼓奏でる子らが明日を継ぐ
 蛇口からも奏でてはいる母の朝
 もう誰も聞いてはいない笛を吹く
 秋の庭虫気持よく鳴いてくれ
 ここからはもう迷わない二重奏
 朝を奏でるクロワッサンを焼いている
 泣きこも奏でて吞めば面白い
 聞き上手飲み屋話をはずませる
 この先も妻と奏でてゆく余生
 美しいメロディー竹輪でしたんか
 伴奏のはずれたままで歌ってる
 一本の命奏でる一本気
 音程の外れた虫もいる夜長
 すみませんアンコールまで眠ります
 そよぐ葉のリズムで気づく早い秋

愛論 勝弘 見清 淳 哲男 慕情 一風 尚士 月子 扶美代 ますみ とし子 まさよ いさお 蘭幸 さくら 欣之 千枝子 弘一 久子

ハワイアン奏で笑顔のフラダンス
虫の音にむかしむかしが奏で出す
御堂筋いちょう奏でる秋の詩
あの世へはマーチをかけて元氣よく
九条が奏でる平和囃みしめる
琴の音を奏でる店でお茶にする
ハーモニカで校歌奏でている空気
生活の音を奏でる電気器具
天の川星が奏でる愛の歌
草笛に小川のメダカ踊りだす
俺が弾くとのこぎりになるワイオリン
琴の音がきれいで空気澄んでくる
台所朝から元氣響かせる
若い日に戻れるメモデイ奏でてる
手拍子のデュエット老母とわらべ歌
カナカナの音に合わせて一行詩
シンバルではつと目覚めた演奏会
隅っこのコントラバスは私です
残されたピアノに向いドレミファソ
ハーモニイ奏でる筈が途中下車
ソロよりもデュエットが好き冬の鍋
セレナーデ今夜も魔女になる予感
愛情が奏でる母の子守唄
大正の音を奏でる蓄音機
口笛で大観衆を魅了する
忍び足いま虫たちの合奏中
孫が来て奏でる曲はロック調

八千代 佳恵 鈴子 正美 ダン吉 加お里 太郎 歳子 巴子 裕之 保州 天笑 日の出 葉子 直樹 栄呼 順子 真理子 蕉子 すみ子 富美子 富子 善純 好 章子 英子 弘泰

虫たちが奏でる野原消えていく
ベン先で私の心奏でます
さわやかに居眠りもいてピアノソロ
人生のドラマ奏でる場時計
佳
伴奏がだんだんずれてくる不思議
清原の最後奏でるファンの声
コンサート眠らされたり目覚めたり
ジョンガラを奏でる人も酔うている
青春をおやじバンドで取り戻す
人
政治家に奏でる音付見当らず
地
寝ころんでモーツアルトを聴いている
天
愛してる奏でるように騙しはる
軸
全身で奏で始めた秋の虫
兼題「天狗」 北野 哲男選

弘子 明子 忠央 更紗 正和 柳歩 宣子 ノン子 淳司 寿子 義 昌紀

二代目の天狗に鼻が重たすぎ
小天狗と烏天狗の選挙戦
国会に烏天狗の顔ばかり
天狗には小さく見えるヒトの鼻
お多福の鼻に恋している天狗
天狗でも鼻の高さを気にしてる
ユニークな鼻と分かつている天狗
天狗の鼻キスの時だけ折りたたみ
小天狗と言われた君も好好爺
還暦の烏天狗が赤すくめ
鼻べちゃな天狗が棲んでいる我が家
麻葉大天狗の鼻をもっている
天狗の子鼻の高さをまだ知らぬ
面目を保つドリンク飲む天狗
花道に天狗の面を置いて来る
ライバルを天狗にさせて梯子取る
天狗老い自分の鼻が重くなる
深い森減って天狗はホームレス
露天風呂天狗の仮面落ちていた
天狗にはなるなと天狗子を諭す
酔うほどに天狗の法螺が太くなる
ゴキブリが怖い天狗の泣きどころ
森林が減って天狗も生きにくい
俺よりも先に死ぬなと言う天狗
コンビニにたまに出没する天狗
UFOも飛んできましたという天狗
孫らにはめつぽう甘い天狗さま

久仁雄 洋介 真理子 慕情 一慧 靖鬼 碧 見清 忠子 ちかし 天笑 蘭幸 恭昌 れんげ 律子 楓楽 正美 和代 遊子 孝雄 なぎさ 明子 とし子 ますみ 菜美 キヨミ

履歴書に天狗の涙伏せてある

風雲急駭馬天狗がまだ来ない

大天狗小天狗ようけいはります

凡人が一番いいという天狗

ヘリコプターへ乗ってみたいという天狗

一本歯の下駄はいてるから天狗だろ

人間が怖くて天狗森を出す

油断した天狗の鼻に蜂がくる

とうさんの天狗の鼻は折らんとこ

誘われて天狗話を聞く屋台

天狗鼻折る気で探す誤字脱字

煽てると鼻がするする伸びてくる

ときどきは私の中にいる天狗

立泳ぎできぬ天狗が溺れてる

揚々と出たが坊主で去ぬ天狗

B面の天狗にコーヒー奢らせる

アメリカの天狗の鼻が欠けてきた

住

霊長類ヒト科に属してる天狗

ミシランの星ぶら下げたシエフの鼻

診察券いっぱい持つている天狗

孫抱いて天狗の背中隙だらけ

豚の鼻いいなと思う天狗の子

人

形状記憶天狗の鼻はすぐもどる

地

ほとほとどの天狗にさせる名コーチ

寿子

朱夏

義子

能子

雅文

二英

好

紀乃

かりん

蕉子

正雄

三喜夫

大輪

准一

耕治

アキ

正和

保州

尚士

富美子

希久子

洋

章子

昌紀

天

火祭りの天狗もメタボ症候群

軸

仏壇に天狗の鼻がある家系

兼題「從う」

小野 句多留選

迷うたびあなた任せの旗を振る

強なつた嫁はん婦唱夫随です

從つてばかり自分を見失う

從つていそうで妻はマイペース

四角にも丸にもなつて世を生きる

母さんのタクトで動く大掃除

從えば妻はやさしい風になる

定年後妻は夫を從わせ

從つていれば給料飛んでくる

秋高し五感のなすがままに居る

息子には從う振りをしておこう

すぐハイと言うから甘く見られてる

中山さん婦唱夫随でいきなはれ

多数派に從い僕が軽くなる

老いて子の小言も少し聞いてやり

從順な妻ほど謀反抱いてる

從順な妻がそこそ居た昔

愛だろう三歩下がつてついでくる

七割は妻に從い達者です

大勢に從い今日を生き延びる

從う氣さらさらないが聞いておく

富喜子

碧

セツ子

智彦

淳風

淳丘

泉水

惠美

香代

蕉子

幸雀

半銭

正和

章司

ダン吉

桂作

千里

和子

哲人

早男

尚士

加お里

從つているとは見えぬふくれ面

從いて来い血をたぎらせるお方です

人前は主人主人と立てておく

母ちゃんに從つてたら善なし

人前に從うふりもして夫婦

老いて子に從うことも処世術

老いてなお子に從わず生きている

かなわんな腹が立つほど言いなりや

実弾が届き從うことにする

札束を積んだらきつとついて来る

從つた距離が微妙に離れ出す

法律に從う僕は真人間

先頭に從う蟻が持つ反旗

從わず難を逃れる紙一重

本能に從いメタボらしくなる

從つたふりで手綱は握つてる

信念に從い年齢に背く

真剣に叱ると子供ついてくる

手術台從う外に術はない

ついて来いそのひと言に負けました

母さんの大きな尻に從いてゆく

世間体気にせず君について行く

從わなうち平和は守れへん

すんなりと妻に從う歳となり

老いてなお子に從わぬ心意氣

付いて来い昔威張つた事がある

どん底に生きて從うことに慣れ

靖鬼

ばつは

淳

満子

月子

なぎさ

浩二

柳昌

ちかし

雅枝

葉子

無限

シマ子

ふりこ

遊子

泰子

希久子

東吉

一步

理恵

日の出

天笑

裕之

孔一

黒兎

集一

キヨミ



披 講 風 景

終章は妻に従う外はない
君の掌と同じ温度でついてゆく
出せせぬ夫について五十年

佳

あの世まで従うつもりありません

矢印に従って行き元の位置

従順な盲導犬に見る威厳

親の意地まだまだ子には従えぬ

信念に従い夢を加速する

人

地獄まで従いて行くとは言っていない

鐘 造
ア キ
更 紗

妙

昌 紀

淳 司

孝 雄

見 清

シルク

地

正論に従う深い深い海

天

従ってみようか嘘が美しい

軸

定年後妻のタクトについてゆく

兼題 コラス

三島 淞丘選

菜 美

楓 楽

ゆきの

里 江

和 子

律 子

奮 水

ア キ

庸 佑

好

孔 一

二 英

宏 子

准 一

栄 子

光 久

時 雄

さくら

則 彦

泰 子

逆風もプラス志向の木守り柿

道草が生きるプラスになっている

再診のカルテに余病又一つ

プラス思考今日一日を凜と生き

プラスにはならんが陰で汗をかき

プラス思考結果あとからついて来る

よく笑うプラス思考は親ゆずり

ボーナスにプラスでやる気ひき立てる

プラス思考視野が広がる青い空

俺の損できつとプラスの奴がいる

熱燗をプラスワンする妻の留守

ファイナルはプラスマイナス零で良い

苦も楽もプラス思考の底力

下積みをプラスに生きる人間味

逆流もプラス思考で泳ぎきる

人生はブラマイゼロで良しとする

追加した酒がまたまた酒を呼ぶ

一つまみ足して近づくは味の味

プラス志向マニキュア赤に塗りかえる

好きだから足し算ばかりしてしまふ

その上にイケメンという玉の輿

負けないうでプラス志向の朝の靴

逆境をプラスにかえる敗戦忌

プラス思考の友を宝にして光る

七転びをプラスに替えて八起きする

人の輪の中にプラスの芽を探す

幸 雀

扶 代

とし子

忠 子

月 子

淳

なぎさ

久 峰

更 紗

修

り こ

句多留

和 香

朝 子

れんげ

ちかし

耕 治

慕 情

弘 子

碧

遠 野

千 里

喜 子

光 枝

鈴 子

黒 兎

下積みをプラスに生かす立志伝

塩胡椒足して男が出来上がり

子が出来て女プラスの風に乗る

イチローのプラス指向が生む記録

赤い薔薇プラスしましようかすみ草

飾らない人だ銚子を追加する

手心を加え自画像出来上がる

佳

逆風もプラスに変えた父の汗

雑学もプラスになって生きる智恵

プラスマイナスゼロで柩の中にいる

新しい家風を連れて嫁が来る

愛された分だけ愛をプラスする

人

一善を積んでプラスの日を終る

地

嘘少し足して仲良くルビー婚

天

余生きさら遊びこころをプラスする

軸

苦も哀もプラス思考で裏返す

兼題「ぎりぎり」

相馬 銀波選

ぎりぎりになっても来ない赤トンボ

ぎりぎりのあたりに落ちている情け

ぎりぎりの暮し支える妻の知恵

和代

朋月

美義

一步

瑠美子

天笑

保州

洋子

穀子

鐘造

柳弘

ダン吉

美智代

希久子

岳人

公弘

黒兎

すべり込みセーフで生きてきて笑顔

ぎりぎりに生きる介護の日が暮れる

産み月でやつと入籍できはつた

ぎりぎりで解凍したす夫婦仲

もう一本瘦せた財布に聞いてみる

ぎりぎりの線があなたにだけ甘い

極限を知っても背伸びしなくなる

のろまです何時もぎりぎりあしんど

ぎりぎりで米櫃の底見え隠れ

これ以上飲むとわたくし崩れます

ぎりぎりのところできつと来るアトム

ぎりぎりになっても神は現れず

ぎりぎりの線で私をさらけ出す

ぎりぎりでも補欠で残つてた

ぎりぎり歯ざしりで待つ拉致家族

洪水は床浸水で免れる

ぎりぎりの暮しに興味の彩を持つ

ぎりぎりになると案外うかぶ知恵

ぎりぎりの命拾った聴診器

過労死と背中合せの父の靴

追い詰めて追い詰めて良い詩を詠む

千恵子

義昭

さくら

忠央

孝雄

明子

昭

巴子

雅枝

五月

哲子

好彦

修

蛙城

桂作

房枝

桃花

とし子

泰子

蘭幸

司郎

ぎりぎりでいつも回っている喜劇

ブレーキがやつと間に合う車間距離

絞られてぎりぎり生きる濡れ落ち葉

ぎりぎりの家計学資は惜しまない

ぎりぎりにならねば出ない底力

ぎりぎりまで深入りしないのがルール

ぎりぎりの暮しも花は欠かさない

ぎりぎりのところで踏んばる事に馴れ

ぎりぎりで救いの神と握手する

ぎりぎりの線で住んでる過疎の村

失言の一步手前にあるジョーク

ぎりぎりで生きて来ました戦中派

ぎりぎりの暮しに温い家族愛

ぎりぎりのところに父の杭がある

ぎりぎりの賛否に悩むまとめ役

これ以上待つとカボチャの馬車になる

ぎりぎりのところで選んだのがあなた

ぎりぎりで花束と毒つかい分け

ぎりぎりに浮かぶ奇策がものを言い

お産する病院探す救急車

ぎりぎりで薬一本にしがみつく

かりん

朋月

順風

正雄

一慧

啓子

千里

加お里

更紗

律子

淞丘

鐘造

キヨミ

ちかし

准一

大輪

理恵

義子

一風

尚士

光久

ノン子

朝子

希久子

和香

片付かぬ拉致へ身内の高齢化
崖つづち男は退路断つておく

人

ぎりぎりの線で揺れてる善と悪

地

限界を貫く父の尊厳死

天

ありがとう最後にきつと言うつもり

軸

リミットに絞る戦う主役たち

兼題「憧れ」

河内 天笑選

憧れの駅弁抱え乗る夜行

あの頃の洋画はあこがれの世界
裕次郎せめて子供の名につける

宇宙葬憧れてます竹トンボ

憧れの君が来るなら参加する

憧れてやつと添えたら唯の人

憧れたものを掌にしてから虚ろ

憧れの君がちらつき眠れない

憧れた山で帰って来ない友

憧れの土踏みしめる球児たち

竹光をじっくり磨き錆付け

卒寿までプラス志向で生きんかな

老人が生きやすい世に憧れる

富士山に憧れ雲を蹴る若さ

正美 無限

愛論

美義

集一

巴子

紀乃

シルク

慕情

洋介

英子

美龍

菜美

正雄

歳子

蓄水

千歩

朝子

美義

憧れは仲よく暮す二世帯
街にいて大草原に憧れる

広重のくびれた腰に憧れる

安心の自給自足に憧れる

憧れた頃は天女に見えましたが

病癒え遍路姿に憧れる

憧れの人と仲良くメタボ腹

憧れと執念で取る金メダル

酒肴つまひ隠れ家ひとつ欲し

おじいちゃんになつてもやはりすてきな

啖呵切るきつとスカツとするだろう

機知に富むサザエ一家に憧れる

憧れと夢紙飛行機に乗せて

憧れたいるからそばに近よれぬ

少年の目にだんじりの大工方

憧れて添うたお方がうとましい

憧れは遠くにあつて美しい

憧れの宇宙屋台の店開き

憧れの人も元気に生きている

わたくしの憧れ夫に内緒です

憧れに赤いリボンをかけておく

あこがれの君がちつとも変らない

満足と感謝で余生過こしたい

憧れの人の手の爪足の爪

兄ちゃんに憧れ癖を真似てみる

くすりなど縁のない身に憧れる

喜代子

忠央

桃花

わか

茂雄

備和夫

昌紀

清治

五月

義子

更紗

見清

ノン子

和子

倫子

淳

孝雄

富喜子

理恵

楓楽

月子

義和夫

栄子

忠

憧れは自由気ままな一人旅
憧れたマンション暮し息詰まる

憧れた程でなかった都会の風

憧れの都会で迷路脱け出せぬ

憧れの人にもじもじ握手

憧れは愛しい人がいつも居る

憧れをいっぱい持っている瞳

憧れのひとは笑顔絶やさない

マチュピチュに向かって金を貯めている

妻もいて他のひとにも憧れる

あきらめと憧れいつも同居する

さりげなく君を盗み見しています

佳

大地踏む田舎暮らしに憧れる

憧れのひと美しく老いたもう

憧れをサブリメントにして老けず

おいお茶憧れだけでまだ言えず

憧れた街で孤独にならされる

憧れの椅子で軒をかがいている

憧れの人とご飯を食べている

憧れの人と水湧く村に憧れる

天

憧れの人とご飯を食べている

ピアノ弾きながら一曲歌いたし

軸

茶々

美智代

睦子

穀

瑠美子

セツ子

扶美代

富美子

完司

宏子

求芽

尚士

浜丘

恵子

哲男

五月

奥五月

たもつ

大輪

みつこ

若松

雅枝

参加者の感想（五十音順）

安土理恵さん（同人・橿原市）

表彰式では、受賞欠席者、遠方の方に花束に代る品を渡す等、細かい配慮がされていて感心した。新同人紹介も、リードによりスムーズに運び、すべてに裏方さんの力を感した。

小沢淳さん（誌友・札幌市）

花束もらった

たくさんの人に会えた

楽しかった

今日の喜びを言葉にすればこの三行に尽きます。有難うございました。

小野多留さん（同人・横浜市）

関西風の句、言い回しに少し戸惑いましたが楽しく選をさせていただきました。皆様同じような発想をされているのに驚きました。

木津川計さん（『上方芸能』発行人）

打ち解け合い、こんなごやかな懇親宴は初めてです。皆さん芸達者、特に天笑主幹夫妻の息の会った歌と踊りに感心しました。まるでかつての夫婦漫才コンビ「暁伸・ミスハワイ」の舞台を見ているようでした。

桑名孝雄さん（誌友・香南市）

川柳をはじめて14年、今回の受賞は自分目

身遅咲きというより狂い咲きと思っています。これからもゆつくりのんびり気楽に続けたいと思います。

初めての大会、凄いなあと思いました。川柳塔の人間性が好きです。楽しませていただきました。

古今堂薫子さん（同人・大阪市）

大きな会を成功に導き、恙なく終えられたこと、陰で皆様の大変な努力があったと思います。川柳塔の結集の力の大きさに感動しました。



主幹を囲む新同人

鈴木公弘さん（同人・鳥取市）

句会で感じたのは、入選に同想、類想句の多かった事、といつて穿ちの効いた句が多いわけでもなくユーモアの句も減った。川柳三要素の守るべきは守り継承せねばと強く思った次第。懇親宴は、新しく柳友にも巡り合い、無礼講の楽しい雰囲気だった。

竹治ちかしさん（同人・出雲市）

早朝家を出て帰宅は日付けの変わった頃となります。こうまでして私を川柳塔まつりへ、かりたてるものは何か、それは七夕のように年に一度、親戚以上の川柳仲間顔が見たいからだと思えます。来てよかった。

伊達郁夫さん（同人・枚方市）

川柳塔まつりに参加させていただき3年目になります。毎年準備、当日雑用に微力ながらお手伝いさせていただきましたが、先輩達のチームワークのよさに感心しています。家族的な雰囲気でのチームプレイ、これが川柳塔の伝統と真髓なのだと思感しました。これからも心温かい諸先輩に囲まれ川柳に精進したいと思わせる大会でした。

中野健吾さん（番傘同人・堺市）

川柳塔の方と一緒に堺川柳会の幹事をしています。路郎賞を獲得した西内朋月氏は、かつて川柳の後輩として指導したこともありま

す。その上達振りに驚き、共に喜んでおります。よく鳥取へも行きましたが、今回鳥取の方と隣席し話が弾みました。

藤井則彦さん（同人・豊中市）

毎年まつりには参加させていただいているが、年毎に運営の仕方が良くなっていると感じる。特に今年のまつりは、めりはりがあっていいと感じた。裏方の苦勞が実ったのだと思う。

三島崧丘さん（同人・松江市）

一日楽しく過ごさせていただきました。地方で選者の経験はありますが、こんな大きな会の選者は初めてで、いい句を見落としていないか少し心配です。

同人総会はスムーズに進行され、川柳家の良識はさすがと感心しました。

森田明子さん（同人・大阪市）

終始なごやかな雰囲気の大会でした。誌上でのみ知っている方にお目にかかれてうれしく思いました。

（編集部）

懇親宴

懇親宴は午後五時十分から、葛城の間で百名の参加で開催された。

司会進行は、坊農柳弘・鴨谷瑠美子が担当。開会の挨拶は奥田みつ子相談役。乾杯の音頭

は全日本川柳協会事務局長本田智彦氏「政局はどうだろうと川柳塔は不滅です」と。のっけからテンションは高い。

続いて本誌の「川柳讃歌」を執筆して下さっている、木津川計氏の御挨拶。「川柳塔とかけて満塁ホームラン二本と解く、心は発展（8点）間違いなし」とユーモアたっぷり。木津川節に大いに盛り上がる。

例年のアトラクションの皮切りは天笑主幹のウクレレによる「ベサメムーチョ」、続く



懇親宴の模様

「夜霧のブルース」には新家元司氏のソロや、河内月子さんのフラダンス「ハワイの結婚」等が入り会場は早々とお祭りモード一色に。喉自慢のお歴々のカラオケは、皆さん、現役時代にお仕事はしてらしたの？と唸らせる実に見事な出来映え。

クライマックスは木津川計氏の一人語り「番場の忠太郎」を一節。思わぬアトラクションに会場はやんやの喝采。最後は「具敷節」「六甲おろし」「星影のワルツ」等、全員輪になつての大合唱となる。（富美子記）

祝電拝受（敬称略）時の川柳社 平山繁夫
御芳志御礼（敬称略・順不同）

西出楓楽 小島蘭幸 鶴田遠野 鴨谷瑠美子
相馬銀波 小沢 淳 村上玄也 小野句多留
本田智彦 前たもつ 山本蛙城 奥田みつ子
中原諷人・みさ子 太田 昭 いずも川柳会
三島崧丘 都倉求芽 小林わこ 岩崎みさえ
桑名孝雄 河井庸佑 鍛原千里 山岡富美子
鈴木公弘 小糸昭子 松原寿子 瀬戸まさよ
土橋 螢 寺井弘子 山口光久 堺 川柳会
長浜美龍 川端一步 籠島恵子 山本希久子
木本朱夏 坊農柳弘 山本義子 美研アート
川柳塔鹿野みか月 川柳塔みちのく
京都塔の会

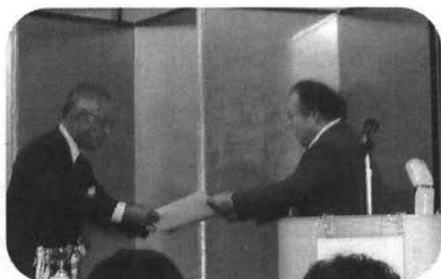
川柳塔まつり開会の辞



麻生路郎胸像→



第14回
川柳塔まつり
四階 金剛の間



受賞風景



新任役員



選者と2賞受賞者



懇親宴での挨拶
木津川計先生



会計監査報告
川上大輪副主幹

懇親宴にて



司会者太田昭・松原寿子

川柳大会参加者

総数 233名
(順不同・敬称略)

【北海道】

小沢 淳

【青森】

櫻庭順風

相馬銀波

福士慕情

【神奈川】

小野句多留

【滋賀】

久保和友

【京都】

高島啓子

坪井孝一

都倉求芽

【大阪】

三宅満子

山田蓼子

【大 阪】

浅野房子

安達忠央

赤松ますみ

【大 阪】

穴吹尚士

阿萬萬的

井伊東吉

【大 阪】

池上清治

石橋優明

板尾岳人

【大 阪】

井上一筒

井上桂作

井浜佳則

【大 阪】

井丸昌紀

岩崎公誠

岩崎玲子

【大 阪】

上嶋幸雀

上山堅坊

江見見清

【大 阪】

榎本舞夢

大川桃花

太田 昭

【大 阪】

大谷篤子

奥 時雄

小川佳恵

【大 阪】

奥村五月

大橋鐘造

岡本久峰

【大 阪】

柿花和夫

籠島恵子

笠井欣子

【大 阪】

笠嶋恵美

加島由一

河内月子

【大 阪】

河内天笑

川端 一步

川原章久

【大 阪】

河井庸佑

北村賢子

栗田久子

【大 阪】

柴原道夫

黒岩靖博

小林わこ

【大 阪】

小島笑司

小谷集一

坂上淳司

【大 阪】

坂 裕之

沢田定子

阪井美世子

【大 阪】

志田千代

柴本太郎

新川弘子

【大 阪】

鈴木栄子

杉本義昭

高杉千歩

【大 阪】

伊達郁夫

田中幸代

谷川勇治

【大 阪】

谷口 義

土田欣之

土橋房枝

【大 阪】

津守柳伸

寺井弘子

寺井弘子

【大 阪】

寺川弘一

富田美義

内藤光枝

【大 阪】

中井アキ

長井善純

中岡香代

【大 阪】

中岡 妙

永田章司

中野健吾

【大 阪】

西浦一慧

西川更紗

西澤司郎

【大 阪】

西出楓葉

野田栄呼

畑中節子

【大 阪】

早泉早人

針生和代

板東倫子

【大 阪】

広島巴子

藤井則彦

藤井正雄

【大 阪】

伏見雅明

本田智彦

前田紀雄

【大 阪】

前原正美

升成 好

松村里江

【大 阪】

水野黒兎

宮西弥生

峯村勲弘

【大 阪】

村上玄也

村上直樹

森下愛論

【大 阪】

森田明子

森田 麗

森村美花

【大 阪】

森本弘風

矢倉五月

安田忠子

【大 阪】

矢野 梓

山本蛙城

山本半銭

【大 阪】

山本柳昌

山室光弘

雪本珠子

【大 阪】

山本柳昌

山室光弘

雪本珠子

【大 阪】

山本柳昌

山室光弘

雪本珠子

【大 阪】

吉岡 修

吉村一風

山岡富美子

【大 阪】

吉村雅文

米澤飯子

米富澤風

【大 阪】

若松雅枝

山本加お里

大久保ノン子

【大 阪】

山本希久子

吉田喜代子

吉村久仁雄

【大 阪】

北野哲男

亀岡哲子

黒田能子

【大 阪】

金川亨子

片山 忠

小山紀乃

【大 阪】

加川靖鬼

田中章子

長浜美籠

【大 阪】

西内朋月

藤岡りこ

古川奮水

【大 阪】

本田律子

堀 正和

丸山孔一

【大 阪】

山口光久

山田耕治

山本義子

【大 阪】

奈 良

安土理恵

阿部茶々

【大 阪】

岩本浩二

大内朝子

鍛原千里

【大 阪】

坊農柳弘

森下鈴子

森田和夫

【大 阪】

米田恭昌

川上太輪

木本朱夏

【大 阪】

喜田准一

武本 碧

福本英子

【大 阪】

松尾和香

松原寿子

三宅保州

【大 阪】

岡 山

撰 喜子

宮本三喜夫

【大 阪】

鳥 取

稲村遊子

新家完司

【大 阪】

杉川一夫

鈴木公弘

土橋 螢

【大 阪】

鳥 根

相見柳歩

三島崧江

【大 阪】

森 茂美

小島蘭幸

桑名孝雄

【大 阪】

高 知

桑名孝雄

竹治ちかし

全日本川柳誌上大会のご案内

(平成柳多留第13集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(平成柳多留第13集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(社)全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

社団法人 全日本川柳協会
会長 今川 乱魚

課題と共選者 (各題2句・連記)

「ガソリン」	篠田 東星	——	浜本 耀子	共選
「占める」	渡辺 松風	——	植野 美津江	共選
「呼吸」	駒木 一枝	——	赤松 ますみ	共選
「地域」	長谷川 冬樹	——	鈴木 如仙	共選
「物価」	花道 歌子	——	高田 美代子	共選

第二次選者 竹本 瓢太郎 小松原 爽介
前田 咲二 佐藤 良子

参加費 2000円 (投句料・『平成柳多留』第13集代金含む)
賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞
(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞 (予定)

締切 平成21年1月31日(土)〈当日消印有効〉

発表・表彰 第33回全日本川柳札幌大会(平成21年6月)

参加方法 参加用紙(雑詠1句)と出句用紙(2通1組)に記入し、
参加費2000円(振替又は小為替)とともに下記へご
送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

振替口座 00970-9-3575

誹風柳多留一篇研究 39

伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦・山口由昭

小栗清吾

清 博 美

の討入で、吉良上野介義央の斬首。この二日を身体の一部で表現したのがミソの句といふところ。

十四日きのふもにげるまたにげる

安元松 6

さつぱりとそでうじをさせて首を取 六 13

全員 賛

286 寐たかつて懸取を待ツ能イ工面

伊吹 支払の準備は既に出来ている。掛金を早く取りに来てくれれば寝られるのに、といった至極いい身代である。

書出しをせつつきに遣る能イ工面 五 26

— 書出しは、勘定書・請求書。

山口 賛。いい身分でもあるのでしようが、今年の暮れは例年になくいい工面がついたのでしょう。

小栗 賛。山口氏補説にも。

287 にわか雨かけられるたけかけるなり

伊吹 誰でも雨に濡れるのは嫌だから、傘の持ち合わせがなかったら、目的地へ向って一目散に疾走する。

にわか雨手足を長くしてかける 一七 9

283 四ツ手駕月のみやこをさしてかけ

伊吹 四ツ手駕籠を急がせて、八月十五夜や九月十三夜の月の紋日の吉原に向う遊客。月の都とはうまい表現。

やつさいとかつら男をのせて行 一〇 34

— 桂男は、美男子。

かけ声で月宮殿へのつつける 九 29

全員 賛

284 祇王祇女田舎娘におつへされ

伊吹 太政大臣平清盛の思われ者の祇王祇女姉妹も、「遊者の習ひ、何か苦しかるべき。推参してみん」〔「平家物語」巻二〕と西八條

285 十四日きのふはどうでけふハ首

伊吹 元禄十五年十二月十三日と十四日の、本所松坂町二丁目吉良邸での景。十三日は煤掃の日で恒例の胴上げ。十四日は赤穂義士

全員 賛

に現れた加賀国出身の仏御前のため、「嵯峨の奥なる山里に、柴の庵をひき結び」(同前)となり、母娘の三人が頭を丸めて「二向専修に念仏して、後世を願ふぞあはれなる」(同)となつたいきさつを詠んだ句。おつへすは、おしへすが変化した語で、この場合は押し出す。

おし売りの芸子にぎわうぎ女おされ

一三 5

小栗 賛。どっちみち濡れるだけのこと。

288 しばられて居るがげんくわに勝たやつ

伊吹 負けた者はそこに伸びている。喧嘩の仲裁に入った人々が、もうこれ以上危害を加えないよう、勝った者をぐるぐる巻に縛ってしまふ。例句あまり適当でないけれど、子どもの喧嘩。

勝た喧嘩に託をする乳母

武一六三

増田 番所の景でしょうか。

山口 激しい喧嘩であれば場所はどこでもいい。

小栗 賛。勝った方がしばられている（戦とちがつて）のが可笑しい。

289 木のはしで無イのが海のはたを行

伊吹 木の端は、木石のように人情を理解しないもので、特に僧侶や尼をいう。だから木の端でない者は、人情を理解する僧、すなわち医者に化けた僧である。医者の姿に身をやつした芝の僧侶が、海の端にある品川遊郭に通う。

木のはしによふに品川いわぬとこ

天七1015

増田 賛。「徒然草」を敷くか。

小栗 増田氏補説賛。「徒然草」初段。「木の端」は役に立たないの意か。

290 壺文ハ取りそもないなりでふき

伊吹 歌祭文や鉢叩きなどの他の門付けとは違い虚無僧は、一文ぐらいの僅かな喜捨は受取らないような立派な服装で尺八を吹いている。

こも僧はもらわいでもの姿なり
増田 賛。粹なりの二七虚無僧の解もできるか。

五13

山口 賛。敵討ちのために虚無僧になる武士にはかなり身分の高いものもいた。

一トきりやうもある使者の来ル一月寺

明四智2

小栗 賛。同じ門付でも。

291 座敷らう大工を入れてゐてみる

伊吹 度重なる意見も聞かず遊里通いを続けるどら息子に対して、業を煮やした父親は出入の大工を呼んで座敷牢を作らせた。本当に中から抜け出すことは出来ないだろうかと、大工を牢の中に入れて扉を閉め試してみるの

である。

おもしろさ内でハ大工くわたつひし

安五松3

気の毒に大工のつもる座敷らう
今日切りの大工入らうを見てかへり

明四仁3

安四松2

全員 賛。

292 てい女ぶり今じゃ元ト直にしかねたり

伊吹 元直にしかねるは、元のとおりにしかねる（『日本国語大辞典』。亭主が亡くなった当座は誠に貞淑な若後家であったが、今では当時を偲ばせるものは何もなく、ふしだらな後家となつてしまった。

後家あまりきれいな口をき、過し一〇40
貞女とハ元トから急度知れた後家

宝七1115

此の外の事ハ随分てい女なり

宝日礼1

山口 賛。ですが、遊女などを娶った場合、あまりの貞女への変身ふりと全く逆の場合を考へてみました。字面からのみで常道からはずれた妄言。

小栗 賛。ですが、一度貞女ぶつてしまったので、今更正体も出せないといふ……常道からはずれた妄言。

共選欄

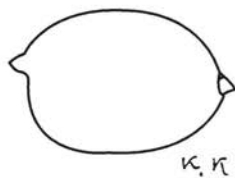
檸檬

檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 七一八句)



「許す」 高瀬霜石選

税務署は許しています酒煙草
それとなく許す言葉を探して
許された気がした夜の蜆汁
セピア色になった今なら許せそう
タコ焼を食べてる人に気を許し
二十分廊下に立つて許される
賞状の以下同文は許される
昼だけはテレビチャンネル許される
許してと言えば許してあげたのに
許してねお父さんこの紙オムツ
御破算にしても許した訳じゃない
消しゴムを捨て許す気になりました
信号機いつも許してばかりだね
鈍感力許せることが多くなる
許す気にいつかなりたい針葉樹
ウインクで通してくれた闇魔さま

唐津市	仁部	四郎
大阪狭山市	矢野	梓
米子市	政岡日枝子	
鳥取市	有沢せつ子	
愛知県	早川	遡行
唐津市	樋口	輝夫
鳥取市	土橋はるお	
松江市	津川	紫晃
堺市	柿花	和夫
鳥取県	斉尾くにこ	
河内長野市	山岡富美子	
大阪市	神夏磯典子	
海南市	小谷	小雪
吹田市	大谷	篤子
紀の川市	宇野	幹子
八尾市	田邊	浩三

「許す」 木本朱夏選

ヒロシマの辞書に時効はありません
許す気はないのに溶けてゆく氷
許したい古い聖書の塵払う
雪が降るもうどなたでも許したい
まあ一服出雲はお茶で許し合う
許せなど言えぬブライドある男
殿様はいいな許せて片が付く
許し合う夫婦も財布だけは別
信号機いつも許してばかりだね
へとへとになるまで夏に気を許す
武者震いひとつ残して許します
許されて仲間と橋を架けに行く
許されたけれど執行猶予付き
許されて罪滅ぼしの汗流す
二度までは許す定規を持つている
赤髭のカルテ半台まで許す

池田市	北出	北朗
富田林市	片岡智恵子	
神戸市	山崎	武彦
青森県	松山	芳生
安来市	原	煩悩児
大洲市	花岡	順子
堺市	大隅	克博
大阪市	原田すみ子	
海南市	小谷	小雪
西宮市	片山	忠
寝屋川市	太田とし子	
鳥取市	石谷美恵子	
堺市	村上	玄也
鳥取県	山内	芳江
大阪市	津守	柳伸
岐阜市	平野あずま	

今朝もまだ許されてないバン一枚
のりしろが減ってきたから許します
許さねばならぬ損益計算書

茶柱が許してやれと立っている

許したらわたしも共犯者にされた

許される範囲の中のメタボです

許すとは大きい息をつくことか

許すとは言わぬが顔に書いてある

許す気はないのに溶けてゆく氷

熱いので女性の裸許そうか

かんにんに弱いわたしで親ですの

二度までは許す定規を持っている

美味いもの食べさせたので許される

札束の数で許せることがある

雪が降るもうどなたでも許したい

あの角を曲がればきつと許してる

瓢箪が糸瓜になったら許します

許されて仲間と橋を架けに行く

神さまは許すが閻魔許さない

裁判員なぜか許してしまいそう

無造作に線を引くから許せない

秀句

錠を真ん中にして許し合う

謝まりに来るのに手ぶらとはなんだ

許しますもう愛してはいないから

豊中市 谷川 勇治

福岡県 林 さだき

大阪市 谷口 義

尼崎市 加川 靖鬼

堺市 矢倉 五月

和歌山市 坂部かずみ

羽曳野市 吉川 寿美

尼崎市 小池 幸子

富田林市 片岡智恵子

鳥取市 土橋 螢

三田市 北野 哲男

大阪市 津守 柳伸

豊中市 江見 見清

高知市 小川てるみ

青森県 松山 芳生

神戸市 早川 孝子

出雲市 富田 蘭水

鳥取県 石谷美恵子

枚方市 寺川 弘一

鳥取市 中村 金祥

和歌山市 喜田 准一

和歌山市 玉置 当代

四條畷市 吉岡 修

橿原市 居谷真理子

ヤブ医者め飲んでいいとはまだ言わぬ

のりしろが減ってきたから許します

死ぬ時に許してくれとは言わないよ

許されてまだ残高のある命

許されていないお呼びがかからない

許されて下火になった青い恋

茶柱が許してやれと立っている

御破算にしても許した訳じゃない

謝りに来るのに手ぶらとはなんだ

札束の数で許せることがある

二十分廊下に立って許される

許しておこうまっ白にシーツ干す

許してと妻に言えない瘦せ蛙

幸せな君が言うから許せない

許したらどんどん攻めてくる波だ

もう一度許し積み木を積み直す

神さまは許すが閻魔許さない

モノリザの笑みは男を許さない

私の辿った道だ娘を許す

許しますもう愛してはいないから

許さねばならぬ損益計算書

秀句

無造作に線を引くから許せない

ではだれが許してくれる安楽死

存分にお書き下さい火も水も

香南市 桑名 孝雄

福岡県 林 さだき

豊中市 安藤寿美子

河内長野市 針生 和代

寝屋川市 籠島 恵子

堺市 西村りつえ

尼崎市 加川 靖鬼

河内長野市 山岡富美子

四條畷市 吉岡 修

高知市 小川てるみ

唐津市 樋口 輝夫

京都市 高島 啓子

河内長野市 黒岩 靖博

鳥根県 伊藤 寿美

海南市 堂上 泰女

枚方市 海老池 洋

枚方市 寺川 弘一

和歌山市 古久保和子

出雲市 園山多賀子

橿原市 居谷真理子

大阪市 谷口 義

和歌山市 喜田 准一

唐津市 仁部 四郎

八王子市 播本 充子

舌

岩本 笑子選



てにをは舌に転がす秋夜長
 パンコンに舌打ちされてばかりいる
 荒む世は二枚の舌が要るらしい
 妻の舌借りて自立の匙加減
 一枚目の舌が活躍する選挙
 三枚目の舌は妻から借りている
 舌も歯も拉致されたまま陽が昇る
 念仏を唱える舌が人を切る
 謝罪する声大きくて舌足らず
 二枚ある舌が最近出てこない
 盃がコップになってすべる舌
 よく喋る口で時時舌を噛む
 二枚舌うまく使って生きのびる
 よそゆきの言葉つかうと舌を噛む
 時差ぼけの舌に嬉しい美味い鮎
 キッチンで格闘してる主婦の舌
 退職の日に二枚舌取り外す
 板前の舌に年季の味がある
 舌鼓裏の畑で取れた幸
 天高く庶民の舌も秋になる
 いい訳の舌が乾かぬ愚かな日
 巻き舌の会話夫のよい日和

葉子 美子 かつ子 哲男 久仁雄 芳生 岳水 半徳 日の出 蜂朗 鐘造 千代子 みね 正雄 玲子 黒兎 隆盛 悦子 充子 陽子

二枚舌使つてないと言ひ切れぬ
 君が代を歌えますかね 舌ヒアス
 災いの多くは舌が引き起こす
 薄味の舌を騙して血糖値
 支払いを暫し忘れて舌鼓
 舌鋒が冴えて自分にはね返り
 のり用の米を拒んでいる舌だ
 酔つ払い舌が一枚増えている
 回る寿司舌はまぐろをはなさない
 大匙も小匙もいらぬ舌加減
 無為徒食舌はどちらにでも転ぶ
 人間の善悪晒す舌の先
 失言じゃない本音だと思ふ舌
 毒舌の温さを知つた谷の底
 舌肥えた友はわが家に招かない
 佳
 賞味期限確かな舌の妻がいる
 かんじんな時にもつれるほくの舌
 よく光る鏡で舌を見て貰う
 舌を丸めてつらい世間を渡つて
 おにきりが舌にたのしい秋の空
 人
 抜歯して口の広さを知つた舌
 地
 おてんとさまにお見せできないほくの舌
 天
 閻魔様に抜かれた舌が生えている
 大谷篤子
 一枚の舌しか無いがまっ直ぐに
 軸

茶子 正和 小雪 愛論 キヨミ 准一 富子 巴子 一知 節子 菜摘 朝子 明子 みつこ 克治 勝視 としお 伊津志 那珂子 次根 慕情 霜石

ざわざわを静め一発大花火
 ざわめきの中を憮然と去る総理
 ふる里がざわざわしている選挙戦
 ざわざわと波紋を投げた聖火行
 温暖化氷河ざわざわ音を立て
 対岸の火事に野次馬騒ぎ立て
 湖面ざわざわ浮上した救世主
 雑踏の中にストレス置いてくる
 号外に群がる声の多重奏
 井戸端で大阪弁と沖縄弁
 ざわざわと地球くずれる音がする
 平和です寄せては返す波の音
 椅子取りにざわざわ世間落ち着かぬ
 造反に議場ざわめくサブライズ
 ざわざわと首相不在の国が揺れ
 ざわざわを束ねて新しい力
 ざわざわにまぎれてそつと席を立ち
 ざわざわと羅漢も喋る夜の闇
 ざわざわと騒ぎ余震が納まらず
 ざわざわとした都会から逃げてきた
 紅葉の樹々がハミングコンテスト
 失言にざわざわ雑魚が揺れ動く

野口 節子選



哲男 いさお 節子 泰女 あずま 雅枝 充子 葉子 政勝 日出子 昌鼓 日の出 和子 勝視 陽子 ちかし 房枝 志華子 武史 圭一郎 キヨミ 一粋

ざわざわが集中力をかき乱す

秋だなあざわざわ落葉つくりだす

雑踏の中こそ自分見えてくる

遠巻きでざわざわ騒ぐ群雀

ざわざわと夏草伸びて風に泣く

竹島の波高くなる領土権

選挙カー街も煙もざわめかす

ざわざわと冬の戸口を揺する風

ざわめきが一つになったアンコール

リゾートの波にざわざわ過疎の村

テーブルの下でざわざわする賄賂

ざわざわと子育てしてる時が華

沖繩のざわわの音が訴える

休耕田ざわざわと草が哭く

ざわざわへ一級河川動じない

ざわざわと風が種火をふくらます

自分探しの旅へと急ぐエアポート

煩惱がざわざわ寄って来る座禅

潮騒が怒涛に変わる秋の暮れ

綴帳が上がるざわざわ血が騒ぐ

八月の潮騒にある反戦歌

ざわざわが好きで落葉の中にいる

人間の森ざわざわと月宿す

天 軸

雑踏の中で拾った知恵袋

(花) 順子

(ふ) み

(安) 泰子

(岩) 和子

(花) 匠

(の) り子

幹子

慕情

寿美子

富子

茶子

(編) 洋子

古拙

典子

章子

美龍子

幸雀

照彦

霜石

岳水

浜丘

土橋 螢

クイズ

坂本 蜂朗選



あれこれクイズもどきの老い二人
ばけ防止バズルの穴を埋めている
人生のクロスワードはノーヒント
勝負をクイズで決めるなごやかさ
分らないクイズ聞かない振りしとく
タレントのもう一面を知るクイズ
人生観クイズにヒントもらつてる
難しいクイズ番組見ないふり
先ずクイズから日曜の娯楽版
ポッキリと行けるクイズがまだ解けぬ
クイズ魔の虜夜更けの目が冴える
クイズかも知れぬ地球の温暖化
オーイ孫そしてクイズが出来上り
逢い別れ愛はヒントのないクイズ
発掘で古代のクイズ解いてゆく
縮こまる脳へクイズでストレッチ
コーヒの湯気がクイズにけつまずく
むつかしいクイズが解けておーいお茶
ヨコの鍵解けずには夜は更けていく
雑学はクイズ番組から学ぶ
司会者の話術が好きで観るクイズ
懸賞のクイズ解くとき夫婦です

妻の腹クイズ解くより難しい
老いた母クイズのような話する
難問のクイズ辞典よ地図帖よ
衰えた脳を一喝するクイズ
クイズ魔の夫ロダンになりました
クイズには弱い笑顔いい男
私にはクイズに見えるメール来る
母さんのクイズが伸ばす子の知力
温暖化クイズのような空模様
ピラミッドの奥に眠っているクイズ
竹べらで古代のクイズ解く学者
クイズより難しそうなお説明書
赤ちゃんの笑顔泣き顔みなクイズ
振り返りゃクイズのような道だった
ロマンスの陰にクイズの二つ三つ

洋介
古拙
隆盛
秀四
玄也
充子
一風
藤朗
英子
茶子
宵草
ちかし
可住
美義
(安) 泰子
道子
一知
房枝
さだき
強一
キヨミ
哲男

佳
縛糸母はクイズのように解く
終焉まじか人生クイズ解きいそぐ
孫の出すクイズに悩む振りをする
脳トレのクイズで更に落ちこんだ
クイズ解くように軽目に生きている
生き方のクイズは解けず黄昏れる
解けそうで解けない平和へのクイズ
母のデスマスククイズが解けた笑み
古希も過ぎ解けぬクイズにうなされる

玲子
勝視
茂代
一花
ばっは
昌鼓
(花) 順子
大朔
晴翠
あずま
正雄
まみ子
四郎
好文
照彦
彩子
北朗
(志) 千代
(久) 千代
富子
俊子
萩野像山

初歩教室

題一黒

三宅保州

出来た句を見直す

出来た句を作りつばなしにしないで、客観的にじっくりと見直す習慣を身に付けましょう。誤字、脱字などの初歩的なミスのほかに、最低でも次の五点をチェックして下さい。

1 「題」の説明に終わっていないか。そこからの作者の思いを詠みましょう。また、「題」を読み込まない場合は、何という題かわからない句になっていませんか。

2 何々すると何々になるという原因と結果の説明だけの句になっていませんか。「ああそうですか」と言える句は、殆ど説明句、報告句になっています。

3 発想や表現が平凡な句になっていませんか。意外な発想、非凡な比喩などを心掛けましょう。

4 技巧にのみ走ったり、手垢にまみれた川柳の流行語などを乱用していませんか。技巧よりも心で作ることが肝要です。

5 ひとりよがりな句になっていませんか。

自分分は分かっているが、他人には分からない句になっていませんか。

【題が主役になっていない句】

「黒」という題なのに「白黒」とか「赤と黒」というような詠み方は「黒」が主役でなくなってしまう、単なる「字結び」的な句になってしまいます。異論もあるでしょうが、題を主役にした句が題を生かした句だと思います。

行司さん白黒早くつけてくれ

白と黒顔色見合う囲碁仲間

黒を白と言うからまたややこしい

白黒をはつきりさせる人が好き

白黒をつけたがるから住みにくい

黒白をはつきりさせて損をする

黒白をはつきりしないほうがよいことも

白黒か灰色ばかりの日本国

その昔お洒落を決めて赤と黒

黒よりも君には赤がよく似合う

黒字から赤字になって気がもめる

原黒い顔白い顔あり新学期

「黒」を主役に詠むと。

添 日焼けした顔が自慢の新学期

【添削・批評句】

原 角界に黒星つけたドーピング ちづる

説明句です。それをどう思うか詠みたい。

原 悲しいが喪服の一番似合う女 忍人

中八。女をひととしたいときは平仮名に。

原 お隣の黒猫通る時間です 清

黒猫でも三毛猫でもよい句になっています。

添 お隣の黒猫通る夜の闇

原 聞き耳をピンと立ててる黒い猫 律子

「黒い」必然性のない句になっています。

原 年金で黒字が出ずに手足出た エミ

「出す」「出た」がやや語呂合わせ的。

添 年金の家計に黒字ほど遠い

原 夏終わり今は少ない真黒な子 弥生

添 夏休み終えても焼けてない子ども

原 黒服を着ると背筋がシャーンとする 好文

普段は曲がついているという設定を強調。

添 黒服を着ると背筋が伸びる老母

原 黒ばかり流行る夏着に射す直射 冷子

添 流行の黒に容赦のない直射 雅代

原 黒髪を三つ編みにした若い頃

若い頃を強調したい。

添 黒髪を三つ編みにした青春譜

原 黒髪で今風結び服着てる ミヨノ

添 服を着き黒髪に焦点を絞りたい。

原 黒い髪なぜか茶髪に染める今 きぬ子
 添 緑なす黒髪なぜに染めるのか
 原 美しい黒を茶髪にもつたない こずえ
 下ハでリズムが損なわれています。
 添 黒髪を茶髪に染めて何とする
 原 運動部にはいつて人はほんとと呼ぶ 乃りこ
 「黒」の句とは言い切れない。
 添 日焼けした度合いも競う運動部
 原 黒い雲明日への虹がまだ描けぬ 利子
 添 明日への虹が描けない黒い雲
 原 選挙出て腹黒い人だったとは 美紗子
 添 腹黒い人を見破りたい選挙
 原 コーヒーはブラックよりもカフェオーレ
 原 決断すミルクと砂糖抜くコーヒー 美智代
 一 句とも黒を強調しませんか。 嘉彦
 添 ブラックでなくては飲んだ気がしない
 原 うたた寝で言い訳出来ぬ鍋のこげ 節子
 添 うたた寝をしすぎて又も鍋焦がす
 原 黒山に見えぬが覗く世評好き 文代
 添 覗きたくなる黒山の人だかり
 原 黒部の豪快なダムすいこまれ 綾乃
 添 豪快なダム放水に身がすくむ
 原 色重ね拳句の果は黒となり 孔一
 添 せつかくの色を重ねて黒となり
 原 モノクロで育った私青春期 靖博

添 モノクロで育った僕の青春譜
 原 黒枠に毎年撮って選んでる (河) 洋子
 添 黒枠の写真今年も撮っておく
 原 祖父父母送り喪服も底になる 志延
 説明過剰気味。
 添 幾たびの野辺の送りをした喪服
 原 古桶過ぎて黒枠の歳しかと見る さだき
 添 黒枠の享年僕とつい比べ
 原 頼つてた大黒柱細くなり 宣子
 添 頼つてた大黒柱も今は亡し
 原 黒い服準備しとけとそつと言う 亜希子
 添 黒い服ひそかに準備する末期
 原 教科に黒く塗られた跡がある 次根
 添 教科書が塗りつぶされた暗い過去
 【少し工夫すると佳くなる句】
 原 負けてない大黒様のお腹にも ヒロ
 添 大黒様のお腹に負けてないメタボ
 原 サンマ黒こげ妻の我慢が沸点に 菜摘
 「我慢」にすると広がりが出て効果的。
 原 真つ黒でもう泣き虫でない九月 幸
 添 日焼けしてもう泣き虫でない九月
 原 子沢山しかと育てた黒い汗 幹子
 添 黒い汗掻いて育てた子沢山
 原 真黒の中で手の鳴る方へ行く かずみ
 添 真つ黒な中で手の鳴る方へ行く

原 十日まで黒星あとはヤヤヤヤヤ としお
 原 何となく国産うなぎ黒く見え りえ
 【佳句】
 暗いなあ裁判官の黒い服
 先輩を立てて一局だけは黒
 黒光りだけど貴重なフライパン
 家計簿の黒が自慢の妻といふ
 去年までガンクろだった美白の娘
 大切にされてSし黒光り
 黒枠の写真はつばつ選る夜長
 トネルを抜けて自分を取り戻す
 闇夜の黒遠い昔となりました
 黒板に転校生の名が光る
 黒光りするまで拭いた長廊下
 何色にも染まらぬ黒の自負がある
 【今月の推せん句】
 喪服着て祭り話が盛り上がる 高木道子
 喪服と祭りという「二物衝突」が効果的。
 様々な色見えてくる水墨画 藤原 昭
 正に黒に勝る色なし。着想、表現共に良い。
 へそくりを足して黒字にする家計 岡本 昇
 正に一豊の妻。ほのぼのとした家庭像。
 【私の句】
 モノクロでなければならぬSしよ
 (登載洩れの方は役員が添削して返送します)
 (新年号より鈴木公弘さんと交替します)

秀句鑑賞

同人吟 西出楓楽

— 10月号から

風景

山村 暮鳥

純銀もざいく

いちめんのなのはな／いちめんのなのはな
／いちめんのなのはな／いちめんのなのはな
／いちめんのなのはな／いちめんのなのはな
／かすかなるむぎぶえ／いちめんのなのはな
(以下略)

大正初期に作られたこの詩を目にした時、
一瞬にして風景が目前に迫りました。活字
なればこそ視覚的效果です。川柳で句会吟
ではこの効果は出ませんが、以下の句を参考
に挙げて見ました。

つら解けT i P T O P T a p 珈琲館 薫風
ハワイ行きG O のランブか月が出る 薫風
女人高野石楠花浄土塔浄土 薫風

一月某日黙黙賞味松葉蟹 英比古
てのひらにわたしをつつみいとおしむ 真紀
ややゆるくなりたるははのにぎりめし 寄生木
ばらすててやるおいさらばえぬさきに 静港子
まぼろしをつかむおろかをつみかさね 伯峯
ぶらいどの所在はおなじカスミ草 美枝子

肝心なもの買い忘れ菓子を買う

浅野 房子

記憶力に自信がなくなると、メモを頼るよ
うになります。さて出掛けるとなると前日か
ら書き連ねた買い物リストを、持ったつもり
がすっかり忘れているのです。万事休す。そ
こで予定外のお菓子を買ったのは、半ばヤケ
だったかも知れないのですが、そこはかとな
いペーソスが漂います。

しょうもないテレビ芸人だけ笑い

山田 耕治

自分だけ楽しんでいるとしか思えぬ、近頃
の若手芸人の笑いのほとんどが、理解出来な
いのは歳のせいなのでしょう。けれど、人
を笑わすには自分が面白がってはいけないの
です。かつてチャーリー・チャップリン、ハ
ロルド・ロイドと共に世界の三大喜劇王と称
されたバスター・キートンは、石の顔と言わ
れ自分は絶対に笑わず万人を笑わせました。
川柳も「お笑いちょうだい」では、白ける
どころか不愉快になるばかりの駄作です。

紫外線怖くて忍者服になり

島 ひかる

紫外線は骨形成を助け、洗濯物や布団の殺
菌・殺虫をするすぐれものなのですが、太陽
のオゾン層が破壊されて以来患者扱いになり
ました。染みやソバカスや小皺の原因になり、
目にも悪影響を及ぼし皮膚癌になると聞け
ば、忍者のいでたちにならざるをえません。
黒装束に身を包み、大きなサンバイザーで顔
を隠したママチャリが来ると、ギョツとして
身構えてしまいます。

忌を重ね仏はほとけらしくなる

高島 啓子

どんな人でも死んだとたんに、仏と言われ
ます。けれど、身近な人は仏という遠い存在
になってほしくない部分があるのも正直
なところ。ところが、毎日仏壇に手を合
わせていると、故人が本当に仏だったように
思えて来るのです。「仏」と「ほとけ」を使
い分けて、深みを出しています。

へそくりは背表紙見せぬ本の中

大川 桃花

こんな重要な秘密を公表しちゃっていいの
ですか。とか何とか言って本当は裏をかいて
いるに違いありません。つまり、絶対にここ
にはありません、ってことですよ。

若者は進化しそうな指を持ち

岩崎 玲子

人間の尾椎骨は退化してなくなりました。地球上には太陽光の届かない深海にいて目の無くなった魚など、不必要なものはどんどん退化しますし、必要でよく使うところは進化します。乗り物の中でも寸暇を惜しんでメーイルやゲームをしている若者を見ると、将来は左手の親指が最も長くなるであらうと、確信します。

わたくしを辞めたい時がたまにある

森田 明子

15C、16Cのイタリアの外交官・政治家のマキャベツリはいいました。「人間は幸運な時にあつては倦怠を覚え、不遇の時には悲嘆にくれるものである」とすると、倦怠を覚えらるるたびに作者は、幸運の中にはまりこんでおいでなんでしょう。

ほっとけといわれほっとけはしない

栗田 久子

句の中から作者の優しい人柄が窺えます。マザー・テレサは「愛の反対語は無関心であること」と言っています。句の相手は不明ですが、迷惑で反抗的な口ぶりであっても、心の底では感謝しているに違いありません。自信をもって行動して下さい。

階段の手すりを意識しだしたな

矢倉 五月

生きとし生ける者に、老いは容赦なく押し寄せてきます。二段飛ばしでも上り下り出来たころもあった階段は、気がつけば無意識に手すりを探しています。私も本を見ながら階段を下りて踏み外し骨折して以来、階段は凶器と心得ています。体のほかの部分でも、はつばつ意識する老化の悲哀を婉曲な表現によって際立たせています。

孝行に囲まれ老いが加速する

高杉 千歩

殷勤無礼型の年寄りいじめがあります。それは、年寄りが何かしようとする、孝行にかしに取り上げすべてしてあげることで。そうすると身体能力と並行して、脳まで老化してしまふのです。とはいえ、歳とともに手助けなしでは暮らせないところも出てきます。作者は自立して暮らしておられますから、賢明な孝行を受けておられるようです。

食べ頃にも迷っているメロン

両川 無限

めったに上等のメロンに縁の無いものにとつて、食べ頃の判断は本当に難しいのです。切ってみて未熟だったり熟し過ぎていた悔しさは、筆舌に尽くし難いものがあります。

朝刊はスポーツ面を先ず開く

米原 雪子

せつかくの一生に一度の、今日という大切な一日です。社会面を最初に開けてはなりません。心を暗くする記事ばかりの昨今です。ところでスポーツ面が最良のチームや力士の負けを伝えていた場合は、どうすればいいのでしょうか。——そんな時は明日に期待をすればいいのです。

合掌と拍手は出来るわたしの手

北野 哲男

合掌は宇宙の森羅万象に感謝するため、拍手は世の人々を称えるために、手の持つてゐる大きな役目です。日常生活と合掌と拍手が出来る手に、これ以上望むことはありません。蛇足ですが手を叩く場合、一つは蚊を叩く時、二つは神社参拝、三つはウェ이터などを呼ぶ、四つは出雲大社の参拝、五つ以上からが拍手となります。

なるようになって自分史筆がない

吉村 久仁雄

流れのままに平凡に生きてきて、芝居のようなくらいマックスもどき底もないのは、幸せな人生と言えましょう。振り返ってみて大輪の華はなかったしろ、小さな華は暮らしの中にいっぱいあったはずだ。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 10月号から

宮尾 みのり

通行人ほどの役しかもうくれぬ

桑名孝雄

若い人が主役を張れるほどに、育つてきたということ。よろこばしい事です。通行人に徹しましょう。

鰻食べんでも土用抜けました

小林 妻 子

スーパーの鰻のコーナーで、産まれはどちらかと聞きたくて、ケースを手にした程度でした。

高麗歴見せても嫁が見つからぬ

見山 温 子

茶髪の次男は、お腹の大きい嫁さんを連れて来たのに、出来のいい長男の方がねえ。

ぬるま湯に浸りチャンスをもた逃がす

田中 すす ず

ぬるま湯で安穩としていては、打つて出る風を読むことは出来ません。

旅半ば過ぎて身軽にするリュック

吉村 幸

加速し始めた老いには、しがらみや見栄がだんだん重荷になり始めました。

売り込みの電話の主は声美人

田中 賢 治

声だけでなく、きつと美人でやさしい人と錯覚させて、さみしがり屋がついふらふらと被害に遇うのです。

辛抱も特技のうちにに入れてある

近藤 治 子

そう思わなければ。口の中で呪文を唱えてでも辛抱の歲月でした。でも時代は変わりました。若い人には一笑されそうです。

陸続きで無い島国にいる安堵

寺川 肇

だから、かろうじて九条が守れているのです。

元につく古い名刺にある孤独

赤木 妙 子

昔の役職を振りかざすのは、もう止ましよう。憐憫の情しか返ってきません。

少し間を置いてご意見申し上げ

福岡 博 利

本人が少し冷静さを取り戻して、後悔の念が頭をよぎる頃が、その時。

負けて勝つとは言うものの負けている

吉田 陽 子

北京五輪における柔道がそうなんです。日本柔道の風上に置けぬと言われた石井選手のコメダル。五輪で闘う以上、負けは負け勝ち勝ち。

回転木馬少し迷路へもぐりたい

堀 富美子

同じ所を一周するだけなのに、乗っている子は異次元へ連れて行かれそう。見ている親は、子が消えてしまいうような不思議な感覚。木馬もどこかへもぐりたいとは。

ひこばえに生きる覚悟を聞いてみる

片山 かずお

所詮ひこばえはひこばえなのです。それでも可憐な花を咲かせたり、葉を付けたりする健気さに、他人事とは思えないのです。

頼み事するでないぞと肩が言う

大前 安 子

頼まれればノーと言えない性分。また苦勞を、背負いこんでしまいました。自分がしんどい事は、他人には頼みますまい。

しきたりを私の代は変えられぬ

武島 ちよえ

苦勞もしましたが、考えようでは私を育ててくれたものの一つと思うこの頃です。

青空へ鶴彬銘石の除幕

岩 佐 ダン吉

紫と白・ピンクの鮮やかな百日紅を背に「晩をいだいて闇にある蕾」 鶴彬の銘石が忌日の9月19日、やっと姿を現しました。

除幕の一瞬「わあ、太きいなあ」「立派や」：盛大な拍手につつまれて私も胸に迫るものがありました。

ボロボロの体にされた23歳の彬が1年8ヶ月の刑期を終えて大阪城内にあった（陸軍）衛戍監獄を出て75年が過ぎました。

今この跡地にどっしり座った銘石は彬の無念を、いや二十九年の反戦「不屈の川柳」のモニュメントとして長く語られるものとなるでしょう。

大阪市の磯村隆文市長（当時）に「反戦川柳作家・鶴彬の顕彰等を求める要望書」を提出（03年）、彬の足跡を訪ねて石川・岩手の旅（03、05）、「鶴彬顕彰全国誌上川柳大会『あおぞら』を発刊（04年）、「鶴彬忌大阪川

柳大会」（06年）…あかつき川柳会の7年余は「鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会諷刺の精神を現代に生かし」（会則）の歩みでした。

澤地久枝さん、木津川計さん、（社）全日本川柳協会事務局長・本田智彦さんから5氏の全国への賛同の呼びかけを得ての鶴彬顕彰植樹・銘石建立運動の5年余。難儀を極めた用地の確保から全国数千の柳社（友）や心ある人たちへお願い、各地への宣伝と訴えの行脚、思えば「鶴彬を聞いていただけ」の心に満ちるものでした。

「森之宮」駅（JR・地下鉄）
徒歩20分豊国神社、南東



とりわけ川柳塔社の仲間の皆さんの熱いご支援は大きな力となりました。

除幕式では彬の甥の山田裕一さんの「母から伯父の話聞くことはありませんでした。長い間肩身の狭い思いもあったのでしよう…でも石川での鶴彬を讀める集い、大阪での除幕式に参加させていただき伯父は信念を持つ、勇気の人だと知って…」（要旨）挨拶は感動を呼びました。

式典には185人、記念川柳大会には287人（投句102人）の参加をいただきました。来年は鶴彬生誕100年として記念映画「鶴彬」（監督・神山征二郎）の制作も急ピッチで進んでいます。

記念講演の木津川計氏（『上方芸能』誌発行人）は最後に「来年は鶴彬生誕100年、あの時代に敢然と戦った彼のことを思えば私たちは鶴彬の十倍も二十倍もの物事ができて当たり前：」と結ばれました。

私たちが休むことなく植樹と銘石を見ていただく、鶴彬の川柳を語る、毎年9月の鶴彬忌川柳大会の開催など奮闘したいと考えています。引き続き仲間の皆さんのご指導と支援を心よりお願い申し上げます。

（あかつき川柳会幹事長）

川柳初めての

こころみ

去る九月二十八日、兵庫県立・ピッコロシアターに於て、尼崎市主催の芸術フェスティバルが開催されました。

そこで民謡やバレエなどの、舞台転換の幕間の十五分間を利用して、「川柳とギターのコラボレーション」が行われました。

コラボとは、共同／協力／競演、ということでしょうか。

当日は、ほぼ満席の約二百名程の観客が詰め掛けました。

軽快なギター曲『ディアハンターのテーマ』・『アルハンブラの思い出』・『魔笛の主題』などが流れる中、昭和を生きたれた川柳作家の代表作で、特にユーモアがあつて分かり易い句十七句と、武玉川二句の合計十九句が選ばれ、ゆつたりと朗詠されました。

女性が読んだ方が好いと思われる句は、長浜美籠さん（尼崎川柳協会・会長）が、男性が読んだ方がより効果的、と思われる句を山田耕治さん（同川柳協会）によって、朗詠さ

れました。

ギターの調べにのせて、現在も読み継がれ愛されている名句を女声・男声の掛け合いで朗詠された会場は、笑い声の聞こえる和気あいあいとした雰囲気、観客の心を掴んだように思います。

当日、朗詠された句は

『ディアハンターのテーマ』ギター曲

それ見なはれ癒でなかつた祝い酒 中島生々庵



長浜美籠さん・山田耕治さんとギター奏者

立ち話長うて犬も坐り換え

橋高 薫風

みどり子の欠伸の口の美しさ

武玉川

背くらべ手は和らかにさげている

武玉川

飲んで欲しややめても欲しい酒をつぎ

麻生 霞乃

『アルハンブラの思い出』ギター曲

酔っているからとあしたにする話

岸本 水府

あの晩の風邪よと女うれしそ

西尾 葉

よく聞いた話でんなど取り合わず

黒川 紫香

話し合えば女に負けること多し

梶元 紋太

腕時計見い見い仏説阿弥陀經

須崎 豆秋

そんな女みな近松の絵空こと

小田 夢路

命まで賭けた女でこれかいな

松江 梅里

『魔笛の主題』ギター曲

法善寺一皮むけてめぐり合い

桑原 狂雨

邪魔ですかしらと紅一点がくる

西尾 葉

赤ちゃんが欲しい男をきよつとさせ

林 ふじを

春雨へ女房と濡れるあほらしさ

川村 好郎

何の薬ですか長生きのくすりです

柴田 午郎

自販機が数えるように釣りをくれ

土居 耕花

もう未練ないが糸屑とつてやり

麻生 路郎

（幕）

以上の十九句が披露されましたが、「川柳とギターによる新しい挑戦」は、皆さんに面白いテーマを提供した、ことと思います。

（加川 靖鬼記）

京都塔の会 第60回吟行 城南宮句会

日 時 11月25日(火) 午前10時40分集合
場 所 地下鉄・近鉄 竹田駅西口
行 程 タクシーで城南宮へ参拝後神苑散策
昼 食 12時 境内 斎館(句会場共椅子席)
句 会 1時から
兼 題 「各題3句」
「当日雑感」「ひっそり」
「易い」「余程」

解 散 4時ごろ予定
会 費 3,500円(当日いただきます)
締 切 11月20日
申 込 申込票にて 都倉求芽 まで
〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松
原下る弁財天町328-202
◎城南宮 京都市伏見区中島鳥羽離宮町7
電話 075-623-0846
地下鉄・近鉄で竹田駅
マイカー 名神高速 京都南IC南100M
国道一号東側 境内 無料P有り

第27回 鳥取県没句川柳供養大会

施主挨拶 両川洋々 祝 辞 鈴木公弘
弔 辞 川柳ふうもん吟社 読 終 藤木大善
田中かをる 親族代表焼香 各川柳会会長
焼 香 参加者全員(参加者は数珠を持参)
日 時 12月14日(日) 午前9時受付・開場
場 所 全労済ビル 五階大ホール
J R 鳥取駅南(駅裏) 徒歩一分
参加費 精進落しの宴 4,500円(昼食・懇
親会 作品集呈)

川柳大会のみ参加 2,500円(昼食・作品集呈)
兼 題 「各題2句」締切り「11時厳守」

「敗者復活吟」 両川 洋々 選
「千の風」 兼行 幸枝 選
「遺言」 北川 拓治 選
「逆ギレ」 小林 妻子 選
「空回り」 鈴木 公弘 選
「学歴」 新家 完司 選
「ロスタイム」 春木 圭一郎選
「縄張り」 盛田 夢路 選

表 彰 総合10位迄(出席者優先・1句1点方式)
欠席投句 1,000円 12月10日締め(切手可、作品集呈)
投句先 〒680-0824 鳥取市行徳2-632
田中かをる 宛て
主催 川柳ふうもん吟社 後援 鳥取県川柳作家連盟

『川柳・明日香』

創刊14周年記念全国誌上大会ご案内

課題と選者(5人共選)

熊谷岳朗(いわて紫波・岩手)
小林宥子(札幌川柳社・北海道)
「深い」桂 文生(落語家・東京)
渡辺貞雄(時事作家協会・神奈川)
三宅保州(川柳塔社・和歌山)

2句詠(表現自由) 用紙自由(清記)

参加費 1000円(発表誌呈)

締 切 21年1月31日(消印有効)

賞 合点10位まで呈賞(同点到着順)

発 表 『川柳明日香』4月号

投句先 〒369-1102 埼玉県深谷市

瀬山21-9 てじま方

明日香川柳社

ふれあいの祭典 兵庫県川柳祭in明石

日 時 12月7日(10時30分～16時30分)
場 所 明石市立市民会館(アワーズホール)
明石市中崎1-3-1

TEL 078-912-1234

開 会 午後0時00分 アトラクション
事前投句入選発表と講評当日投句
入選発表

当日投句(各題2句 欠席投句拝辞 11時
30分締切)

「鯛」 黒嶋 海童 選
「時」 矢沢 和女 選
「橋」 廣嶋 英子 選
「夢」 平山 繁夫 選
「おだやか」 赤井 花城 選

出句料 1000円

賞 文部科学大臣賞ほか多数

主 催 兵庫県芸術文化協会・兵庫県川柳協会
ふあうすと川柳社・時の川柳社他

みづのたま

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔なら

坊農

柳弘報

みやげ大きすぎ催促切り出せず
お供えに蟻もよろこぶ盆ダンゴ
煩惱を忘れなさいと遠花火
線香花火君はどうしているかしら
遠花火別れ話が進まない
思慕一つ胸に抱いてる遠花火
送り火に亡き人偲ぶ遠花火
堅物で泳ぎ一つもできもせず
混むからと盆を外した花手桶
花火師の気迫夜空のショータム
催促に行つて同情置いて来た
手花火に亡母の面影だいてる
勝つために一人じゃ着られない水着
もうちよつと泳いでおれと仏から
水割りの底で泳いだ嘘一つ
菜の花の海を泳いで逢いに行く
何となく生きて人生立ち泳ぎ

千梢 博一 隆子 孝子 秋泉 勝弘 弘風 ふりこ 寿美 道子 真理子 修 洋子 富子 恵美子

おねだりか催促なのか妻の笑み
久しぶり泳いでみせるおじいちゃん
鈍感な男へとうとう出すサイン
花火師の汗大輪の華になる
遠花火観るペランダの老い二人
鳥の巣に五輪の花火打ち上げる
盆踊り輪から抜け出て今夫婦
催促を重ねて思案の膝を抱く
つつましくせんこ花火を生きのびる
あの世から盆にや帰ると言うメール
仕掛け花火鳥を一つにして燃える
核心に迫つたらしい目が泳ぐ
初盆に母の座布団だけがある

ローズ川柳会

山崎

君子報

若い医師に気永に待てと諭される
よちよちの四頭身に癒される
飯めしと待たれた頃は若かった
メタセコイア遠い人待つ風ばかり
明日からは元氣を出そと爪を切る
君が代をうれしく聞いたオリンピック
あと暫しこじやれに生きるつもりです
絵手紙に花火美し友便り

川柳塔のぞみ

播本

充子報

取り敢えずつまみにもなる粟おこし

柳弘 笛生 理恵 秋雄 一風 隆盛 恭昌 比呂志 成子 朝子 和夫 國治 ダン吉 哲子 藍 トシエ 貴代子 義子 君子

児に土産お菓子だけでは喜ばず
洋菓子も和菓子も好きで瘦せられぬ
シナリオは飢餓の国への菓子を盛る
ふと見ると妻のホクロが熟れている
煎餅の総理の顔が愚痴っぽい
菓子折りへ二枚目の舌添えて出す
お持たせの菓子で話がまた弾み
太る元分かつて菓子を止められず
飢えていた記憶にチョコが欲しかった
残暑にも粋なネクタイ外さない
取り敢えず和菓子で義母の機嫌とる
坊さんがペンツで経をあげに来た
目立つ子に育つて欲しい欲しくない
ライバルに少々目立つ花贈る
シミと皺目立つ顔だがいとおしい
恋は始まり楽楽と薄を跳ぶ
マスコミの露出当落左右する
クール便ずんだの青は母の汗
黒一点父にここの参観日
粗糲ですと見栄を詰め込みそつと出す
百マスのドリルで孫に勝つてみせ
大福を横目で睨む血糖値
楽楽と稼ぐ話に陥し穴
ドロップを孫にバチンコから帰る
目立ちたいだけの遅刻と皆知り
美しい人の黒子がよく目立つ

勝 あやめ 仙影 重信 三十一 周平 溪舟 宣子 桃葉 清 洋子 修 雅城 あきひこ 孝子 啓子 明夫 乃りこ 泰昌 那珂子 方子 つよし 敏 和子 千代 善信

凡人も晴耕雨読描いている

和歌山三幸川柳会 武本

天気予報聞けば答えは猫が出す
答出す時は終っているまつり
悩んで悩んで柩の中にある答
大空へもう離陸する子の答え
びっしょりと閉じた扉に出た答
生き方の答出してゐる父の汗
蹟いた石から答え教えられ
欠点も見せて仲間にしてもらう
見え過ぎる眼を持っていて孤独
後ろから見つめる母が居る強み
ありがとうと笑顔を見せる百日紅
原油高騰きつと地獄を見るだろう
点滴の雫に命垣間見る
お見事だ俺より先に逝つた妻
好奇心あるうちボケぬ保証済
矢面に立つて力量試される
微力だが積んで程よい花も咲き
幕降ろす力少うし残しとく
子育てで力かげんと塩加減
太陽の魔力に四季の詩がある
本当の生命力が草にある
瞬発力生かし火の輪をくぐらんか
実力がないからベン牝で勝負

充子

碧報

かず子

義雄

夕胡

碧

幹子

起世子

純子

美籠

愿

柳昌

美花

朱夏

イセ

昇

瑛子

菜摘

通信簿努力したねと備考欄

にせものに免疫力のついた舌

骨粗症です力いっぱい抱かないで

筆庄のことで言いたいことがある

エネルギー秘めて女は活火山

旬のものを食べて力を貯える

ババの負け入道雲の力こぶ

竹原川柳会

古田

太虚報

阿波おどり揃いの浴衣名調子

着古した浴衣オシメにして育て

車椅子祭りへ浴衣連れていく

浴衣着た少女の頃の赤い帯

しゃきつと浴衣心もしゃきつとします

花火見る浴衣よこれぞ日本だね

卓袱台が万歳をした銀シャリだ

感謝感謝年金で餅米買える

准一

町子

保州

和子

俣子

桂香

章子

汎美

房子

笹舟

貞子

比呂子

一路

輝恵

栄恵

慶幸

蘭幸

敬子

佳句地十選 (10月号から)

白根ふみ

年寄を厄介者にする政治

子育ては楽しかったよさくらんぼ

昼行灯と言われることも策のうち

花の名を教えてくれた山男

天使にも夜叉にもなっている介護

言い訳の下手な男を好きになる

釣り竿の先にわくわく下げておく

狭いねえお相撲さんの仕事場は

ふるりの港は知らぬ人ばかり

旧姓でわたしを呼びに来た蜚

竹灯籠火の神様が出てきそう

打ち上げた花火が星になりました

グリーンシャワー身も心も洗う寺

いのち命掌に乗るいのちのち

夾竹桃小さないのちまた拾う

今日一日自分のまんま生きてみる

千代美

弘子

栄香

あゆみ

厚子

太虚

史子

千枝

秀夫

光枝

愛論報

東大阪市川柳同好会

森下

振り込んだお金が見事消えている

憎まれ口叩き夫は淋しがり

光枝

秀夫

光枝

スーッ着て腰も低いという手口
味噌汁に残り野菜が生きている
スーッは嫁味噌汁ならば姑の役
先代のスーッを守るラーメン屋
メタルより無事の帰国を請う北京
鍵穴を覗けばそこは大宇宙
追憶のページに覗くおさげ髪
地球儀を覗くあちこち核の影
申し訳程度に覗く視察団
なんやろか覗きたくなる穴がある
一線を守って堅い話する
目線少し下げて不況の風を切る
ざりざりの線で揺れてる善と悪

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

川霧の橋を渡って夜勤あけ
気が付けばわが分身の独り言
献身がたぐり寄せてる赤い糸
雨の音聞こえずバラが濡れている
飲みたくてベタベタついてまわる友
水油ベタベタ押え寝ぐせ髪
ふたありの記念日すぎてから気付く
もくもくと私に尽くす洗濯機
霧の中に秘密を一つ置いて来た
改革の痛みにやつと気がついた
気付くまで耐えて待つのも思いやり

ばつは 克己 シマ子 和代 一志 柳弘 美弥子 ダン吉 敏子 朝子 湖風 雅文 愛論 美ツ千 信 尚子 和子 美知江 京子 天人 龍枝 克枝 ひかり 芳江

献身は妻の役目と思う夫
オスゆえに子孫繁栄カマキリよ
気付いても見知らぬふりをするカラス
気付いたら殺し文句に嵌ってる
ベタベタと泥脚で来た回覧板
ベタベタと巻きついてくる値上げ論
花の香の誘いに気付かない男
気がつくと立派な後期高齢者
気付いてはいいるが根つから医者嫌い
ボランテニアの献身おどす自爆テロ
王様が裸に気付く日暮れどき
霧晴れたところに夏が落ちてくる
よくみればトマトも桃も毛むくじやら
霧の中これから白になるところ

松露川柳会

小西 雄々報

都会では何故かみんなが急ぎ足
急ぐのはもう沢山とマイペース
つまみ食い急ぎ呑み込み喉つかえ
緩急の流れにまかせ生き延びる
石段へ老いたと思う杖頼り
俄雨に油断はできぬ昼寝時
髪形を変えて油断をさせようか
急いでも貧乏神が動かない
油断から失敗ばかり繰り返さず
油断して苗が枯れだす炎天下

幸恵 雄人 あづま 玲子 睦子 きみ子 照彦 和枝 節子 重忠 ひろこ 螢 石花菜 宣子 美枝子 香音 澄江 敦子 裕 公美枝 鈴枝 信雄 弘子 久子

病氣だと知らず自信へ油断した
振り込めが悲劇もたらす世を嘆く
油断して階段ひとつ間違える
ライバルの賛辞に油断してしまふ
岸和田川柳会 土橋 房枝報
おぼろ豆腐一人でひとつつく老い
菌が無くて何より馳走冷奴
夏はなあやっぱりうまい冷奴
旨くないスプーンで食べる冷奴
トラ勝った負けたさておき冷奴
ボチマでが味を覚えた冷奴
ギブミーと戦後の援助チョコとガム
まるい風吹かす夫の家事援助
愛猫に精神面で助けられ
明日信じ黙って腰をかじられる
炎天に花の悲鳴を消す豪雨
聞かせるねつばを押えた話しぶり
抑えても吹き出す涙金メダル
先方ヘカロー！ オフのお中元
柳仲間かたい話は抜いて句話
あの人にたのんでおけば大丈夫
幾山河かたい絆で越えて来た
一徹を通して世間を狭く生き
第一ボタンはずしたことのない人だ
口の堅いいつもストレス溜めている

智恵子 和代 静江 雄々 美花 幸子 浅子 昭 蛙城 守 洋 柳昌 珠昭 仁緑 淳風 寿海 義泰 笑司 和美 ゆい 香代 すみえ ダン吉

大学の教授も漫画読み耽る

グッパイは言えず主待つ忘れ傘
喫煙とグッパイしてよネエあなた
パイパイが最初に出来たもみじの手
釣り上げた魚尾を振りグッドバイ
嫁さんとグッバイしたい時がある

川柳ふうもん吟社

夏目 一稔報

過去帳の過去をほじくつてはならぬ
運命を自分で変えていくガッツ
感性を引き出す絵の具といっている
一瞬で人もぐちゃぐちゃ秋葉原
お釈迦様やさしい顔で民もすむ
掃除機が皆んな追い出す日曜日
リストラへ夫のガッツを信じてる
ぐちゃぐちゃで押入れに入れ不意の客
ぐちゃぐちゃの玄關しつけ見えてくる
諭吉様ぐちゃぐちゃになり世を渡る
世の波にもすまれ今日も生きてゆく
傷口をうまくもすんで黙らせる
過去帳をのこして空に風と消え
何かにともずんで役を押し付ける
ぐちゃぐちゃになって喜ぶ初の孫
もすむには何といつても諭吉でしょ
グチャグチャな人生風が向きを変え
ピエロの面なじんで素顔見失う

東吉 力子 弘子 房枝 岩夫 清 洋々 無限 一瑠 稔 金祥 妻子女 美恵子 美雪 圭一郎 虎尾 一京 春名 菊香 節子 喜美子 志げ緒 行男 かをる

我に勝て師の一言がガッツ生む
ガッツでは負けぬが頭ついて来ぬ
過去帳に反逆の血が流れてる
天国へ行けるつもりの人ばかり
鯛釣った腕を叩いているガッツ
酒のんでぐちゃぐちゃ言つとすくなる
負け将棋盤ぐちゃぐちゃに小さな手
ぐちゃぐちゃの夫婦が悟り開いた日
地獄からガッツガッツで這い上がる
痛だつて負けないガッツもつて生き
ぐちゃぐちゃとガム噛みながらホームラン
過去帳の未来ひたすら継いでいる

川柳くだの会

岸本 宏章報

低い腰でもいい人とかぎらない
もう少し死にたくないと言ふ
老いの身に北風ばかり吹きかかる
ここだけのなした低い声で言う
火花火の匂いを服に子が帰る
もう嫁も老眼鏡を掛ける歳
風下で仕掛け火花は煙だけ
葬儀屋の司会に向いた低い声
田圃はもう秋ですか赤トンボ
頭下げ高飛車な風やりすこす

川柳塔おつばこ吟社

川崎ひかり報

玉碎の鳥語り継ぐ生き字引

孝男 昌鼓 穀 清帆 蟹郎 菖子 喜子 善夫 由美子 茂登子 夢路 一稔 仁子 紀子 邦昭 宏章 せつ子 清帆 玲子 孝子 富貴子 大鯨 八重子

橋架けて人の情が消える島
また一ツ島に新たな灯が点もる
郷里自慢ランプロファイアー及千島
海賊の島観光の賑やかさ
盆帰りの過疎の島にま活気つく
島国で忘れかけてる碧い海
島の子が父母を待ってる防波堤

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

社保庁に俺の値段を決められた
ゴミ出しの役目はエコと手をつなぎ
あつ狸走つて来ます日景の宿
子の残す日々の走りに磨きかけ
デザインが好きとひたすら札をみる
まだ走る余力あります会えるなら
返信がとてやさしい貌にする
風切つて走つた若さ懐かしい
飼ひ猫は僕の役目を知っている
老舗には老舗の値段もつ矜持
ため息を隠す目玉にある憂い
終身保険これが私の値段です
横綱の役目を果たす心技体
人の輪をつなぐ接着剤になる
海山の恩に値段はつけられぬ
種馬の役目を終えた哀れな目
人の背に人は値段をつけたがる

賢 はつ恵 弘 放任 よしみ いさむ ひかり 龍人 きよし 夕香 柳子 芳生 和香子 あすなろ 美鈴 一呑 順風 銀波 ふさふ 雅城 岳水 慕情 一花 弥

コロケの匂う自転車で走る

五楽庵

川柳塔唐津

仁部

四郎報

風の夜に疾ると怖い赤い馬

高明

箸ですむ献立メタボ知りません

四郎

満たされぬ思いがつのる平和国

蜂朗

映えてゆく千変万化朝の雲

實

同じことまた喋つてる古稀の会

輝夫

八十路来て歯車合わぬ老夫婦

晴翠

西宮北口川柳会

黒田

能子報

風除けで良ければここに僕が居る

直

コスモスと私も揺れる風の中

歳子

この風と見込んだ風がもう吹かぬ

千代

手探りで明日のいのちへ喝入れる

わこ

祈りとやいのち吹きこむ千羽鶴

鹿太

志半ばああアフガンに散る命

正和

医者通い過信しすぎた我が命

江美

暮れそむるいのち短し蟬の声

宏一

調べものするのに眼鏡見当らず

萬的

うとうとと母の調べの子守歌

順子

虫の音の調べに月と遠まわり

キヨミ

調べると不都合が出るエネルギー

奮水

調べても隙をくぐっている余罪

嘉代子

特売日調べて走る火の車

美代子

調べると皆親戚と言う先祖

富喜子

上から胃下から腸を覗かれる

哲男

フリーでも後期という名に縛られる

いたる

後任がなくて主婦の座下りられぬ

哲子

天辺の椅子はいつでも揺れている

美津子

一夏を妻よりビール愛したり

比ろ志

崖つぶちで自由を遊ぶまいが

晴美

鉛筆の先で小さな幸拾う

忠

リサーチを重ねてやつと自信つく

紀乃

自画像になんと髪の毛多いこと

二英

子に送る荷物を作る手が軽い

多喜子

笑うてましょ老いてすますも愛想ない

弘子

サワガニが卵を抱いて母の顔

りこ

自由行動手真似でバリがいと楽し

光久

命懸けだった愛にもある別れ

折杭

ひたひたと母の温みに秋を知る

求芽

ほたる川柳同好会

水野

ふしくれた大きな手だが宝物

黒兎報

くねくねと進んで戻る拉致調査

美智代

芸も枯れ国宝の顔皺多し

祥風

揉めるのが嫌でくねくね逃げるだけ

宇乃子

気配りを熱いおしほり伝えている

見清

赤とんぼ秋を配っている安堵

雪子

子は宝しかし産科医足りぬまま

桂子

荒家も私にとっては宝です

黒兎

パラリンピックみなに配ろう金メダル

禮子

勇治

人脈はあるが紹介やめておく

信男

花になり喜ばれた配り物

契子

断層の上でもしにも触れず住む

春代

阿波踊り男衆の腰懸せられる

肋骨

新聞が定時に来ない心配性

柳童

さりげない気配り老いの目が潤む

幹治

配られる号外金の字がおどる

久子

お宝に執着せぬと執着し

勝

高知川柳社

小川てるみ報

新聞よもつと叩けと原油高

三千世

三面を読んで吐息をつく湯呑み

三郎

朝刊の音から今日が動き出す

てるみ

地方紙で包みふる里子に送る

京子

平凡という大切なものを抱いている

健

大切にしたい地球を青く塗る

和広

かけがえの無い大切なこの命

典雄

あしたへと踏み出す大切な一歩

幸子

大切なあなたへ今日もめざし焼く

千鳥

大切に守り貫きたいこの自然

和江

落書きで世界の宝まで汚す

暖

顔ぶれで幹事泣かせの座席順

正躬

譲られた座席素直にありがとう

紀美子

カーネーション母の座席が映えてくる

初江

食べる書くたった一つの我が座席

千鶴

空いていると思えばみんな予約席

みどり

居心地の悪い座席が背が痛い
この道を迷わず行くと決めた朝
進 栄美子

川柳花の輪

妻谷

重風報

茶柱に望みをかけて買うジャンボ

薫

身の丈に合った望みで頑張れる

善 栄

回復の気配ビールが欲しくなる

克 衛

空模様水を撒こうかやめとこか

やすの

はんやりとゲームセットを聞く昼寝

重 風

白黒をつげずグレーが好きになる

音 成

耳よりな話をはんやり聞き逃がす

泰 子

京都塔の会

都倉

求昇報

じいちゃんの得意な芸は草の笛

鹿 太

省エネで言葉数まで減る我が家

ますお

愛想いいおたべ人形ついつ

ふりこ

紫外線こばみ日暮れへ万歩計

知 栄

母子手帳に日光浴が省かれる

満 子

わが娘いつの間にやらEカップ

綾 子

母の味こもり盛ったごもく飯

庸 佑

記録に挑むこもりとした力瘤

萬 的

幸せをこもり盛ったお漬物

とし子

自分史にこもり嘘が盛ってある

克 治

こもりとお子様ランチ旗を立て

高 栄

こもりと緑で囲う露天風呂

宏 子

初盆の鬼灯せて山盛りに

篤 子

こもりの古墳がロマン語りだす

美 義

こもりの森妖精に会いに行く

輝 美

帰る家あるんだがなと青テント

福 子

口喧嘩 妻も忘れたふりでいる

牛 延

原点に帰るハンドルきつている

葉 子

巣に帰る鴉を誰も憎まない

求 芽

酔酔する糠床からも姑の意地

昌 乃

執念でまだ考えているロダン

石 舟

リハビリへおもしろくない日が続く

典 子

一心で縁を赤い糸にする

肇

執念で通した意見自縛なる

文 代

焼酎は薩摩の芋と決めている

孝 一

跳ねて落つそれでも鮭の産む卵

則 彦

来て欲しいその一念で人を待つ

かずお

執念を捨てれば世間が見えてくる

弘 之

生き霊となる執念の女偏

啓 子

川柳若葉の会

生嶋ますみ報

置いて小石の故にする勝手

シマ子

少しずつ移されはずれて行くこわさ

あずき

まつり唄川面をよぎる秋の風

弘 直

表彰状過去が時々光り出す

能 子

心経の教えに何時も添い兼ねる

喜美子

便利すぎしつべ返しに泣く地球

香 住

計画をひとり勝手に決めないで

慶 子

意に反し勝手に伸びる生命線

烈

過ぎたこと忘れて今日もゆるゆるり

加津子

勝手口事情ありそう覗かない

ますみ

川柳クラブわたの花

西川

義明報

暑さ未だ居座ったまま秋になる

ミツ子

早起きが知る朝顔の美しさ

宏 至

来し方を鬼も仏も同居する

幸 枝

でたらめな妻の地図見て道迷い

莊 司

シルクロード探すロマンの夢の跡

美 是

雨続き旅の約束流れゆく

克 美

言い過ぎて寝返りばかり夜白む

いつふみ

テンカ粉アセモの昭和懐かしい

義 明

半世紀前の大志を今も抱く

宏

北京五輪勝つも負けるも平和です

正 春

デスマスク今にも笑いそうな母

欣 子

祭の最中シルクロードがきな臭い

妙 子

予告なく病のパンチ受けている

俊 子

赤ちゃんは母の言葉で人になる

晴 美

二人目の孫を積木が待っている

浩 三

無関心砂漠と同じ都会びと

孝 子

根性をたたきなおせ歳となり

和 子

たまさかに来るから嬉し孫の守り

八寿子

さるすべり暑さ臆せず怪気炎

ふりこ

血圧も一緒にあがる物価高

ますみ

まっすぐに歩むと邪魔をする風雨

はじめ

肩書の消えた名刺が経過する

たえ子

美代子

— 110 —

あとがきに人柄そつと匂い立つ
あとがきに支えてくれた名を列ね
跋文に著者の素顔が滲み出る
熟女です桃でいうなら完熟に
中年もはな垂れ小僧長寿国
中年を支える虎の屋台骨
中年の恋は眼鏡を買い換える
中年にだんだん重い朝の靴
嘘しませて中年突走
ゆうゆうと立ち去る敵に奮い立つ
建て前はひたすら夫唱婦随です
メール交換ただひたすらに指が鳴る
減量へひたすら歩く万歩計
透明になるまで書いている写経
今回も無名選手がメダル取る
戸籍取り見知らぬ姉が載っていた
深夜バス私と違うわたし乗る
湧き水にマネープランを聞いてみる
太陽を掴みそこねたサブライズ
司法試験ひたすら六法叩き込む
冗長なあとがき余韻消している
あとがきに滲み出してるお人柄

川柳塔きやらぼく

大塚

恵子報

柳弘 憲太郎 祥昭 弘子 直子 柳伸 志華子 あや子 更紗 和雄 なぎさ 弘風 栄子 勝弘 郁夫 ばっは 弘泰 雅文 克己 東吉 章久 瑞枝 紫泉 夢

瞑想の中に居る小悪魔よ
一日を休んだ穴が埋まらない
雨降って紫陽花ロード七変化
狭い庭白いあやめがしおらしい
だるまの如く心機一転起き上る
新緑のぶな林でくつろぎ歩
ライトブルー山あじさいが岩かげに
来る客をチェリーセージがお出迎え
男子誕生うれしい笑顔包まれて
あなたのズボン今かあさんがはいている
うまい鯛やき行列にいる糖尿病
平穩にすぎる日々にはただ感謝
損になる話忘れたふりをする
髪を切りわたしを放つ空の青
飛行雲まつすぐ夢に伸びてゆく
メールよりハガキじっくり読みたいな
あちこちの大地へ耳を傾けよう
水筒の水も一会の旅の音

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

亜弥 春枝 清子 雪江 初枝 すみえ 章江 晴子 那珂子 蘭 寿々子 玲子 なみ てい子 ゆき 恵子 日枝子 千代

さざ波に初恋のせて花筏
絶え間なく打ち寄せる波黄昏れる
周波数合わぬと知った定年後
人間の驕りを囓う大津波
慎重に拭かにヤメツキが剥げまっせ
元氣だよと朝一番に拭く鏡
ティーカップ口紅のあとそつと拭く
お身拭い阿弥陀如来も光りまし
やり遂げてやつと流れる汗を拭く
落書きがおもしろすぎて拭き残す
床柱拭いて嬉しい客を待つ
むくむくと白い入道雲がでる
カンの子虫むくむく起きる売り言葉
むくむくと太った赤児笑顔良し
むくむくと肥らせるわけ知らぬ豚
自慢の子にむくむく伸びる妻の鼻
豊中もくせい川柳会 江見 見清報

ヨシ枝 猿沓 久仁子 みつこ 一屯 りつえ 真一 恵子 いさお 喜久子 庸佑 保江 一知 ちづる 泰子 遠野 タミ 巴子 郁子 啓生 石舟 庸佑 満寿巳 則彦 夢

口だけは助けたいと言っておく
 SOS 孫がこっそり言うてくる
 わらべ唄結んで聞いて母思ふ
 朝刊がひんやり秋が駆けて来る
 長生きを感じずる日と愚痴の日と
 髭剃らず亭主七日も家に居り
 夢の中では反省をしています
 反省を忘れた親が子を叱る
 言うことは変るがどれもみな本音
 奥の手は勝負所においてある
 身構えてみても下絵も描けぬまま
 夢の中では反省をしています
 目をつぶりテレビ聞いている長い夜
 結ばれて良かったのかふと考える
 草の葉に結んだ露に映るヒゲ
 下心あつてついついする長居
 長い髪切つて未練はすてました
 長生きをすると肩身の狭い国
 助かった自分を責めて生きている
 眼の反乱もう実像を結はない
 助けようと穴を大きくしてしまふ

川柳塔鹿野みか月 土橋

寿美子 勇治 都代子 十八娘 千代 見清 早人 美義 求芽 寅次郎 隆 早人 宇乃子 玲子 肋骨 萬的 美智代 尚士 玄也 佳恵 葉子 螢報 彩子 諷人 みどり

リモコンで台風そらせ気象庁
 瓦よりレンガが好きとウラン残土
 おもかげのままに育っている男子
 美人の姉に母のおもかげだぶらせる
 政治家の空論机うとましい
 家を継ぐ重さを知らぬ三代目
 線香の渦くゆらせて殺す虫
 秀吟の渦巻く中で初呼名
 不景気で貧乏神が渦を巻く
 渦潮をじつと見つめりや美しい
 渦巻いて実つた稲を刈つている
 現世の渦中であつた人柱
 歎きの渦涙も混じる金メダル
 渦巻の線香を上げて畑に行く
 やつかいな渦ならそつとしておこう
 茶筌さわさわ渦巻いている緑
 三猿を守り渦中を避けていく
 少し欠けた瓦だけれど役はある
 年金の暮しへ瓦欠けてきた
 鬼瓦こ一番を試される
 鬼瓦猛暑続きで狂いそう
 翔んでいる若さジンスクにしない
 てっぺんの瓦一番おとなしい
 境界に古い瓦が埋めてある

尼崎尾川柳会

田原 宏一報

弘子 公子 和子 節子 幸枝 睦子 汲香 実満 武彦 房子 宣子 惣子 久枝 永子 茶子 しみ子 みさ子 満 露子 くに子 盛桜 螢 宏一

亡夫と見た昔おもわす月の色
 月見れば過ぎし想いのセレナーデ
 目も指も細め三日月見たはなし
 孫が来て母に言うなと目でサイン
 まだ早い何しに來たと吠える古希
 カナブンと飽きずに遊ぶ幼な顔
 失敗を重ねるたびに知恵がわく
 またかないな坊ちゃん総理途中下車
 客観的に違ふんですよあなたとは
 満月が目を皿にする甲子園
 月を背に母ちゃんバートから帰る
 小袋に幸せ詰めて行く家族
 野仏を道連れにする通り雨
 仏壇へ窓の満月見せてあげ
 月の裏見せてくれぬないデスマスク
 読めぬせぬサインを飾り店目慢
 泣く芝居見せて上手に切り抜ける
 尾鰭つけ噂重ねて路地を翔け
 見て欲しい素振り揺れる秋桜
 駐車場猫の恋にも月がさし
 満月を温泉宿の下駄が追い
 はんやりと昨日を思う昼の月
 薄物を届けましようか昼の月
 運鈍根重なり合うと灯が点る
 辛口に生きて背中がちと寂し
 亀の子が旅立つ浜の月あかり

江美 孝子 イサミ 崎子 野薫 よし子 雪菜 亀子 義芳 勝巳 鹿太 よしひさ 孝一 美代子 靖鬼 五月 里江 正治 かずお 耕治 朋月 紀乃 昭三 比ろ志 美義 哲男

重なつた行事へ返事秤つてる
手のひらを重ねて勇気くれた人
月おほる胸の思いをやわらげる

城北川柳会

伊達 郁夫報

一票でどんなドンでも変えられる
大物は開き直りはしないもの
豆力士横綱の夢見て励む
夢一つとび込み無力はたと知り
このトマトフルーツですか野菜です

失敗と悟ればゼロにUターン
東山こんもり黒く熱帯夜
吊り橋で五十年振り腕を組む
一直線ひなどりかばいガンがとぶ
だんだんと似る生き様は父譲り
ひと夏を咲き朝顔の宴終る
沸点はあの時だった恋終る
言い訳をしない男がでかく見え
リハビリで豆と希望をつまむ箸
政界の再編マグマ動き出し
未知数をいっぱい詰めたゼロ歳児
言いたいこと半分にして夫婦仲
すぐボロを出すからきつといい人だ
指の豆つぶし勝ち得た金メダル
つまずいて自分の愚かさ気付く
山彦と交す言葉は本音です

求 茅
政 江
美 籠
一 歩
勝 弘
ルイ子
美智子
昭 子
ひさ乃
求 芽
弘 風
桂 作
章 久
倫 子
修
昭
順 三
正
郁 夫
たもつ
明 子
賢 子
萬 的
典 子

零戦の勇士も後期高齢者
肉まんに詰めてあるのは妻の愚痴
大物が上げ底の靴穿いている
0点を取るのも勇気いりました
飛ぶ鳥を落した人の紙おむつ
夢抱いてとぶ少年に火の匂い
果ては大物新聞小僧朝を蹴る
母のため夜店で買った糸通し
天空を支えて開く豆の花

川柳塔すみよし

岩崎

公誠報

お喋りの相手がほしいうちの猫
うちの猫向いの家で飼われてる
よく見れば猫にもなまけものがある
子猫ちゃんいつしかトドに変貌し
遠来の客を旁う猫の鈴
ねむり猫陽明門に何百年
腹立ちを猫で声で文句言い
お決まりの猫で声に負けた僕
足跡を付けたと猫を叱る母
怪談で猫が一番怖かった
猫舌の妻に慣らされ冷めた汁
居心地のいい膝を知る猫の鼻
黒猫を抱いて魔女めく夜の君
ストレスが溜まって猫は夜遊びに
暑そうにメタボの三毛が昼寝する

東 吉
志 華子
じゅんこ
寿 子
朝 子
集 一
とし子
千 里
和 夫
篤 子
舞 夢
伸 子
哲 夫
美 籠
幸 子
チエコ
昌 紀
庸 佑
克 博
末 吉
かりん
(矢)五 月
シマ子
りつえ

招き猫猫嫌いでも飾つてる
招き猫どれだけ置けば福が来る
年金のはなし猫にも言い聞かせ
知りつくす聞をニヤリと笑う猫
手土産に蟬をくわえた猫の恋
猫がみるキャットフードのコマーシャル
おおらかに猫は恋歌うたい上げ
実力を猫に知られている主人
真夜中に出かけていますうちの猫
金稼ぐ僕と猫が同じ飯
缶詰で育ちネズミは取れぬ猫
取り敢えずタマと呼んでる迷い猫
猫だまし得意の力士技の数

川柳さんだ

北野

哲男報

姑の鯖寿司の味越えられぬ
回らない寿司もあるのと孫が聞く
手巻き寿司海山の幸もり込んで
お囃子も一緒に食べるちらし寿司
お疲れと無事の産声婿のキス
満月を愛でて白髪のを寄せ
辛抱を知らぬ若者すぐ切れる
その後いかですか神戸からかしこ
はやりのグー子供頃は腹の虫
カラオケは少々飲んだ方がいい

和 代
好 文
順 子
忠
キヨミ
婦美子
朋 月
哲 夫
一 泉
二 英

秋だからそつとやさしく髪洗う
寝返りで天地逆転する赤児
朝夕は涼しくなつたと汗を拭き
うれしさは両手高々大きな輪

翠洋会

安土理恵報

寺参り人ひと人の不況風

過疎地帯寺でカラオケしています

酔つ払い片手で拝み法善寺

白壁が崩れ靈験山の寺

ジープをはいて遍路のバスツアー

ここからは風致地区だと鳴く小鳥

エコロジータ陽電池威張り出す

大脳の電池が切れてドック入り

電池抜いてうるさい男黙らせる

乾電池消費期限があつたとは

わたくしも何時か電池で走り出す

延命の電池必要ありません

苦しくて楽しかったな五十年

風鈴も僕も耐えてる炎天下

感動の出来る限りは生きられる

誘われてあいにく今日の野暮な服

折悪しく重なる仏事祝い事

久しぶり帰つてみたが妻は留守

あの娘おあいにくさま売れました

おあいにくさまです妻も子もいます

女ひとりあいにく後期高齢者

歳子

千代子

哲男

舞夢

春

茶々

桃花

尚士

正雄

浩二

満作

理恵

みつ子

日の出

昭

さと美

捷也

れんげ

すみ子

志華子

げんい

久峰

集一

照子

あいにくの雨だが欠席は出来ぬ

あいにくと手持ちがなくて詐欺のがれ

先着十名十一番目の不運

左手も右手もふさがっています

危機一髪あいにく神は留守だった

風情などほとんど無かつた風の盆

少年にあいにく日本狹すぎる

川柳塔まつえ吟社

三島

淞丘報

詫びている顔には見えぬばれた嘘

正直者に嘘を言わせるからばれる

秋空へ嘘はつかない茄子の花

嘘のない笑顔がそろそろ終電車

嘘は子供の純な心に傷がつく

嘘一つ入れて笑いを誘う人

移り気なバツタに一つ趣味がある

クレイン車の移動を見る午後刻

窓際へ席をかわつてから余裕

口移す育てつばめの愛を知る

移り行く世を追いかけてかたつむり

口ぐせが九官鳥に移つてた

奇跡がひとつ叶うなら空を舞う

宝くじもしやもしやと買い続け

金運はないが奇跡を待っている

七転び奇跡と思う助け舟

震度七奇跡をもらひ生きている

深夜二時奇跡が起こる心電図

千梢

弘子

千歩

義

富子

恭昌

楓楽

町紅

茂美

静恵

ちえこ

英子

政子

知恵子

きみえ

蘭

房子

スズコ

たえこ

幸子

昌枝

治代

澄子

和歌子

雪代

カードローンで心の洗濯して帰る

諸々のカードで財布弾け出す

目に見えぬ絆夫婦というカード

一枚のカードで落ちた鬼の首

冷蔵庫の中でカードが生きている

大切なカード盗難届け出す

願うこと一つ戦争ない世界

激辛の評をしてねとこい願う

願わくば添いとけてよと送り出す

晩年は小奇麗にして慎ましく

願うのは近い未来の君のこと

白寿まで生きて妻より先に逝く

むらくも川柳会 毛利

落日の海辺に揺れる介護法

高齢化介護が介護生んでいる

要介護ならぬつもりがいづつかなる

昨今は介護する人仏様

信じてる約束心が揺れ動く

箸を割り人は出逢いを繰り返す

ふるりの自慢が一つホタル狩り

逃げ足の早い時間を抱きしめる

欠礼は痛い所を武器にして

如己堂に永久の平和を祈る今

挿し芽した菊に一輪花開く

笹の葉にゆらす思いが一つある

風鈴の涼しさ誘う夏の夜

長吉

幸

桂子

紫晃

螢

注湖

日出子

薫

禮子

柳歩

淞丘

幸報

彰

幸

定子

宣雄

蘭水

瑞枝

俊夫

秀夫

嘉寿子

愛子

信夫

秀子

惠美子

さりげない言葉で心うばわれる
わが余生御仏信じてお念仏
使わない名刀いつしかサビがつき
行き違い涼風吹いて我を知る
涼風が秋の訪れ連れてくる

岩美川柳会

石谷美恵子報

孝行をしろと娘に言う秋の風
秋の味覚宅配便を送り出す
渋柿の赤に騙されやすくなる
あちこちの旅の予定で秋埋まる
旅帰りやつぱりわが家オアシスだ
スーパがオアシスになる真夏日だ
オアシスはテレビの前の指定席
私のオアシス街の喫茶店
生涯のオアシス君がいてくれる
ジャンケンに負けて拒んだ女偏
金積まれ拒む理由がなくなつた
幸せを拒み続けてまだひとり
延命の管は金輪際いらぬ
拒まれる度にフアイトが湧いてくる
山河越え拒否反応につよくなる
拒むより素直に生きて胸をはる
拒んでも夏草だけは生い茂る
境界の石が拒んで文句言う
お客さんの頃合いをみて桃を挽ぐ
この頃はわたしの陣地広くなり

ます美 喜美 美保 久子 清子 孝男 はるお 忠良 たぬ 稔 節子 公乃 一京 雅女 螢 圭一郎 睦子 茶子 幸安 幸枝 菖子 和子 かつみ 蟹郎 一瑠

この頃になって写経の字が丸い
ササユリが満開の頃死ねたらな
この頃は恥と頭はかき次第
心にもブラシをかけた頃が好き
神風を信じ純真だった頃
頃を見てせき立て箒立てである
被害妄想あの頃の絵に戻れない

六甲川柳会

伊勢田

おなじなら愉快に終りたいいのち
広い歩幅でゆつたり歩く人の影
空港で万一のこと考えぬ
いい夢を見せてもらった空の旅
空港に松茸運ぶ便が着き
空港の香り売ってる百貨店
お目出度い金婚式の空の旅
わだかまりすんと落ちた広い天
経文を唱えこころを広くする
鈍行で眺める里の深い山
片づけが上手で広くなった家
妻のぐち広い心で受けとめる
息子たちおでこの広さ父さん似
不器用が広い世間を狭くする
なりたいた広い心の持ち主に
あーまた大風呂敷を広げてる
踊いて世間みる目が広くなる

きみ子 重忠 清帆 一粋 よしえ 和枝 美恵子 穀報 いわゑ みつ子 能子 美穂 洋一 祥子 弘子 無限 ひろ子 正己 順子 忠貞 淳子 政一 春香 基輔 光久

倉吉川柳会

竹信 照彦報

星の降る里に優しい秋の風
原石の瞳力を増してくる
責任を酒に押しつけ出す本音
高邁な夢を持つてるイエスマン
引越した柱の傷を撫でて出る
直感で舌が見抜いた食偽装
おおきにとすんまへんとで丸く住む
人間はめがねをかけたサルである
老眼鏡かけても見えぬ恋だった
字を追うが眼鏡を忘れひどい顔
眼鏡なしで新聞読んでほめられる
虫めがね貴方のハート覗きたい
敏隠すちよつと気取って色眼鏡
運動会オベラグラスで孫さがす
それからとやがて切り出す重大事
それから話の長い雨の午後
それからという夢があり生きられる
家一歩出れば鳥にもちようちよにも
それからをこれからに変え八十路坂
それから君の囚われ人になる
それから感謝に代えて夫の世話
ひと呼吸おくれそれから笑う祖母
柿の木が見守る墓は青い海

(小)孝子 (甲)孝子 茂 武彦 千賀子 穀 楓楽 石花菜 螢 次男 鬼一 和子 喜美子 貞子 萩江 節子 醉美蓉 ひろこ 秋草 玲坊 康子 玲子 完司 賀寿恵

晩秋にタクト振ります木守柿
松茸を一本貰い柿送る

お隣の柿の食べ頃待っている
渋柿も縄に下げれば値も上る

木守柿天空高く独居する
三角をのせていずれば行く旅路

幽霊は白三角が好きらしい
大都会スクランブルは道のへそ

三角のおにぎり天辺から齧る
ハブニング口は三角目は四角

サークル檸檬

吉田あずき報

年金不安蹟いてきた命

べっぴんに見とれ難波で蹴蹴く
つらいはずなのにあなたはよく笑う

蹟いたからこそ今日がある私

仕切られて助かり仕切られて怒る

見果てぬ夢書き出してみる秋夜長

自己満足ながらいい汗かいてます

頑張るのも程々ですと影法師

蹟かぬように歩幅は取っている

蹟かれ蹴とはされてる石も痛つ

つまずきは誰にでもあるくじけまい

克枝

睦枝

龍枝

美津恵

泰輔

由紀子

和枝

京子

よしえ

茶子

日出子

重忠

照彦

遠野

哲夫

扶美代

楓楽

蕉子

昌紀

美龍

たもつ

光久

義子

みつ子

米子住吉川柳会

渡辺多美子報

お世辞でもまずは素直に聞いておく
メニユーなど見ずにひとまず生ビール

公園で私を待っている鳩がいる

この夏はオリンピックにはげまれ

八月に咲くはずだったのに異変かな

二度幼児孫を相手に夜が更ける

年金の減るだけ長く生きてやる

川柳塔打吹

野口節子報

月明りうきうきさせてしゃべり合う
満月が心の曇りぬぐい去る

三日月が心をぐさり切り刻む

よく転ぶ杖にしっかりとせいと云う

転んでも鬼の手だけは握らない

転んだら転んだままになる恐怖

引力のままに転んでいる地球

また転ぶ夫の鼻が低くなる

鬼こっこした野っ原も遺蹟あと

野晒しの無縁塚にも女郎花

野良猫が慣れたカメラへポーズする

休耕田無策野草がおい茂る

野に下り思いのままの味になる

椅子投げて後は野となれ山となれ

北滴の曠野にのこす鉄の跡

したわれる教師野武士のような人

野良仕事一重の母が鉄下ろす
どこまでも付いて行けない野辺送り

百万円泊つてみたい貴賓室

盆栽と雨が気になる三泊目

六億円くすねて泊る留置場

泊り宿確かめてから予定組む

奥の間から泊って行くと父の声

泊ろうか廊下に簪立てである

お泊りは自由枯野の地蔵さま

寝泊りをするのに調度良い穴だ

あぶら蟬七泊八日グッドバイ

ロソクが揺れる泊つて帰ろうか

僕の船よこれた星に停泊中

寝袋をさげて二十の冒険心

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

重陽の節句ですバチンコ屋へ向かう

駅弁を食べにローカル線に乗る

緋の色を溶いて絵皿は秋になる

山深く入って山を見失う

命の果てを知るや物憂げ秋の蝶

後もどき昔の遊びゆびかぞえ

仰向けに夏は命を終えた蟬

久し振話し足りない茜雲

好きなことしてひとりの昼下が

小児科のナースと鶴を折っている

青春をさらさらきらりと燃えつくす

紀美恵

泰輔

禎元

玲子

美代子

睦子

美ツ千

和枝

三津子

幸子

石花菜

きみ子

完司

節子

桜竜

浩三

秋雄

一風

耀一

榮子

欣之

秋子

寿鶴

あかり

幸男

虫の声野外科理は豪快に
管理者が無知労働者にムチ振るう
とんがりも愚痴も掃き出す秋の天

堺川柳会

河内 月子報

虫達のおかげゴーヤの受粉出来
虫食いのキャベツ有機という誇り
鈴虫もメスが元気に生き残る
辛抱の連続だった丸い石

禁煙の三日目勝負どころです

長生きは辛抱しない怒らない
よく笑う妻はストレスないらしい
困っても母は笑顔を忘れない
失敗の数と同じの笑いじわ

耐え忍び羅漢のように丸くなり
いい返事辛抱強く待っている
ごきぶりが僕の頭に体当たり

辛抱せなごうせあつちが先に近く
遠慮せず忠告したら誤解され
にんまりと笑いたのしむ仕掛人

辛抱ゼロすくすくついですく別れ
笑顔で力のかがり胡麻をする
辛抱がくれた褒美がいまの椅子

蟬時雨止んで静かな秋の虫

へその緒が取れた時から笑ってる
辛抱のできぬ大人が子をしつけ
辛抱して聞いたりなはれあと一寸

柳 伸
紀 雄
弥 生

梓
好 子

扶美代
五月

さくら
恵 勇

日の出
和 夫

りつえ
かりん

八千代
としお

玄 也
舞 夢

時 雄
ノン子

冬 虹
鐘 造

公 誠
雅 明

像 山

目が合うと笑ってしまう猫とい
秋の蟋蟀だけは知っている
お多福もかけがえのない妻となり
ころころと笑う女に騙される
デパートでカブト虫買う親子連れ
辛抱の足りない人が死に急ぎ
阪神に待つ辛抱を鍛えられ
辛抱は出来んと顔に書いてある

川柳やがわ

籠島

不可侵のバートを持って仲が良い
屁理屈を言うなと負け犬吠えもせず
条件が合わず再婚むつかしい
生き甲斐へ走りつづけている炎

ライバルと競う生きがい第二章
条件へプラスマイナスして生きる
鍵っ子に走り書きして母バート
薄給をバートで知った二度の職

生きがいがある充実する日記
あの世まで胸に納めてある宝
生きがいのマドンナがいた青春譜
閻魔さんに見せる写経をためている

スッポンは月を天使とあこがれる
あたたかニューズに飢えているダンボ
決めました何もなければ愛がある
両耳の意見がずれているピアス

拾った小石どこかへ投げてみたくなり

篤 子
半 銭
千 代

朋 月
綾 乃

文美恵
月 子

恵子報
弘 風

とし子
さち子

柳 弘
かすみ

栄 二
郁 夫

集 一
ルイ子

麗 修
日出子

朝 子
弘 一

寿 子
一 風

総裁選選び踊らされていません
酔美容僕も宵から酔っている
足元を見つめなおしている初秋

富 柳 会

池

森子報

遠回りばかりしている舌足らず
女の目で選ぶ一枚の野原
あれこれと知能指数が邪魔をする
一枚の切符と探す着地点

ふつと知能ぐらう主義主張
昨日とは違う空気を吸っている
響くまであなたの鐘を連打する
二人三脚何度か転ぶバートナー

時として知覚過敏の歯があばれ
鬼灯が熟れて行先照らし出す
諦めていたがひよっこりコウノトリ
次次に咲く水蓮の水濁る

ひよっこりとやって来たのは福の神
悠久の鐘樓仰ぐ寺内町
ウエディングベルで始まる化かし合い
晩学の手で釣糸垂れている

変身も知らぬ母の手節くれる
知らぬふりエゴとマナーに背を向ける
祝福の鐘が鳴りお腹の子が動く
ひよっこりと来てはハッパをかけられる

立ち食いのうとんで父の背もする
子の夢はブラックホールの奥にある

鈍 甲
仁 清
恵 子

アキ
扶美代
壽 峰

佳 子
千 華

登 子
あかり

よしみ
深 雪

千恵子
七 朗

和 子
淳 司

ひろし
澄 子

甘 良
彦 次

高 鷲
伸 雄

擦り切れた想い出横顔のあなた
ひょっこりを繕く思い出し笑い
梅雨明けを背伸びして待つ夏の花
昼食は妻の手作りパラダイス
天地悠久生きたる勇気をもらう鐘
褒められてひょっこり狂い咲く花よ
街角のポストも愛の風を読む
雨期最中夢の中で雨蛙

川柳大阪

長井 善純報

山削り海埋めたてた負債額
天引と言う刃で削る老の命
防衛費削れば福祉厚くなる
すりこぎも母も丸く削られる
赤ペンを削りなおした正義感
人間が地球を削る温暖化
削るのは簡単森は返らない
命削りそれでも詠んだ反戦句
削るのは道路と橋と基地の数
逃げ道を作ったからの減らず口
道ならぬ恋をするにはちと遅い
父の道継いで絆を太くする
道半ば迷いをとって身を洗う
平和への道標遠い北の国
一本道行きたいけれど壁があり
陽のあたる坂道妻と腕を組む
古希近し大病なしで恙なく

奏子 欣之 武人 紅紫朗 信子 鬼焼 森子 比呂志 川童 鉄心 章久 重人 芳香 笑風 ダン吉 美花 柳弘 東吉 一風 信醉 彦太 和 まつお 紀雄

はめ上手その気になった反抗期
八十点まだだいたいけるとほめてやり
ほめてんか呼名されずも授句する
マラソンはほめてあげたい完走者
怒るよりほめて育ててやる新芽
父の遺書妻をほめよと書いてある
あの鼻はほめてもううて上向いた
逆上りやつと出来たんほめたって
新一年注文いっぱい背なに負い
とりあえず注文をする生ビール
もう歳や注文つけぬ早よもうて
注文はするが注文聞かぬ人
あり過ぎるほどある国への注文

かよこ 照月 花笑 功 朝子 修 柳昌 美世子 洛醉 勝弘 五月 一歩 善純

「各地句会だより」掲載について

掲載について

川柳塔社の小集句会で、紹介・ア
ピールをご希望の会は川柳塔社事務
所まで原稿をお送り下さい。
会の様子や会員の集合写真を必ず
添付して下さい。
なお、掲載順・添削については編
集部に一任願います。
内容―会の特色・行事・これからの
予定など自由
行数―たて20字×54行
(400字詰原稿用紙2枚と14行)

「愛」の芸文まつり

川柳作品募集要項

募集期間 12月20日まで(当日消印有効)
募集内容 あなたの素敵な「愛」を
テーマにした川柳を募集

応募規定

一般の部(高校生以上)とジュニアの部
はがき、電子メール、携帯電話から応募
作品、住所、氏名(ふりがな・雅号)・年齢
職業(学校名・学年) 電話番号明記

出品料 無料

応募資格 不問

尾藤一泉

賞 選者

一般の部
天位1点〓5万円
地位2点〓1万円
人位6点〓5千円 他協賛賞など

ジュニアの部

天位1点〓図書カード5千円分
地位5点〓図書カード3千円分
人位15点〓図書カード1千円分

発表と表彰式 21年2月

応募先 〒992-0045

山形県米沢市中央1-4-9 20
米沢市芸術文化協会

「愛」の芸文まつり川柳係
電話 0238-122-7015

主催 米沢市芸術文化協会
後援 (社)全日本川柳協会、米沢市他

柳界展望

○第22回堺市民芸術祭川柳大会は9月14日(日)、堺市梅文化会館にて、132名の出席により開催。同人の秀句。

結局は一人になってゆく
ダブル 村上 直樹

○没後70年鶴彬顕彰碑建立川柳大会は、大阪市立中央青年センターに於て287名の参加により9月14日(日)開催された。同人の秀句。

にこやかに悪に傾く猫じ
やらし 本本 朱夏

○島根県川柳大会は9月21日(日)江津市に於て120名の参加により開催された。同人の秀句は次の通り。

すき間から知れたがり屋
の蛇苺 伊藤 寿美

神に試されながら人間らしくなる

銭山 昌枝
卵かけごはんの醤油売り
される 銭山 昌枝

介護して介護をされる日
を思う 伊藤 寿美

○第58回富田林川柳大会、9月20日(土)、富田林市中央公民館に於て開催、参加者87名。同人の天位。

縁側に一つ余裕が置いて
ある 中崎 深雪

安心の中でいのちの音が
する 高田美代子

火よ風よ女ごころは直火
です 池 森子

○川柳明日香、第9回石原青竜刀賞受賞句が決定し、9月23日表彰された。同人の受賞句正賞。

徘徊の哀しいまでにタフ
な足 播本 充子

なほ標準として
妥協したときから足跡が
消える 三宅 保州

○吹田市民川柳大会は9月

28日吹田メイシアターにて開催。参加134名、同人秀句。

損得で動く男に骨がない

山口 光久

▽柳界動向△

○10月18日午前1時からの放送NHKラジオ深夜便の中、岩佐ダン吉氏(参予・岸和田市)が、人ありて街は生きのコーナーに於て「鶴彬の志」を語った。

○木津川計の「一人語りの長谷川伸劇場」11月2日(日)

和歌山大学生涯学習教育研究センターに於て公演。資料代として500円。定員100名。

▽訂正とお詫び△

10月号96頁中段5行目(清記・直樹)↓(清記・富美子)112頁下段13行目、一筒

↓一屯。

▽新誌友紹介△

福岡市

紹介者

鳥取市

紹介者

三宅 須美

田中 章子

牛尾 米之

中村 金祥

新同人紹介

江島谷

勝弘

田浦

実

安田

忠子

澤田

定子

常任理事会 9月26日(金)出席17名、第14回川柳塔まつり最終確認①同人総会②記念句会(セレモニー、句会)午後1時30分

句会名	日時と題	会場と投句先
堺川柳会	14日(金)午後1時から 残る・割勘・「折句(しなの)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
岸和田 川柳会	15日(土)午後2時締切 遠慮・惜しむ・がちがち グループ	岸和田市立福祉センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
岬川柳会	16日(日)午後1時半締切 嫌い・オ女・自然	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 藤井寺	16日(日)午後2時締切 妹・ずばら	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時50分締切 動く・化粧・テスト・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	18日(火)午後1時から 恵み・勲章・みえみえ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
川柳塔 すみよし	22日(土)午後2時45分締切 未来・場・星	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸会 川柳	22日(土)午後1時から 痒い・辿る・虫	和歌山市勤労者総合センター4F 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後7時締切 結ぶ・責任・かたち・噂	東大阪市社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民会 川柳	23日(日)午後2時締切 リポート・みかん・敗ける ばらばら	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	23日(日)午後1時より ネット・無駄めし・側近	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
松露 川柳会	24日(月)午後7時半から 痛い・まだまだ・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪 川柳会	24日(月)午後1時から 逆・姿・まるい・雑詠	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	25日(火) 吟行・城南宮 ひっそり・易い・余程 当日雑感	集合10時40分 地下鉄・近鉄竹田駅西口 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前9時半から 愛・生・住・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	1日(土)午後2時締切 上・降りる・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城北 川柳会	1日(土) 吟 行 地球・ガラス・囁目吟	信貴山 JR王子駅北口 タクシー乗り場 集合10時 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉 川柳会	1日(土)午後2時締切 ふる(降る・振る・古)・名産 文化	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳 ねやがわ	3日(祝)午後1時締切 第32回 寝屋川市民川柳大会 知識・創造・マナー・あわてる・学ぶ・美しい	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 塔な	6日(木)午後1時半締切 川柳塔なら10周年記念大会 青・似・良・志・なら	JR王子駅 近鉄新王子駅 王寺町「やわらぎ会館」 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳 塔みちのく	8日(土)午後5時半締切 棒・表札・藪	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳 塔打吹	8日(土)午後2時締切 磁石・歩く・散る	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-1 牧野芳光
川柳 塔まつえ	8日(土)午後2時締切 神・介護・割る・リーダー	松江市西津田 松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳大阪	8日(土)午後1時から 短縮・裏・飽きる	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳 塔わかやま 吟社	9日(日)午後2時締切 転ぶ・地味・ライバル・「薬」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
八尾市民 川柳会	9日(日)午後2時締切 再会・狂う・ばりばり 雑詠	山本コミュニティセンター3F(近鉄大阪線山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 未来・焦る・円い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
川柳 塔唐津	10日(月)午後1時半から 祈る・開く・みかん	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時半締切 雑学・ごめん・闇	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
尼崎 尾浜 川柳会	11日(火)午後2時締切 情・くだる・自由吟	尼崎市女性センター(テレビエ)阪急武庫之荘駅歩4分 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治

編集後記

☆10月5日の第14回川柳塔まつりには233名のご出席有難うございました。

☆懇親宴には毎月川柳讃歌を執筆頂いている木津川計先生がご来席下さいまし

た。前主幹橘高薫風先生と親交があり、川柳に造詣の深い木津川先生には、違っ

た角度からひと味違う鑑賞文を書いていただき好評を

いただいています。常々組上に乗せている川柳家に会

えるチャンスとも言ってお

られました。

☆檸檬抄にいつもたくさん

の投句をいただき有難うござ

います。今月から投句数を

を記載しました。大変厳選

であることが分かっていた

だけだと思います。

す。川柳雑誌創刊号（大正13年2月）から最終号まで

が閲覧できるからです。赤茶けて破れそうで、年代を感じさせますが、合本にさ

れており、麻生路郎寄贈として保管されています。

川柳を是非後世に伝えたいという路郎師の想いが感じられます。

昭和15年3月号から、こんな路郎師の言葉拾いしました。

「真実の一句は技巧の千句にまさる。佳句を作ろうとすれば佳句は逃げる」

☆昭和18年12月号には、戦局のせいしかひとまず終止符

を打つとあり、21年8月不朽洞会員や柳友に乞われて

再刊に踏み切ったとあります。表紙のない川柳雑誌で、

紙質も粗悪。路郎師の御苦

勞に胸締め付けられる思いをしました。

（希）

ひとこと

鶴彬との、長い長い一日

「暁をいだいて闇にゐる蕾」

ようやく、鶴彬の銘石（表向き、こう呼ばないといけないらしい。）

が幕の下から現れた。ご遺族のお話や、正さんの五年余りに亘る苦

労話をお聞きした後でもあり、また、私自身、除幕式に立ち会った、

は生まれて始めてであった事もあり、近年にない感動であった。

昼食は、二十三人でぞろぞろ、大阪城内のお食事処へと向った。

ワテレビ番組で紹介をした本を読む。「パコと魔法の絵本」という。途中までの紹介で「さて後はどうなっ

たでしょうか」の言葉に誘われた次第だ。「気安く私の名前を呼ぶな」という偏

屈な老人と、事故で一日しか記憶が持たない七歳の少女が病院で出会う物語。

ワ巨万の富を得ながら孤独な老人が、パコという天使のような少女を知ることによつて変わっていく。「一

日しか持たない記憶」とは自分にもやってくるのかとも知れないと思ひなが

ら……涙なしでは読み終える事が出来なかった。まさしく魔

たもつさんが「皆、天井でええな。」と手際よく取りまとめた。さすが、元校長先生と、感心すると共に、残りの二十二人が、たもつ先生に引率された小学生に見えてきた。

懇親会の後、梅田で飲みなおそうと誘われ（命令され？）梅田へ向った。この辺りから記憶がなく、梅田の何処で何を食べて何を飲んだのか、全く分からない。

鶴彬との感動的で楽しい、しかも、長い長い一日が、終わった。

（井丸 昌紀）

法だった。それは少女に起きた事ではなく、偏屈な老人にかかった魔法だった。

ワパコはどうなったかって心臓の悪かった老人が亡くなると思ひきや、事故の後遺症の悪化でパコが亡くな

る。二人を取り巻く病院での人達の人生を織り交ぜな

がらの物語でした。（恵）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(1月号)」

地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「未来」 (11月15日締切)

1月号発表

木本 朱夏 選 — 共選 — 高瀬 霜石 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月から半年 月から一年 5000円 9800円 該当の方に○をつけて下さい			

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 00980-4-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句)
河内天笑選

水煙抄 (8句)
小島蘭幸選

愛染帖 (3句)
新家完司選

檸檬抄「未来」
(2句)
高瀬霜石共選

一路集 (3句)
「開く」
「みかん」
「祈る」
政岡日枝子選
川端一歩選
福本英子選
鈴木公弘担当

2月号
檸檬抄「鍵」
一路集「騒ぐ」「未練」
「猫」
初歩教室「豆」

本社11月句会

とき 11月7日(金) 午後1時開場・2時締切り
開催時間がかりましたので、ご注意下さい。

ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441

おはなし「命をいただいて」

席題「さっぱり」
兼題「溝」
「掴む」
「リード」
「苦手」

伊藤正哲選
藤井正雄選
高島啓子選
村上直樹選
宮崎シマ子選
坊農柳弘選
河内天笑選

会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社12月句会 8日(月) 午後1時から

兼題「新しい」「鐘」「馴染む」
「コンビニ」「無口」

第27年度 夜市川柳募集

第6回「船」赤松ますみ選
ハガキに3句 11月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇〇八年(平成二十年)十一月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

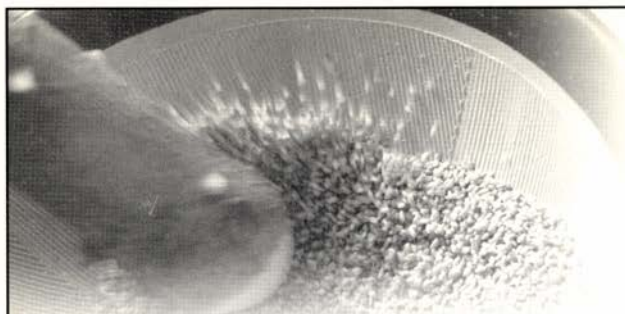
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六・六七九・三四九〇番
振替 〇〇九八〇・四二九八四七九番

オニザキの

すりごま



自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。
オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。

株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)